埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第145集

坂戸市

# 稲荷前遺跡(B・C区)

住宅・都市整備公団坂戸入西地区土地区画整理事業関係
埋蔵文化財発掘調査報告

— Ⅷ —

(第3分冊)

1994

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

# 目　　次

坂戸市

## 稲荷前遺跡（B・C区）

序

例言

凡例

（第１分冊）

Ⅰ　調査の概要 …… 1

1　発掘調査に至る経過 …… 1

2　発掘調査・報告書刊行事業の組織 …… 2

3　発掘調査・報告書作成の経過 …… 2

4　発掘調査の方法 …… 3

Ⅱ　立地と環境 …… 4

Ⅲ　遺跡の概観 …… 11

Ⅳ　B区の遺構と遺物 …… 16

1　B区の概観 …… 16

2　古墳時代前期の遺構と遺物 …… 18

（1）住居跡 …… 18

（2）方形周溝墓 …… 26

（3）土壙 …… 55

3　古墳時代後期～平安時代の遺構と遺物 …… 56

（1）住居跡 …… 56

（2）掘立柱建物跡 …… 233

（3）井戸跡 …… 245

（4）土壙 …… 256

（5）包含層 …… 263

4　中・近世の遺構と遺物 …… 265

（1）掘立柱建物跡 …… 265

（2）井戸跡 …… 272

（3）土壙 …… 278

（4）溝跡 …… 281

（5）火葬墓 …… 287

5　時期不明の遺構 …… 289

（1）井戸跡 …… 289

（2）土壙 …… 290

（3）土壙群 …… 290

6　グリッド・表採遺物 …… 292

（1）縄文土器 …… 292

（2）弥生土器 …… 292

（3）グリッド出土土器 …… 294

（4）表採遺物 …… 296

（第２分冊）


V　C区の遺構と遺物 ……301
1　C区の概観 ……301
2　古墳時代前期の遺構と遺物 ……306
（1）住居跡 ……307
（2）方形周溝墓 ……337
（3）土壙 ……388
（4）土壙墓 ……389
3　古墳時代後期～平安時代の遺構と遺物 ……391
（1）住居跡 ……392
（2）掘立柱建物跡 ……534
（3）竪穴状遺構 ……544
（4）井戸跡 ……546
（5）土壙 ……556
（6）円形周溝状遺構 ……564
4　中・近世の遺構と遺物 ……566
（1）掘立柱建物跡 ……567
（2）竪穴状遺構 ……579
（3）井戸跡 ……580
（4）土壙 ……599
（5）溝跡 ……601
（6）敷石遺構 ……615
（7）火葬墓 ……617
5　時期不明の遺構 ……618
（1）土壙 ……618
（2）井戸跡 ……618
6　ピット出土遺物 ……622
7　グリッド・表採遺物ほか ……624
（1）グリッド出土遺物 ……624
（2）表採遺物 ……626
（3）A区補遺 ……627


（第３分冊）


VI　調査のまとめ ……635
1　古墳時代前期 ……635
（1）出土土器について ……635
（2）遺構について ……648
（3）B区第１号土壙墓出土鉄剣について …651
2　古墳時代後期～平安時代 ……659
（1）出土土器について ……659
（2）小形瓦について ……668
（3）集落変遷について ……671
（4）胎土分析結果から ……680


（附篇）


1　稲荷前遺跡出土土器胎土分析（土師器）鑑定報告 ……690
2　稲荷前遺跡出土土器胎土分析（須恵器）鑑定報告 ……701

# Ⅵ　調査のまとめ

## 1．古墳時代前期

稲荷前遺跡で検出された古墳時代前期の遺構はＢ区で住居跡４軒、方形周溝墓16基、Ｃ区で住居跡15軒、方形周溝墓19基がある。その他、土壙墓が１基検出されているが、時期的には５世紀代に下がるものと推定され、住居跡及び周溝墓群とは時期を異にするものと考えられる。ここでは住居跡及び周溝墓出土の土器分類と概括的な時期について述べるに留め詳細な検討は他日を期したい。

### （1）　出土土器について

分類

壺Ａ　いわゆる二重口縁壺を一括した。全体的に擬口縁部の張り出しが短い点に特色がある。

Ａ１類：頸部が直立し口縁部が斜め上方に直線的に伸びるもの。胴部は球形を呈する。口縁部及び胴部外面はヘラミガキ調整され作りは丁寧である。Ｃ区５号周溝墓11･12がある。大型品（Ｉ種）とＣ区７号周溝墓７はその小形製品（II種）である。

Ａ２類：二重口縁部が浅く外反度が強いものである。Ｃ区10号周溝墓２がある。

Ａ３類：頸部が外傾し口縁端部が水平方向に延びるもので口唇部は上方に摘み上げられ、端部は面取りされる。Ｃ区７号周溝墓10がある。

Ａ４類：頸部が短く中膨らみするもの。ＣＳＲ08-２がある。

Ａ５類：口縁部に棒状浮文を施すものである。Ｃ区10号周溝墓１がある。

壺Ｂ　複合（有段）口縁のものを一括する。バリエーションは豊富である。

Ｂ１類：幅広の複合口縁を呈し、複合部が内弯気味に立ち上がるもの。器形的には弥生時代後期の南関東系土器群の系譜を引くものと考えられる。Ｃ区１号周溝墓24、５号周溝墓19、17号周溝墓７は無文化している。Ｃ区２号住居跡１は欠損部位があり不明確であるが、同類となるかもしれない。口縁部と胴部に縄文帯をもつ。縄文加飾されたものは比較的多く見られ、東松山市大西遺跡62号住、同市籠田遺跡７号住では吉ヶ谷式に伴出した。中耕遺跡ではＳＲ28-１、ＳＫ27-１の大形壺も同系列に属するものであろう。

Ｂ２類：比較的幅広の複合口縁を呈し、頸部から口縁部にかけて直線的に外傾するもの。頸部の括れが大きく口唇部が尖り気味となる。Ｂ区５号周溝墓１。

Ｂ３類：いわゆる前野町式系統のものと思われ、口縁部に縄文帯をもつものと、刷毛目調整のものがある。Ｂ区２号住居跡３、Ｃ区16号周溝墓１、Ｃ区15号住居跡３等がある。

Ｂ４類：口縁部に輪積痕を残し複合口縁状にしたもの。複合部が薄い点に特色がある。複合部が幅狭のものと幅広のものがある。胴部は卵形に長胴化している。Ｃ区11号周溝墓１・10がある。

Ｂ５類：比較的幅狭の複合口縁をもち、口縁部が外反するもの。幾つかのタイプがみられるが取りあえず同類とする。Ｃ区15号住居跡４、Ｃ区５号周溝墓13、Ｃ区12号周溝墓１がある。

Ｂ６類：幅狭の複合口縁風で指頭痕を残すもの。系統は不明確であるが、あるいは吉ヶ谷系譜のも

のかもしれない。

B７類：口縁部に２乃至３段の輪積痕を残すいわゆる吉ヶ谷系の壺。胴部が下膨れのものと胴部中位に最大径をもつものがある。C区１号周溝墓19～21。

B８類：幅狭の折り返し口縁をもつもの。前野町式の系譜を引くと思われる。C区６号住居跡６がある。

B９類：口縁部中位に粘土を貼り付けるもので、外見的に二重口縁風になるもの。口縁部は大きく水平方向に広がる。C区６号周溝墓１。

B10類：外反する口縁部外面に粘土を貼り付けるもの。頸部は短く直立する。系譜は不明確であるがパレス壺の影響かもしれない。C区９号住居跡１。

壺C　単純口縁壺をまとめる。

C１類：口縁部が直線的に外傾するもの。胴部が算盤玉状をなすもの(a類)、球形を呈するもの(b類)がある。C区１号周溝墓、C区17号周溝墓８などがある。

C２類：頸部が立上がり、口縁部は緩やかに外反するもの。C区１号周溝墓16、C区７号周溝墓12、C区10号周溝墓４がある。

C３類：小形の刷毛目調整壺。胴部が下膨れのもの(a類)と球形をなすもの(b類)がある。B区１号住居跡１、B区２号住居跡５等がある。

壺D　広口壺をまとめる。

D１類：口縁部が短く直立気味のもの。口縁部は丁寧なヘラミガキが施される。C区12号住居跡16。

D２類：複合口縁の広口壺。口縁部加飾の有無により、縄文をもつもの(a類)ともたないもの(b類)に分かれる。C区11号住居跡１等がある。

D３類：小形の単口縁広口壺である。C区１号周溝墓16がある。

X類：頸部に凸帯を巡らすもの。凸帯状には刻みが加えられる。単口縁に補描したが、二重口縁となる可能性もある。東海系であろう。C区７号周溝墓６がある。

坩　中・小形の壺のうち、胴部が球形及至扁球形に膨らみ、口縁部が直線的、または内弯気味に延びる精製の壺をまとめた。かなりバラエティーが見られるが器形により大きく６類に分け、同様な器形のものは、相対的に大きいものをⅠ種、小形のものをⅡ種とした。

坩A：口縁部が比較的長く、僅かに内弯気味となるもの。大小がある。

坩B：口縁部がA類に比して短く、直線的に伸びるもの。

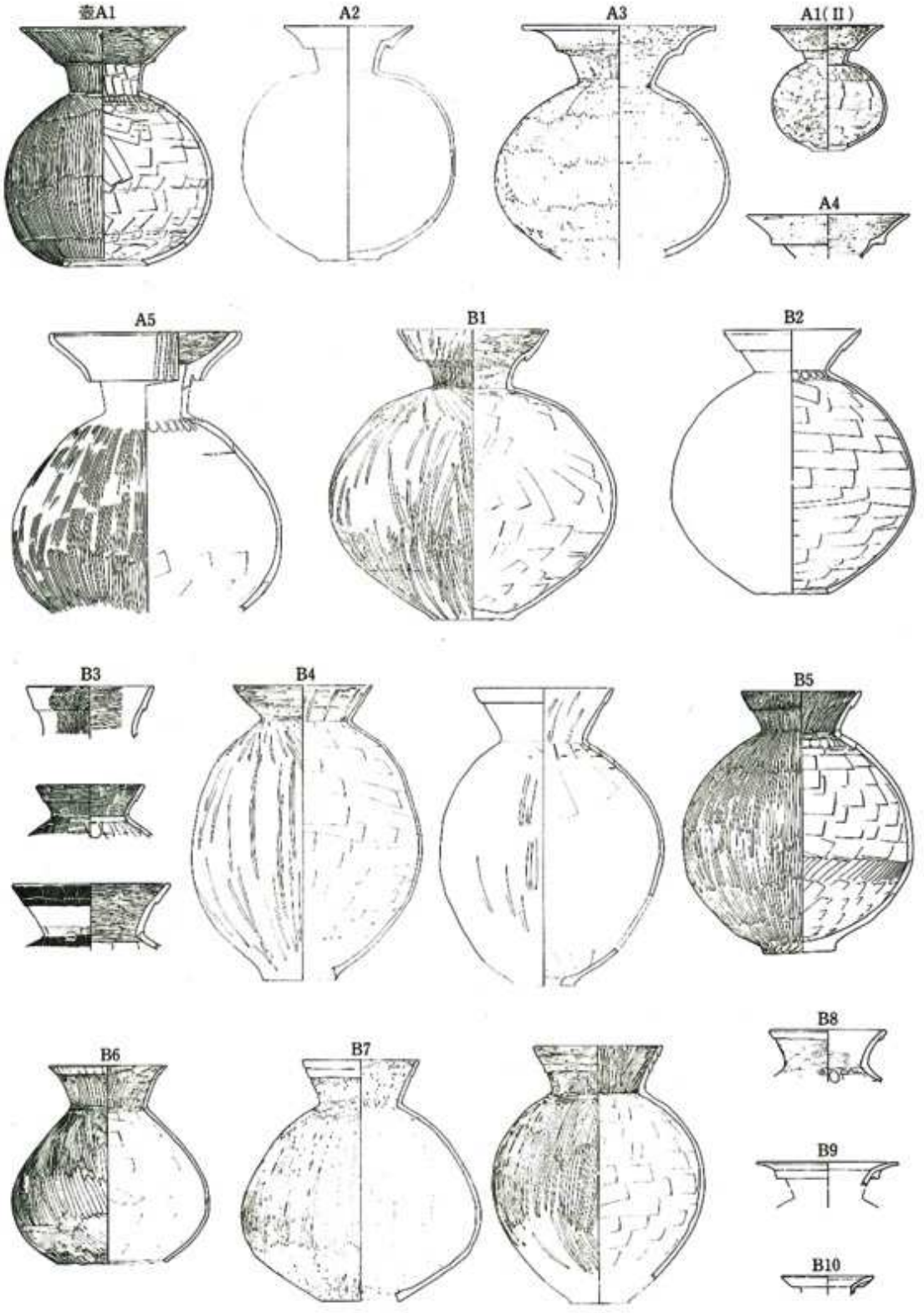
坩C：扁球形の胴部に内弯気味に大きく開く口縁部をもつもの。

坩D：扁球形の胴部に緩やかな「S」字を描いて外反する口縁部をもつもの。口縁部と胴部上位に細いヘラ状工具による連続山形文が巡る。

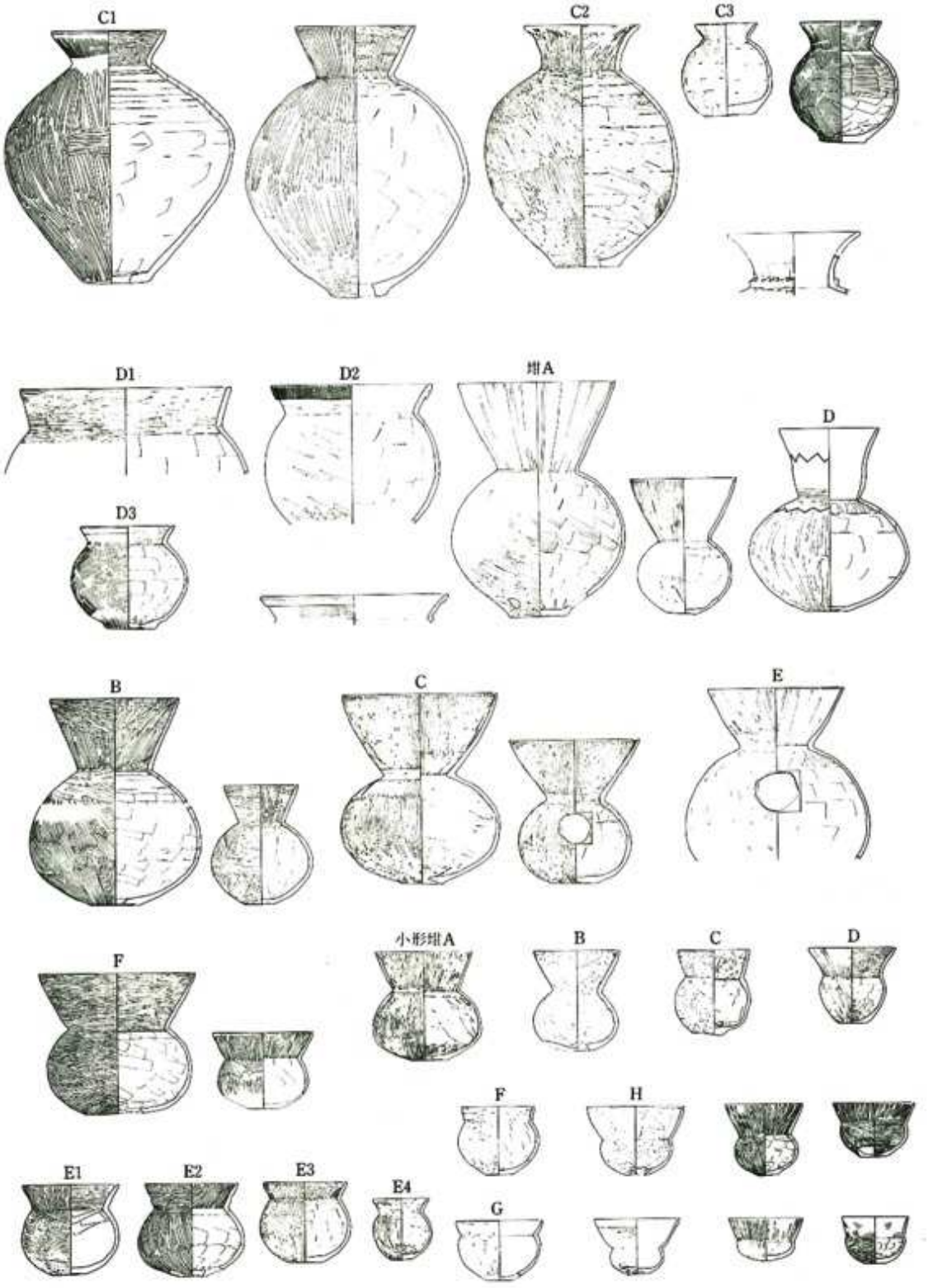
坩E：球形の胴部に、短く内弯気味に開く口縁部をもつもの。

坩F：扁球形の胴部を呈し、頸部のしまりが弱いもの。口径と器高の差があまりなく全体的にひしゃげたような器形となる。他の坩類に比してやや小形である。

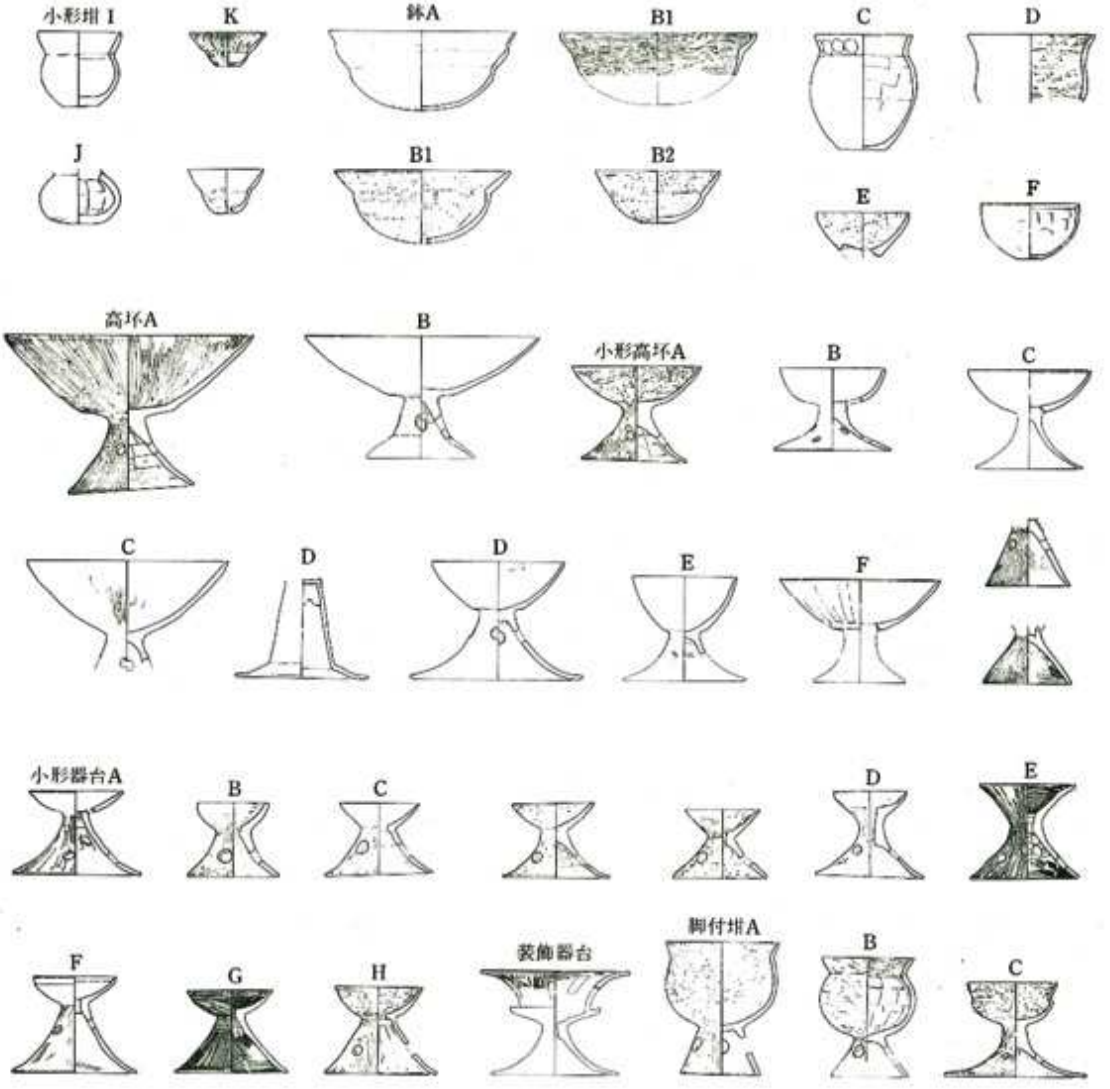
小形坩　概ね器高が12cm以下の単口縁壺類をまとめる。一部を除き、ヘラミガキを多用する精製の土器群である。バリエーションは豊富である。




第599図　土器分類図(1)




第600図　土器分類図(2)




**第601図　土器分類図(3)**

A類：扁球形に大きく張る胴部に外傾度が弱く直線的に立ち上がる口縁部をもつもの。

B類：球形乃至下膨れの胴部に内弯気味に開く口縁部をもつもの。坩A類またはC類の小形品ともできる。

C類：胴部の膨らみが弱く、口縁部は直立気味となるもの。

D類：口縁部が大きく外反するもの。

E類：球形または扁球形の体部に短く外傾する口縁部が付くもの。最大径は体部にあるものが大半である。

E1類：口縁部が短く直線的に伸びるもの。

E2類：E1類に類似するが、口縁部中位に段をもつもの。

E3類：口縁部が短く外反するもの。

E４類：E３類に比して小さく胴部が球形になるもの。

F類：口縁部が短く直立するもの。

G類：口縁部が短く内弯するもの。

H類：いわゆる小形丸底壺の系譜下にあると思われるものをまとめる。バリエーションは多い。

I類：口縁部が短く内弯するもので、やや器壁が厚いもの。

J類：口縁部を欠くが、胴部は厚手で頸部の括れが大きいもの。

K類：いわゆる平底坩、または小形坩H類に似るもの。非常に小形の製品である。

鉢

A類：浅身の器形で口縁部に段をもつ。口唇部は僅かに外反し、底部は丸底をなす。畿内系譜のいわゆる屈曲口縁鉢である。BSR07-4がある。

B類：浅身の器形で口縁部は「く」の字状に強く折れる。底部は丸底乃至窪み底となる。BSR13-1等がある。

C類：長胴の器形で口縁部は短く僅かに外反させるもの。

D類：頸部から口縁部にかけて緩やかに外反するもの。

E類：椀状の器形をもつもの。口縁部は短く内弯気味に立上がる。

F類：椀状の器形をもち、口唇部内面は内傾する面をもつ。

高坏

A類：坏部は深めで下端に稜を有するもの。脚部は短く八の字状に開く。

B類：坏部は浅く大きく開くもので坏部下端には弱い稜をもつ。脚部は屈折する。

C類：脚部との接点からそのまま大きく開くもの。

D類：長脚の高坏で裾部は強く屈折する。器壁が薄く、透孔をもたない。

小形高坏

A類：坏部下端に僅かな屈曲をもつもの。

B類：坏部が椀状を呈するもの。

C類：坏部が半球形を呈するもの。

D類：坏部下端に稜をもつもの脚部は八の字状に大きく開く。

E類：D類に類似するが口径が小さく坏部が深いもの。

F類：坏部下端に弱い稜をもち、外面がヘラナデ調整されるもの。

その他、脚部には基部が細く直線的に延びるものと、内弯気味に開くものがある。

小形器台

A類：受部が浅く皿状をなすもの。

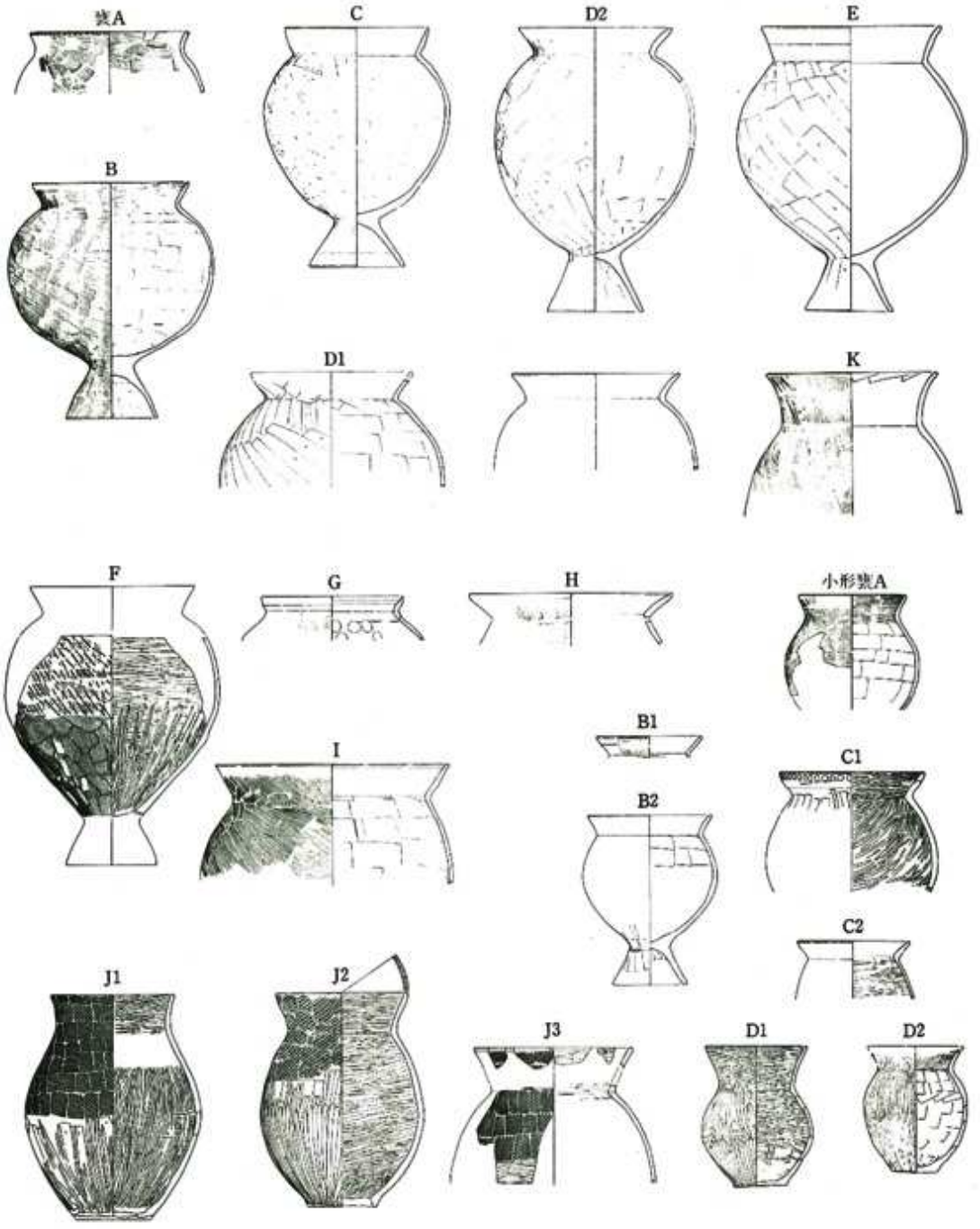
B類：受部が椀状で、厚手のもの。

C類：受部が直線的、または僅かに内弯気味に開くもの。

D類：受部が浅く、脚部との移行部に筒状部分を有するもの。

E類：受部、脚部ともに外反するもの。

F類：受部端部が小さく上方に立上がるもの。




**第602図　土器分類図(4)**

G類：受部の中位から上位に稜をもち、端部は外反するもの。

H類：受部下端に稜をもち、受部はやや深めで内弯気味に開くもの。

装飾器台　1点のみである。長方形の透孔をもつものである。

脚付坩

A類：頸部の括れが弱く口縁部は短く外反するもの。

B類：小形坩E３類に脚を付したもの。

C類：偏平な小形坩に大きく開く脚部を付したもの。

甕(台付甕)

A類：口縁部は弧を描くように外反するもので口縁部が短いもの。刻みを有するもの(A１類)と刻みをもたないもの(A２類)がある。

B類：口縁部下位の屈曲がより強いもの。口縁端部は撫でられ丸みをもつ。

C類：口縁部下端が「く」の字に折れるもので、口縁部は僅かに内弯気味に立上がるもの。

D類：口縁部が「く」の字状に外反するもの。胴部が球形に膨らむもの(D１類)、胴部がやや長胴化するもの(D２類)に分かれる。更に調整技法により、刷毛目調整のもの(a)、刷毛目調整後箆削りを伴うもの(b類)、ナデ調整のもの(c類)に細別される。

E類：口縁部が「く」の字に折れるもので、口縁部が長く斜め上方に延びるもの。

F類：胴部外面刷毛目調整後、上半に縄文を施すもの。内面はヘラミガキ調整される。器形は不明確であるが、台付甕になる可能性がある。

G類：口縁部が受け口状のもの。胴部器壁は厚い。

H類：口縁端部が僅かに摘み上げられるもの。

I類：大形の甕。口縁部は「く」の字に折れ、端部は僅かに内傾する面をもつ。

J類：胴部上半から口縁部にかけて縄文施文する吉ヶ谷系の甕。頸部の屈曲が弱く、口縁部が上方に立上がるもの(J１類)、頸部の屈曲が比較的強く、内面に稜をもつもの(J２類)、口縁部が「く」の字に屈曲し胴部の張りが大きいもの(J３類)に分かれる。

K類：口縁部が長く外反するもの。胴部は長胴気味となる。刷毛目調整甕。

小形甕

A類：口縁部下端に丸みをもって胴部に移行するもの。

B類：口縁部が「く」の字状に外反するもの。口唇部に刻みをもつもの(B１類)と刻みをもたないもの(B２類)がある。

C類：口縁部が「く」の字状に屈折し、胴部外面はヘラナデまたはナデ、内面はヘラミガキされるもの。口縁部が内弯気味に開くもの(１類)と直線的に外傾するもの(２類)がある。

D類：小形の平底甕を一括する。口縁部が緩やかに外反するもの(D１類)と、口縁部が短く外反するもの(D２類)がある。調整は内外面ヘラミガキを基本とする。

本遺跡から出土した土器は従来の編年観で言えば、一部弥生時代後期土器の影響を残すものがあるが、主体は古墳時代前期のいわゆる五領式に包摂されるものである。五領式は研究者によって概念規定に相違が見られ、現在まで意見の一致を見ていない。最近では比田井克仁が庄内式併行期から従来の五領式新段階までの土器群を古墳前期Ⅰ段階～Ⅲ段階に細分した(比田井1994)。比田井によれば、Ⅰ段階は弥生後期の土器群に加えて小形高坏、小形器台、元屋敷系高坏が器種組成に参入する段階、Ⅱ段階は定型化した小形丸底坩が波及する段階、第Ⅲ段階は小形器台・小形高坏・元屋敷系高坏の消滅と、畿内系の柱状脚部高坏及びX型器台が波及する段階となる。本遺跡の土器群を

比田井案に沿った形で大枠を捉えると、確実にⅠ段階に限定できる資料は殆どなく、またⅢ段階に特徴的な柱状脚部をもつ高坏は検出されていない。Ⅰ段階からⅡ段階に移行する段階のものを最古とし、概ねⅡ段階の中で変遷したということになるが、明確に段階設定できるほど分離できないのが実状である。

まず、比田井編年Ⅰ段階に位置付けられる可能性をもつものとして台付甕A・B類、小形甕A類、壺B1類の一部、B3類・C3類など南関東系土器群の系譜で捉えられるものがある。台付甕B類は胴部の丸みと頸部の屈曲が強く、最大径を胴部にもつ点でⅠ段階としても新しい様相といえよう。刷毛目調整壺C3類は下膨れの器形であるが口縁部が強く屈曲するものと胴部中央に最大径をもつものがあり、やはり新相を示している。壺B3類は縄文施文を施すものと刷毛目調整の2者があり、頸部の屈曲は強い。このタイプはⅡ段階まで続くものと考えられ該期に固定することはできないであろう。B区第1・2号住居跡、C区第5号住居跡、C区16号周溝墓に出土例が認められる。C区第2号住居跡出土の壺は欠損部位があり器形は不明確であるが、南関東系の複合口縁壺B1類の系譜にあるものと思われる。口縁部と胴部に縄文帯を巡らすことから様相的には本期に属する可能性もあるが、次段階まで残存するものもありやはり一定の時間幅を取らざるを得ないであろう。C区第16号周溝墓は南関東系の複合口縁壺B3類が出土しているが同様にⅡ段階までの時間幅を見た方がよいかもしれない。

Ⅱ段階は小形丸底壺(小形坩H類)と鉢A・B類の出現に象徴される段階である。複合口縁壺ではA1～A5類・B1・B2・B4～B10類がある。A1類はC区第5号方形周溝墓、広面遺跡21号周溝墓に類例があり、壺B5類、小形坩H類と共伴する。A3類は伊勢型二重口縁壺の系譜を引く可能性がある。周辺に良好な類例はないが、群馬県倉賀野万福寺遺跡とほぼ同一形態である。但し、パレス文様がない点を重視すればやや後出的といえるかもしれない。B1類は南関東系の壺の系譜を引くものと思われるが、頸部の屈曲が強く文様は消失している。同種の変遷のなかでは最新相であろう。B4・B7類は吉ヶ谷系壺の系譜下にあるものと推定される。これについては後述する。B5類は在地系であろう。胴部は球形を呈する。B6類は系譜不明。単口縁壺C1類は系譜が明らかにできない。C2類は南関東系譜の土器と考えられる。鶴ケ丘遺跡C区21号住居跡、下道添遺跡13号墓等に類例がある。前者よりも本遺跡例は頸部の屈曲が強く、より後出的である。広口壺D1類は畿内系譜の土器であろうか。妻沼町弥藤吾新田遺跡3号住居跡に比較的近い例がある。D2類は南関東系。代正寺遺跡68号住居跡、中耕遺跡17号住居跡出土例に比して口縁部の外反が強く、器形的にはより新しい様相といえるかもしれない。

坩類の多出傾向は稲荷前遺跡を含めた入西遺跡群の特徴ともいえ、多種多様なタイプが存在する。大半は畿内系譜のものであろうが、現状では時期差を抽出することは難しい。纒向遺跡では東田南溝上層など纒向Ⅲ式段階で口縁部が長く伸びるタイプが出現するとされている。この中にあって、坩D類は口縁部と胴部に篦描の連続山形文を刻み、東海西部地方に系譜が求められる土器である。一見いわゆる瓢壺に似るが、口縁部形状は流線形に長く外反するもので独特である。口縁部形態から見ると廻間遺跡SB45上層出土の土器に比較的類似する。このタイプは廻間編年のⅡ式後半に出現し、Ⅲ式1段階までは存続するとされている(赤塚1990)。いずれにせよ在地的変容が加わったも

のと推定される。

小形坩E２類は口縁部中位に段をもつ点に特徴があり、系譜は不明確であるが仮に畿内系譜とすると纒向遺跡辻土壙７に類似した口縁部形態をもつものがある。同土壙では小形丸底壺、有段口縁鉢と共伴している。小形坩H類はいわゆる小形丸底壺の系譜上にあると思われるものである。小形坩は畿内においては口縁部が長く外方に伸びるものから、口縁部が矮小化し相対的に体部が大きくなり、また調整技法の省略化の方向で変遷することが指摘されている(安達・木下1974)。一方北武蔵地域では新しい段階になると体部が極端に縮小するものが出現するといわれており(立石1983)、器形からみた変化の方向性は一様ではない。本遺跡出土の小形坩H類はかなり形態差が認められ一定の時期差を含むことは確実であろう。C区第２号周溝墓２は口縁部が長く伸び、緻密なヘラミガキ調整が施されるもので、周辺遺跡では下道添４号墓例に比較的近い。整った形態から見て相対的に古段階に位置付けてもよいものであろう。その他のものには口縁部が長く伸び体部が縮小したものと、口縁部径と胴部径が接近するやや新しい様相をもつものが認められ、時間幅はかなり含まれているものと考えた方がよいであろう。

鉢A・B類は布留式の指標の一つでもある。A類はいわゆる屈曲口縁鉢で体部が比較的大きいこと、底部が丸底であることからみると比較的古段階の様相を留めているといえよう。(立花1992)。同系統に属するものとしては東松山市五領遺跡、草加市蜻蛉遺跡13号溝があるが、前者は畿内の例と比較しても口縁部の作りが独特で、後者は体部が小さく新しい様相を示している。B類も小形丸底鉢との関わりで理解されているものであるが、典型例に近い丸底のものと、底部が平底化した在地的なものがある。

高坏A・B類、小形高坏B～F類は東海系譜の土器群と推定される。A類は脚部形状から廻間編年のIII式に、B類は脚部の屈折から廻間II式後半段階のものに類似する。小形高坏B類は廻間III式前半段階、D類はIII式にそれぞれ類似するが、これらは在地化して独自に変遷した可能性が強く直接東海地方に併行関係を求めることは難しい。特に小形高坏D類は代正寺遺跡68号住、大宮市吉野原４号住居跡、諏訪山29号墳、入西遺跡群でも中耕遺跡13号周溝墓など比較的類例が多い反面、時期幅もいわゆる前野町式～五領式段階まで含まれ、それのみで時期決定し難いものといえる。高坏D類はB区５号周溝墓から１点出土した。一見和泉式的な高坏であるが、器壁が薄いことや脚部と坏部の接合部が平坦となる点でやや相違する。また、五領期末葉のいわゆる長脚高坏とも異なるもので現状では伴うか否か判断しかねる。

小形器台はバリエーションが多く時期を限定するのが難しいものが多い。その中にあって、F類とG類に注目しておきたい。F類は受け部が小さく上方に立ち上がり、外面に面をもつもので、脚部は八の字状に外反する。このタイプは、東海地方の器台を分析した赤塚次郎によると器台I類に相当するもので、東海西部地域では廻間III式後半に出現すると捉えられている(赤塚1993)。G類は受け部が外反するもので赤塚分類のH類に相当する。東海地方では廻間III式段階に出現するとされているが、本遺跡例はIII式でも後半段階のものと酷似している。また、畿内以東の地域では小形鉢A類(屈曲口縁鉢)との共伴例が多いことも指摘されている(立花1992)。赤塚分類の器台H類に注目した書上は県内諸遺跡の類例を検討した結果、ほぼ布留式古段階以降に併行する可能性を示唆して

いる(書上1994)。本遺跡においてもC区2号周溝墓で小形坩と小形器台G類の共伴が確認され書上の指摘を裏付けている。

台付甕D類は口縁部が「く」の字に外反する。器形、調整技法から細別されるが刷毛調整甕はヘラケズリ調整が加わり、長胴化するものがあるなど新しい様相が窺える。甕H類は吉ヶ谷系。口縁部が緩やかに外反するものと、「く」の字に折れるものがある。

確実にII段階に位置付けられる遺構をピックアップすると、B区では2・4・5・7・8・13号周溝墓がある。小形坩H類、鉢A・B類の伴出関係からみて誤りないところである。また、9号周溝墓は小形器台G類と、鉢と思われる底部片が含まれることから同期と見て良い。3号・10号周溝墓については決め手に欠けるが積極的に前段階に上げる材料はない。

C区では3・6・9～12号住居跡、1・2・5～7・10～12号周溝墓がII段階に位置付けられるであろう。他のものに関しては縄文施文を残す壺や吉ヶ谷系の甕、高坏や坩類の一部などI段階に遡る要素をもつものも見られるが、限定的に解釈することはできないであろう。I段階の末葉～II段階という時間幅の中で捉えた方がよいかもしれない。しかしながら、II段階の中で細分することはかなり難しい。新相といえるのはC区9号住居跡の刷毛目台付甕とナデ甕がある。前者は胴部が長胴化し、胴部下半に篦削りを施す。後者は胴部中ほどに最大径をもち、ヘラケズリ後ナデ調整されるものである。小形器台と元屋敷系(?)高坏を伴うことから、III段階までは降らないものと思われる。また、小形坩H類の様相をみても口縁部の矮小化が目立つものが多く、必ずしも古段階に位置付けられるものではない。特に吉ヶ谷系の甕は3号住居跡、5号・7号周溝墓からある程度器形の窺える資料が得られたが、共伴遺物からII段階まで下がることは確実であり、中耕遺跡とともに吉ヶ谷系土器群の終末段階を示す一例となろう。

**吉ヶ谷系土器群について**

本遺跡からは吉ヶ谷式の系譜を引く土器群が残存することが確認された。典型的には壺B7類、甕H類である。壺B7類は口縁部に輪積痕を残す点にその影響が認められるもので、胴部文様帯は既に失っている。これを仮にb類とすると、b類はC区1号周溝墓の他、中耕遺跡11号周溝墓、広面遺跡3号周溝墓に類例がある。また、中耕遺跡21・31号周溝墓、広面遺跡13号周溝墓からは同様の器形で胴部上位に縄文帯を2段もつものが出土しており、型式的には先行するものと考えられる(a類とする)。b類には小形坩H類(いわゆる小形丸底壺)が伴出し、II段階に下がることは確実である。a類には直接小形坩H類の伴出は確認できない。a類の先行系譜については既に杉崎によって大里村出土の壺のように長頸の壺から変化したものと推定されている(杉崎1992)。大里村出土壺とa類を比較すると、頸部が短く屈曲が強い点など直接連続するものではないであろう。大里村出土の壺自体は撫で肩の器形を特徴とするもので鶴ヶ丘遺跡C区6号住居跡?を介して中耕遺跡52号周溝墓、古凍根岸神社古墳と変遷する系列と思われる。吹上町袋・台遺跡3号周溝墓出土の壺なども同系列に属するものであろう。東松山市代正寺遺跡66号住居跡からはいわゆる前野町式土器群に伴って、口縁部を欠くが頸部が「く」の字に屈曲し、胴部に縄文帯を4段施すものが出土している。本類に属するかどうかは判らないが吉ヶ谷式の壺の可能性が高いものである。頸部が「く」の字に折

れるタイプがいわゆる前野町併行期(吉ヶ谷Ⅲ式)に出現していたことを物語る一例といえよう。この段階のうちでb類が別系列として出現したものかもしれない。

壺B4類は一見口縁部が複合口縁状を呈するが、複合部が極めて薄いことと胴部が長胴気味となる点に特徴がある。口縁部はおそらく折り返しや貼り付け技法ではなく、輪積み痕を複合口縁状に仕上げたものと思われ、南関東系の複合口縁壺とは技法的にも胴部形態から見ても異なる可能性がある。複合部は幅狭のものと幅広のものがある。口縁部は短く外反し、胴部は長胴気味で文様はない。稲荷前遺跡ではC区11号周溝墓から出土しているが、類例は中耕遺跡21・42号周溝墓、広面遺跡21号周溝墓等に認められ、一つのタイプとして存在したものと考えられる。これを仮にb類とすると、その先行系譜と思われるものが中耕遺跡13・50・52号周溝墓から出土している。口縁部はより直立気味で、複合部、または複合部及び胴部に縄文帯を2～3段巡らすものである(a類とする)。毛呂山町中在家遺跡例も同類と思われるが胴部は球形を呈する。a類からb類への流れは自然である。問題は本類の系譜関係で、たとえば籠田遺跡7号住居跡に見られるように南関東系土器からの影響を無視することはできないが、口縁部が直立気味である点や複合部の形状、縄文帯の存在から基本的にはむしろ吉ヶ谷式土器からの変遷で捉えた方が理解しやすいものと考える。類例としては下道添遺跡15号住居跡がある。複合口縁部が薄く頸部の屈曲はa類よりもやや弱いこと、また長胴気味の胴部に続く点から吉ヶ谷式系譜の土器と思われる(註1)。下道添遺跡例では胴部縄文帯が幅広く1段構成であり直接的な祖型となりうるかどうかはまだ検討する余地はあるかもしれないものの、東松山市籠田遺跡7号住居跡、川越市上組Ⅱ遺跡112号住居跡にも類似した口縁部形態の壺が認められ、今後の資料の増加に期待したいところである。ここではB4類が吉ヶ谷式の流れを汲む可能性が高いこと、最終段階に無文化したものが存在したことを確認しておきたい。

中耕遺跡13号周溝墓からはa類とb類、小形坩H類が共伴している。13号墓は土器様相からⅡ段階古相、周辺遺跡では下道添遺跡4号墓とほぼ同時期と考えている。壺B4類の存続期間の1点が比田井編年Ⅱ段階にあること、a類とb類の変遷が漸移的で一定の重複期間が存在することを表しているものであろう。広面遺跡21号周溝墓はB4b類と小形坩H類、二重口縁壺、肩部横線を失った段階の「S」字状口縁甕が伴出し、Ⅱ段階としても時期的にはやや下降するであろう。B4類とB7類に関しては中耕遺跡21号周溝墓でB4b類とB7a類が共伴することが確認できる。

甕J類は頸部の括れの弱いもの(1類)、頸部の屈曲がやや強く、特に内面で強調されるもの(2類)、頸部が「く」の字状に外反するもの(3類)がある。個別にみると縦軸に並べてもよいような資料であるが、吉ヶ谷Ⅲ式の標準資料である根平遺跡4号住居跡では本類1～3類に対応するようなタイプの異なる甕が共存しており、個別の土器を比較する際、単純に形態のみで時間差に置き換えることの難しさを端的に示しているといえる。現状では1～3類間で時期差を求めるのは難しいといわざるを得ないし、逆に根平遺跡との時間差をどの程度見積もることができるのかが問題となるであろう。ここでは甕J類がⅡ段階まで存続することを確認するに留めたい。

小形甕D類は外面ヘラミガキ、内面も全面及至口縁部がヘラミガキされる平底形態である。形態及びヘラミガキを多用する点からみると、吉ヶ谷式の甕に類似するともいえ、縄文施文が省略された可能性も考慮すべきかもしれない。中耕遺跡21・32号周溝墓、上組Ⅱ遺跡43号住居跡等に類例が

ある。

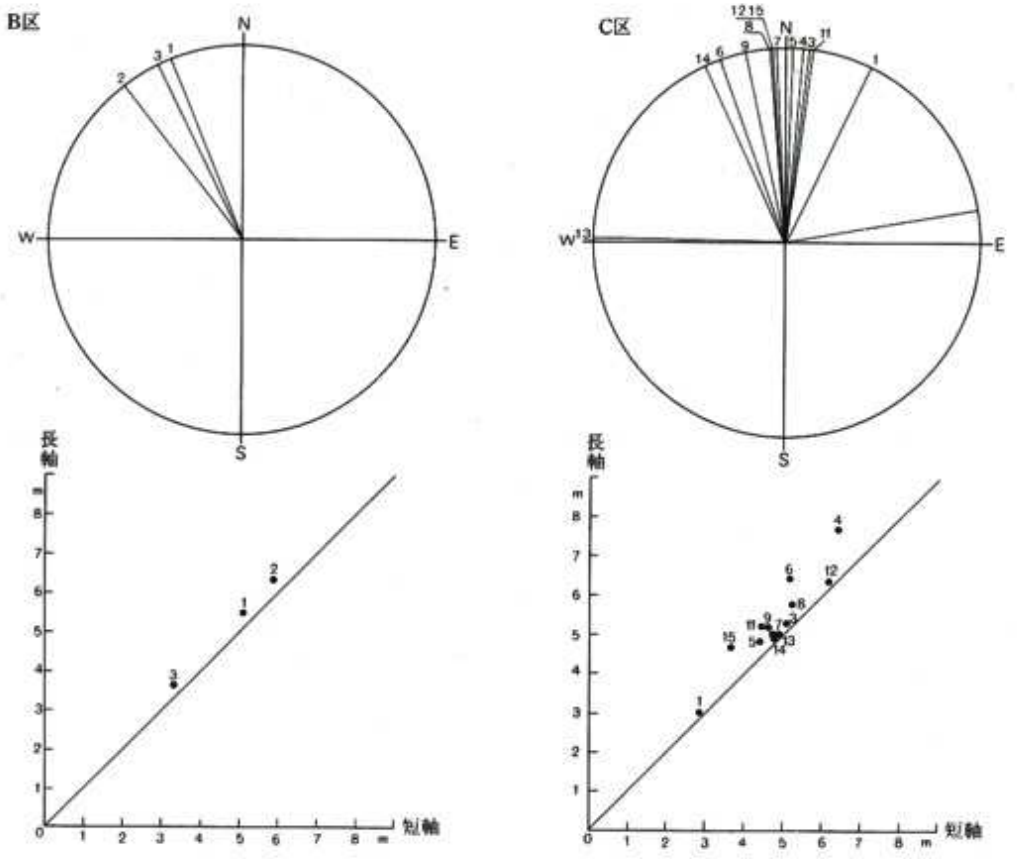
甕Fは刷毛目台付甕の器形と思われるが、外面上半には縄文が施文され、内面はヘラミガキ調整される。内面ヘラミガキ調整は吉ヶ谷式甕新段階の特徴ともいえるもので、刷毛目台付甕と吉ヶ谷式甕の両者の要素が一つの土器の中に体現したものと見ることができる。小形甕C類も内面ヘラミガキ調整され、或いは吉ヶ谷的調整技法ということもできよう。

このようにII段階、つまり定型化した小形丸底坩が波及した以降まで吉ヶ谷系土器群が存続すること、また児玉地域の吉ヶ谷系土器群の中に無文化した一群が存在したことは既に指摘されている(恋河内1991)が、入西遺跡群の調査によって吉ヶ谷式土器の主要分布地域でもその終末段階に無文化した一群が存在することが確認された。ただ、問題点もある。一つには壺・甕とともに吉ヶ谷式の基本的な器種である高坏を欠くことである。本遺跡はもとより、中耕・広面遺跡を含めても壺・甕類には吉ヶ谷系と認められるものが存在するが、確実に吉ヶ谷式系譜と思われる高坏は伴出していないのである。本稿で「吉ヶ谷系土器群」とした所以でもある。同時に問題となるのは周溝墓には吉ヶ谷系壺・甕が存在するのに対し、集落からの出土が極めて少なく、主体は南関東系、或いは畿内・東海系など異系統の土器群に転換している点である。こうした問題は「吉ヶ谷式」土器の概念規定に再検討を促すだけにとどまらず、集落と周溝墓の造墓主体との関係、さらには在地の吉ヶ谷集団が南関東系土器群、あるいは非在地系土器群との接触の中で如何に古墳社会に転換していったのかという問題とも絡み簡単に結論を出すことはできない。課題は尽きないが全ては今後の検討に委ねたい。

註1　この点に関しては既に恋河内の指摘がある(恋河内1991)。恋河内は下道添遺跡例を吉ヶ谷式と認めた上で、吉ヶ谷遺跡出土の壺から下道添遺跡へ系統的に変化するものと想定している。

引用・参考文献

赤塚次郎　1990『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集
赤塚次郎　1993「東海系器台覚え書き」『庄内式土器研究』IV
安達厚三・木下正史　1974「飛鳥地域出土の古式土師器」『考古学雑誌』第60巻2号
柿沼幹夫　1982「吉ヶ谷式土器について」『土曜考古』第5号
金井塚良一1976「埼玉県東松山市吉ヶ谷遺跡の調査」『台地研究』No.16
金井塚良一ほか1971「シンポジューム五領式について」『台地研究』No.19
黒坂禎二　1989『上組II』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第80集
恋河内昭彦1991『塩谷下大塚遺跡』児玉町文化財調査報告書第11集
小久保徹　1976『鶴ケ丘』埼玉県遺跡発掘調査報告書第8集
杉崎茂樹　1993『中耕遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第125集
鈴木孝之　1985『蜻蛉遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第53集
鈴木孝之　1991『代正寺・大西』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第110集
関口尚功　1976『纒向』橿原考古学研究所
田口一郎　1987「パレススタイル壺の末裔たち」『欠山式土器とその前後』研究・報告編
立花　実　1992「東日本の屈曲口縁鉢」『西相模考古』第1号　西相模考古学研究会
立石盛詞　1983『後張』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第26集
寺沢　薫　1986『矢部遺跡』橿原考古学研究所
利根川章彦1993「二重口縁壺小考」『調査研究報告』第6号　埼玉県立さきたま資料館




**第603図　住居跡の主軸・規模**

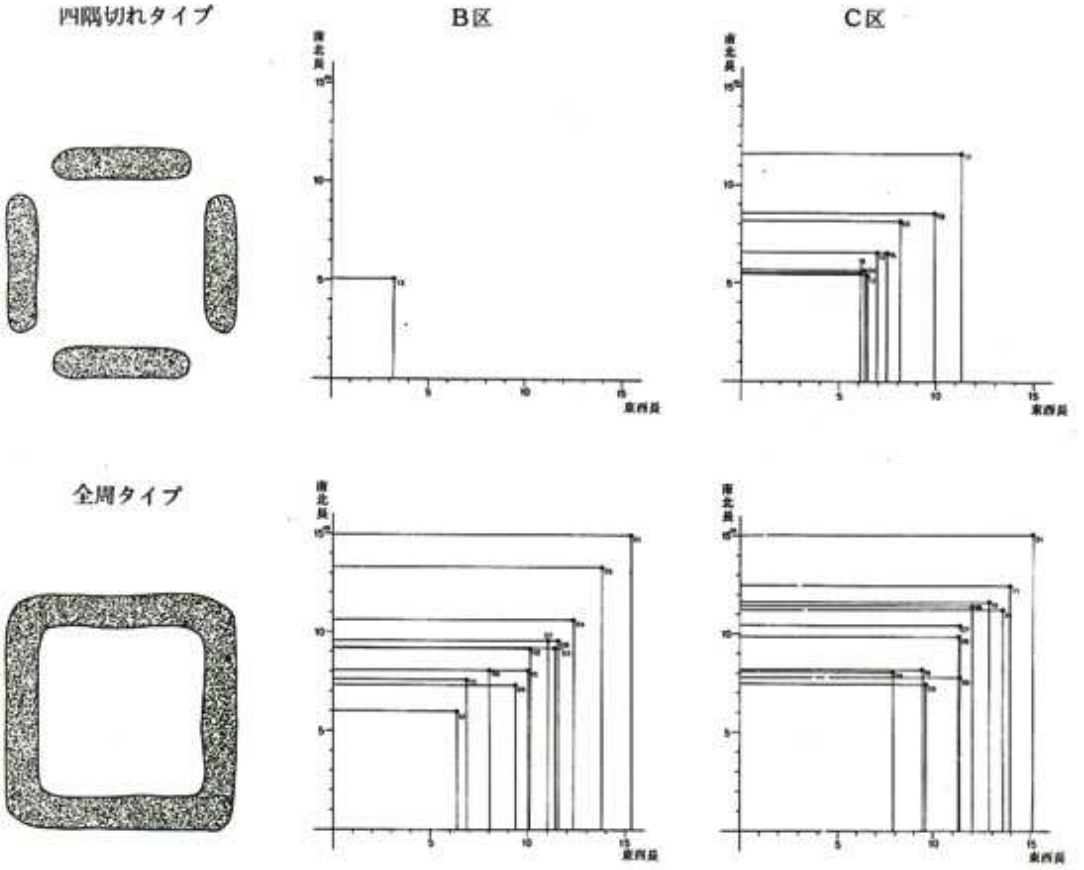
西口正純　1986『鍛冶谷・新田口遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第62集
板野和信　1987『下道添遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第67集
横川好富　1983「埼玉県の古式土師器」『埼玉県史研究』第10号
水村孝行　1980『根平』埼玉県遺跡発掘調査報告書第27集
村田健二　1982『籠田・鶴田』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第20集
村田健二　1990『広面遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第89集

## （2）　遺構について

### a．住居跡

該期の住居跡は19軒（B区４軒、C区15軒）検出されたが、形態及び規模が不明確なものも含まれ17軒を検討対象とする。

住居形態は方形系統（やや長方形を含む）のものが主体を占め15軒、隅丸方形といえるものはC区７・11号住居跡の２軒に留まり古墳時代的な住居形態に移行した段階といえる。最大規模の住居跡はC区４号住居跡で、7.06×6.44m、床面積は約45㎡となる。最小はC区１号住居跡で１辺３m程、床面積約９㎡である。この住居跡は炉や柱穴が存在せず、通常の住居と同列に扱うことには問題があるかもしれない。最も集中するのは１辺５～６m前後のエリアで大半の住居がそれにおさまる。




**第604図　周溝墓の規模**

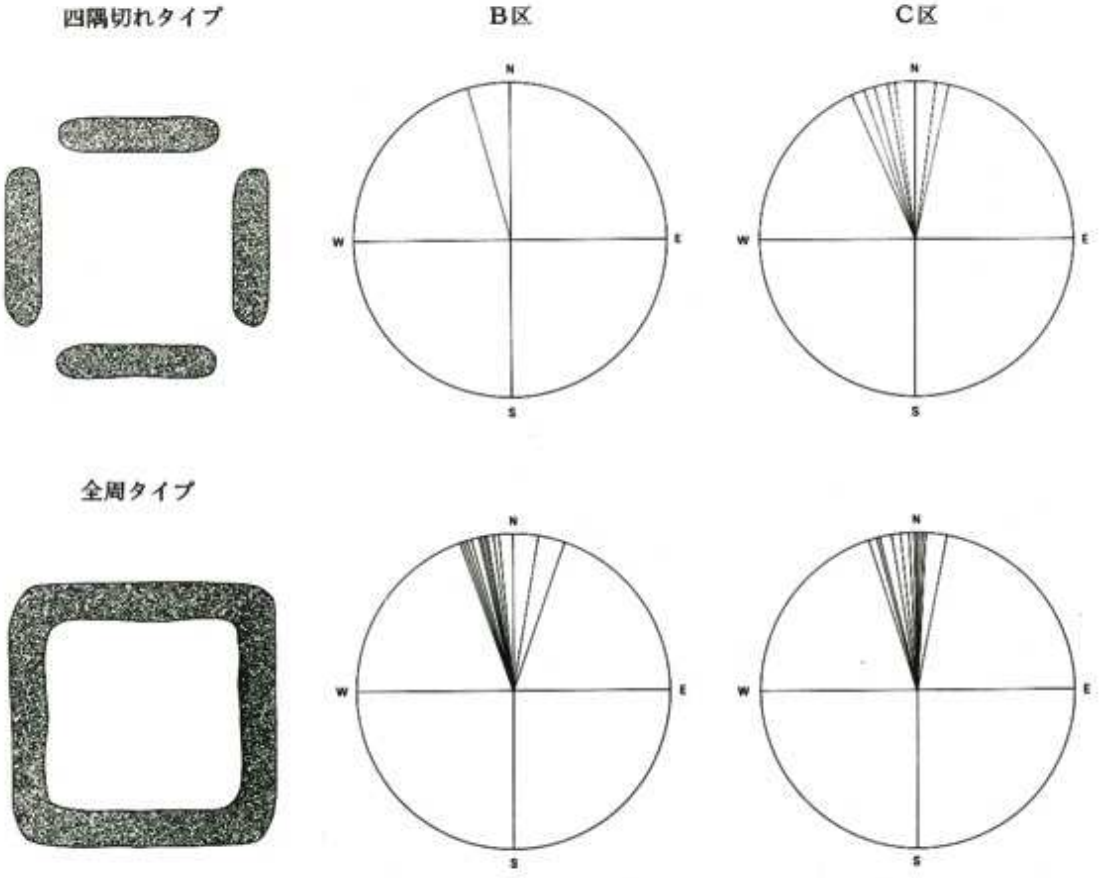
1辺10mを越えるような超大型住居もない反面、小型住居も少ない。住居規模から見ると中型住居主体の比較的等質的なあり方を示すものといえる。主軸分布は北から西に偏したものと北から東に寄ったものに大きく分かれる。その他、東と西に大きく触れるものが1軒ずつとなる。

住居分布について概観すると、B区では調査区中央から東に寄った地点に4軒纏まって位置し、3・4号住居跡は重複していた。C区では調査区北寄りの部分に比較的散在する状況が窺える。切り合い(拡張か？)関係にあるものは4号住居跡と5号住居跡のみである。ただ、単一時期の集落とは確言できない。出土遺物から見ると若干幅を持たせて考えた方がよいのかもしれない。

**b．方形周溝墓**

方形周溝墓は35基検出された。形態別分布をみても判るようにB区とC区の様相は大きく異なる。形態不明のものを除くとB区では四隅切れ周溝墓はその可能性をもつものが僅かに1基、その他は全周型が7基、一隅が切れるもの2基、1辺が独立するものが2基、前方後方形の可能性をもつものが1基となる。C区では全周型が10基と四隅切れタイプ8基から構成され、周溝墓の構成はより単純である。一隅が切れるものや1辺が独立するものを全周系統と捉えると、四隅切れと全周タイプが拮抗するC区、全周系が優越するB区と対照的なあり方を示している。

方台部の規模を比較すると(第604図)、四隅切れタイプと全周タイプでは明らかに格差が認められ




**第605図　周溝墓の主軸**

る。前者にあってはC区17号周溝墓が最大で1辺11m代、6m前後～8m前後に分布の中心域をもつ。B区13号周溝墓は周溝の1辺が削平されているために正確な数値ではないが、1辺5m程と極めて小規模である。後者、つまり全周系ではB区1号周溝墓、C区1号周溝墓が1辺15m程の規模をもち最大級、B区10号周溝墓が1辺6m代で最小規模である。B区では長軸規模が1辺7m前後～12m前後まで連続的に分布する。C区では8m～10mの一群と11m～14m程に分布する一群がみられ、10m～11m前後のエリアに若干の空白域が認められる。総じていえば、小形が主体の四隅切れタイプ、小形を含みつつもより大型にシフトしている全周系周溝墓という対比で捉えられよう。こうしたあり方は中耕遺跡、広面遺跡の周溝墓とも類似している。

各遺跡の最大規模の周溝墓を摘出すると、稲荷前遺跡では先に示したB区1号周溝墓、C区1号周溝墓、広面遺跡では9号周溝墓、中耕遺跡では49号周溝墓がある。広面遺跡を除くと1辺ほぼ15m前後、形態的にも全周型であり規模及び形態は一致した様相が窺える。広面遺跡9号周溝墓は方台部が1辺23m～26mと際立って大きく、入西遺跡群全体を見渡しても卓越した規模を誇るものといえる。形態的にも方台部から斜めに取り付く陸橋をもつ点で異例に属する。これは報告者によって前方後方形周溝墓を意図して構築されたものと理解されている(村田1990)。入西遺跡群に於いて広面遺跡9号周溝墓を除くと、前方後方形周溝墓と考えられるものはB区5号周溝墓、中耕遺跡42号周溝墓の2基のみである。B区5号周溝墓は陸橋を取りつけた側の周溝が他の周溝に比して幅広

で深いことからみると、１辺の中央に陸橋をもつ周溝墓というよりも前方後方形周溝墓の形態により近いものである。但し、陸橋部は幅狭く典型例と比較するとその差は大きく、前方後方形周溝墓と捉えるにしてもその亜種、及至変形と考えた方がよいであろう。中耕遺跡42号周溝墓の前方部は確定できない部分があるが、典型的な形態とはいえないようである。方台部の規模はＢ区５号周溝墓が長軸13.80ｍ、短軸13.28ｍ、中耕42号周溝墓が長軸17.35ｍ、短軸13.00ｍで規模の面からみると比較的大型の部類に属するが、突出した規模は有しておらず墓域のなかで盟主墳的な存在には昇華されていないものといえる。

次に方形周溝墓の座標北を基準とした軸の傾きをみると（第605図）、北からやや西に振れたものが主体となり、北から東に振れるものは数例に留まる。これはＢ区・Ｃ区ともに共通した在り方を示している。また四隅切れ、全周系ともに軸分布は類似しており、タイプ別に軸方位を変えた可能性はほとんどないといってよい。主軸分布の意味付けをはじめ、群構成などの分析には出土土器に基づく構築年代の把握が前提条件となるが、今回それを果たせなかった。今後の課題である。

## （３）　Ｃ区第１号土壙墓出土の鉄剣について

**鉄剣の大きさと拵**　稲荷前遺跡Ｃ区の第１号土壙墓から出土した鉄剣（第606図１）は、全長83.5㎝に及ぶ重厚な造りの長剣である。刃は長さ69.5㎝、幅3.3～3.7㎝、厚さは0.6～0.8㎝、鎬はなだらかで断面はレンズ状を呈している。関はあまり明瞭ではなく、左右対象ではない。茎は長さ14.0㎝で茎尻は直、目釘孔は２ヵ所に認められる。

身部の広い範囲に鞘木が残存しており、木装の拵であったことがわかる。しかし残念ながら関部周辺の木質の残りは良好でなく、後藤守一氏によって認識された拵の２つの型式、「合せ口式」か「呑み口式」か（後藤1940）のどちらに属するかはわからない。

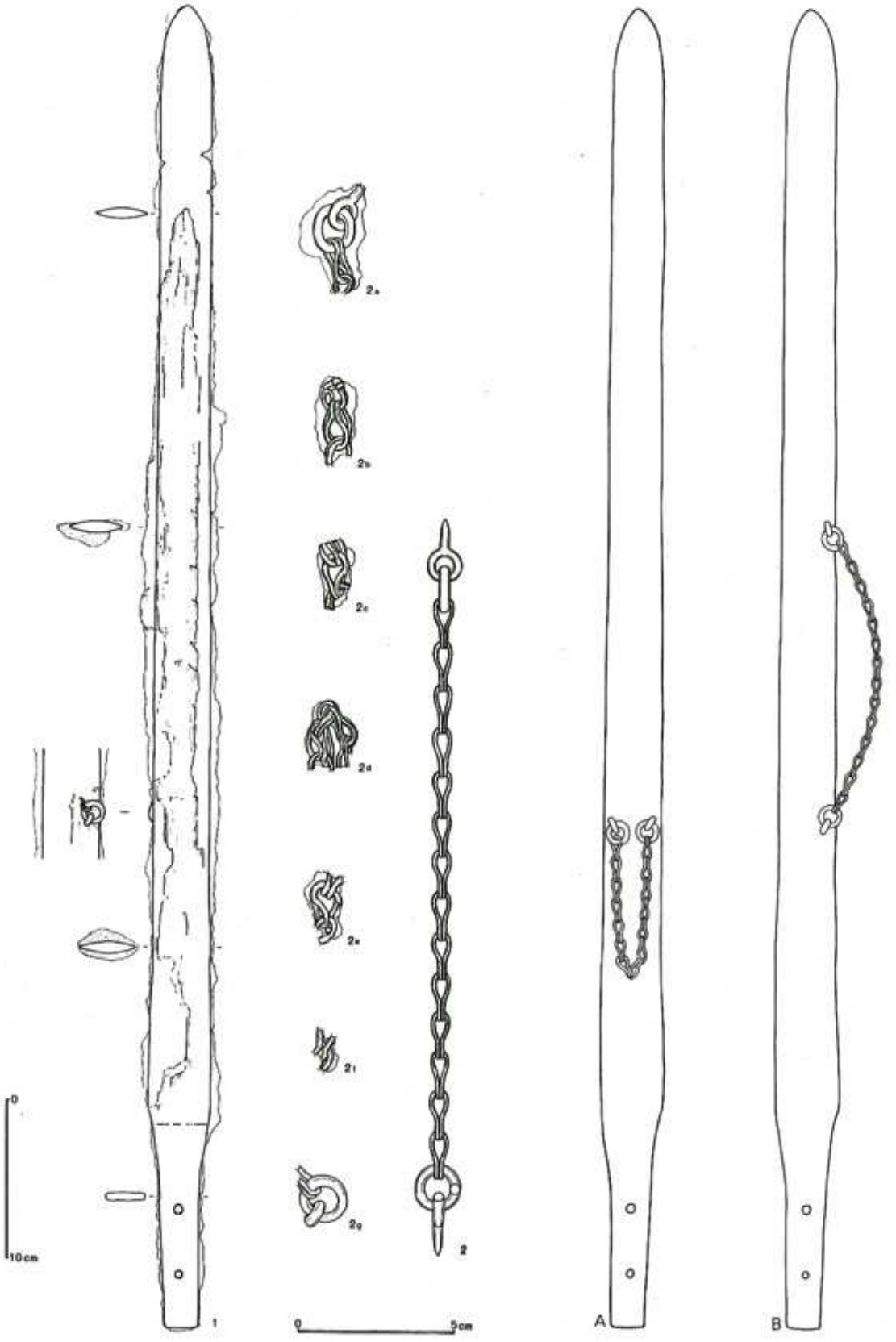
この剣で注目すべき点は、輪状の留金具（直径約1.0㎝のヒートン形金具）が切先からおよそ51㎝のところの刃寄りに打ち込まれており、その金具に遊金（直径約1.5㎝の輪金具）を介して兵庫鎖が連結していることである（第606図2g）。兵庫鎖のついた同形の金具はもう１セット遊離して存在しており（第606図2a）、やはり鞘に取付けられていた可能性が強い。

兵庫鎖の１つの長さは1.5㎝前後である。剣本体についているものを含めて、７つに分離している（第606図2a～2g）。錆が著しく、接合関係を明らかにすることはできなかったが、全部で14の鎖が連結していたと考えられ、その全長はおよそ13㎝になると推定される（第606図２）。

**剣の年代**　剣は弥生時代から出現し、国内では最も古くからある鉄器の一つである。古墳時代における全体の傾向として、剣の副葬は５世紀末頃（ＴＫ47式併行期）で下火となり、続くＭＴ15式併行期には極端に例が少なくなるとされ、６世紀以降は藤ノ木古墳に見られるような特殊な宝剣としてのみ使用されたと考えられている（臼杵1990）。

埼玉県内において鉄剣を出土した遺跡はあまり多くはない。管見の限りでは本例以外に18例をあげることができた（注１）。第８表にその概要をまとめ、主な資料を第608図に掲載した。

これらの資料を見ると、出土遺跡の年代は弥生時代後期から６世紀前半にわたっている。確実に６世紀に降ると考えられる資料は善能寺５号墳の１例のみで、５世紀の出土例が最も多い。これは

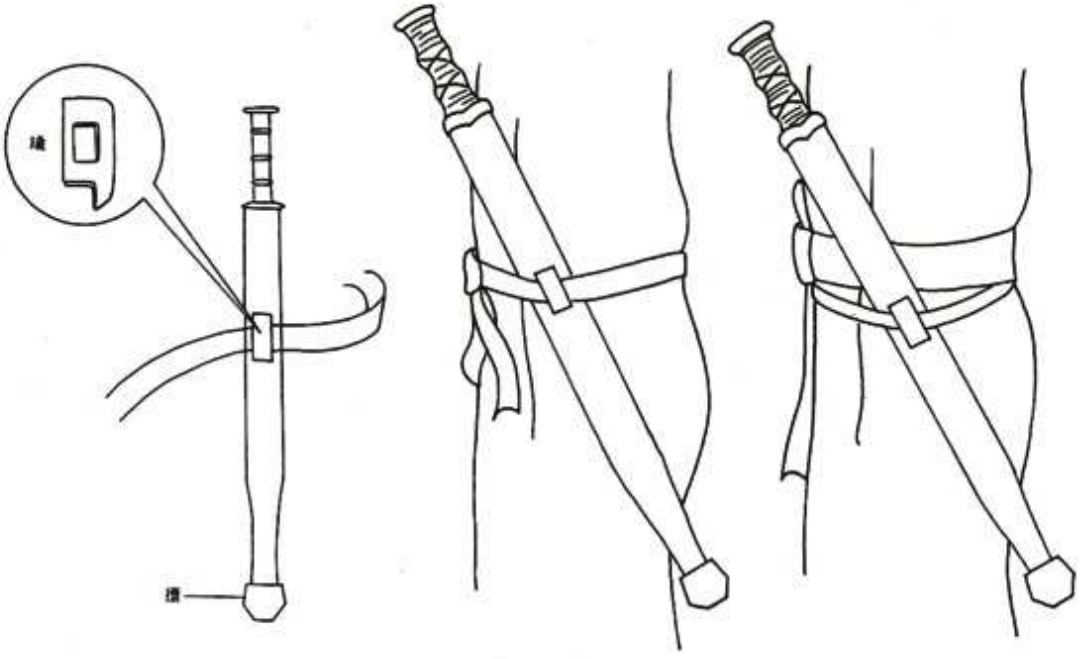



第606図　鉄剣及び復元図

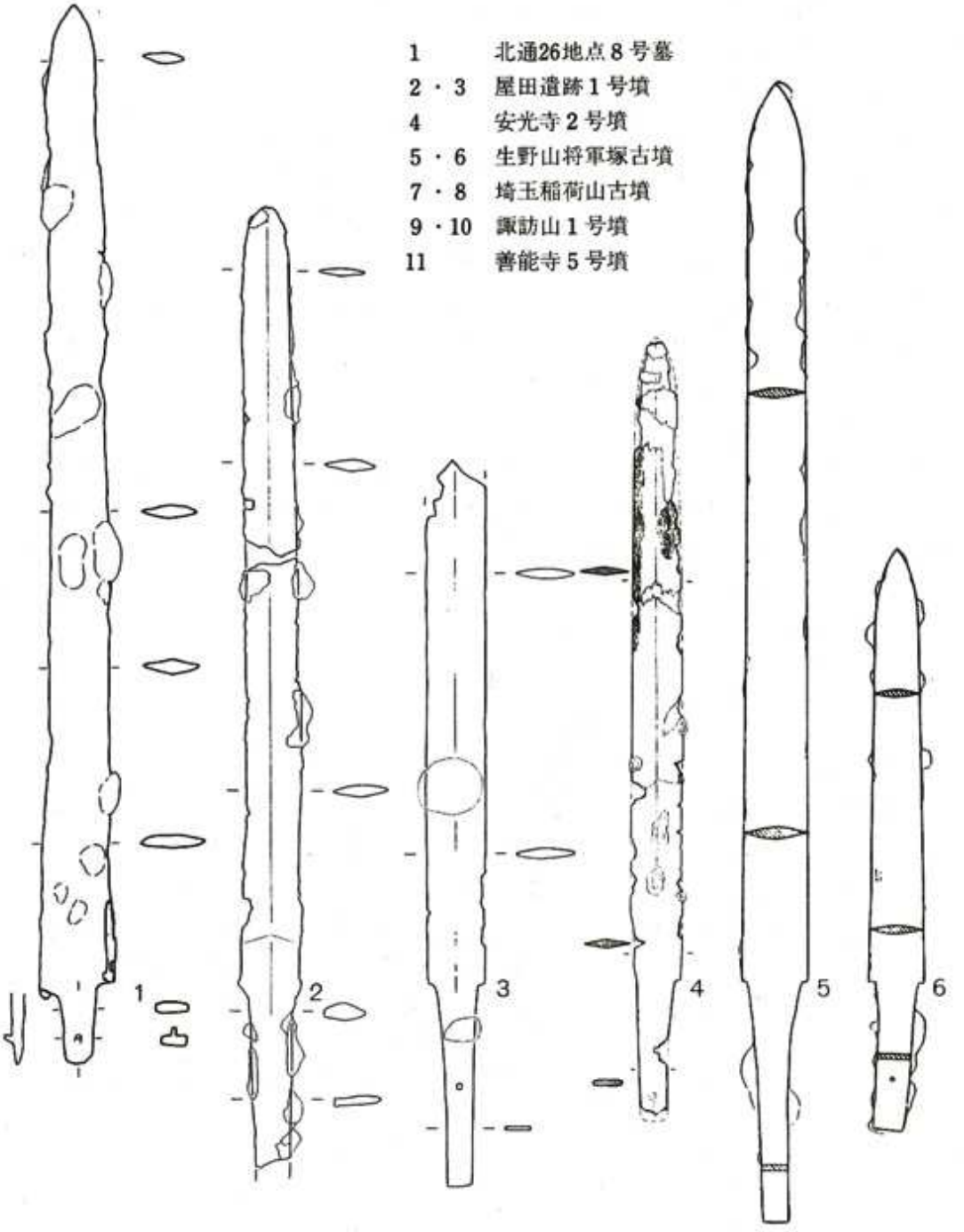
臼杵氏が指摘した全国の傾向と合致している。剣の長さはまちまちであるが、5世紀段階のものに50cmを越す長剣が多く、それより古い時期には短いものが多い傾向にある。例外として北通26地点8号墓出土例（第608図1）が存在するが、全長に対する茎の割合が非常に短く、特異な形態を呈している。弥生時代の鉄器を集成・分類した川越哲志氏によると、こうした特徴をもつ剣は長剣B型（短茎式）に分類され、朝鮮製の可能性が高く、中期中葉に出現するもっとも古い武器として位置づけられている（川越1993）。

池淵俊一氏は最近発表された論考（池淵1993）で、剣をその関と茎の形状によっていくつかのグループに分類し、編年を試みられている。その分類によると、本例は稲荷山古墳出土例（第608図7・8）と同じく、茎の幅が先端にいくにつれて幅を狭めていく「中細茎」に属すると考えられる。「中細茎」の長剣はそれのみで独立した型式ととらえられ、5世紀後半に集中するとされている。ただし、本例や安光寺2号墳出土例（第608図4）のような不明瞭・不均等な両関は分類対象になく、これを氏のいう「浅直関」の一種とみなすことができれば、この編年観が支持されることになろう。いずれにしろ本例は、剣が副葬される最盛期である5世紀代の遺物と考えるのがもっとも妥当であるといえよう。

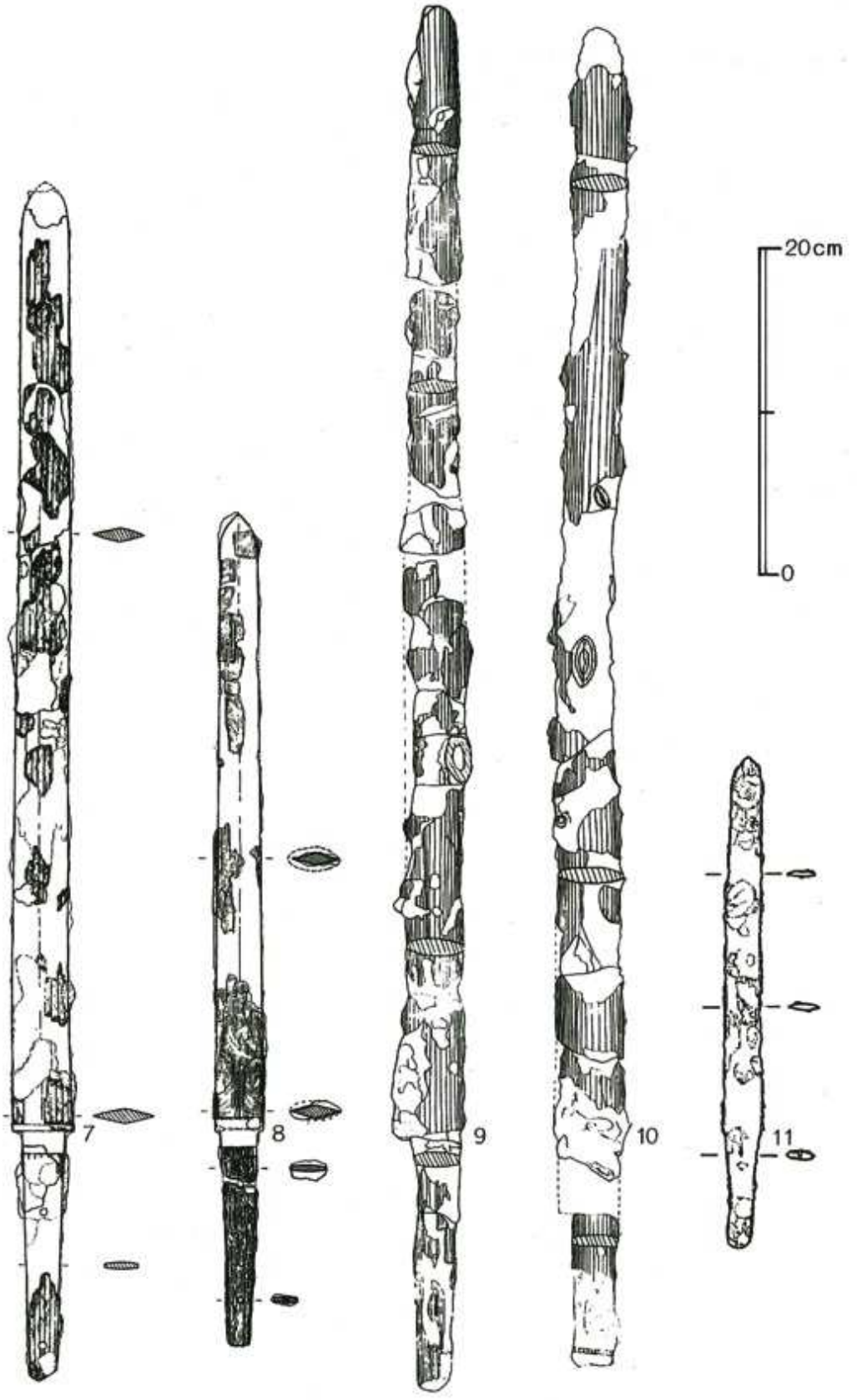
次に兵庫鎖からその年代を考えてみよう。鉄製の兵庫鎖が用いられている古墳時代の遺物としては馬具があげられるが、馬具ではf字形鏡板付轡の引手と引手壺との間に2連もしくは3連の兵庫鎖をつける例が最も古く、その年代はTK23式期（5世紀後葉）にあたる。轡の立聞に長連の兵庫鎖を用いるのはMT15式期（6世紀前葉）～TK43式期（6世紀後葉）で、大形の兵庫鎖が鎧に使用されるのはMT85式期（6世紀中葉）以降と考えられている（注2）。本例の兵庫鎖の形態は、轡




**第607図　剣の佩用**（成・鈎1990より）


1　北通26地点8号墓
2・3　屋田遺跡1号墳
4　安光寺2号墳
5・6　生野山将軍塚古墳
7・8　埼玉稲荷山古墳
9・10　諏訪山1号墳
11　善能寺5号墳
1
2
3
4
5
6

第608図　埼玉




県出土の鉄剣

## 第8表　埼玉県内の鉄剣出土遺跡一覧表

| No. | 遺跡(遺構)名 | 所在 | 個体数 | 長さ | 主体部(種類) | 共伴遺物 | 時期※ | 文献 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 観音寺遺跡<br>4号方形周溝墓 | 東松山市松本町2丁目 | 1 | 28.5cm | 土壙 | 銅鏡・甕・壺 | 弥生後期前半 | 宮島1992 |
| 2 | 井沼方遺跡<br>9号方形周溝墓 | 浦和市大字井沼方字馬堤 | 1 | 約38cm | 土壙 | ガラス玉・勾玉・壺・台付甕・片口 | 弥生後期後半 | 埼玉考古学会他1993 |
| 3 | 北通遺跡26地点<br>8号方形周溝墓 | 富士見市針ヶ谷 | 1 | 61.0cm | 土壙 | ガラス玉・壺・器台・塊 | 弥生後期末～古墳前期初頭 | 高橋1987 |
| 4 | 薬師耕地前遺跡<br>7号方形周溝墓 | 上尾市大字西貝塚字薬師耕地前 | 1 | 現20.2cm | 第1主体部土壙 | 管玉・壺・高坏 | 3世紀後半～4世紀初頭 | 赤石他1978 |
| 5 | 塚本山14号墓<br>(方形周溝墓) | 児玉郡美里町大字下児玉字西山 | 1 | 破片 | 第1主体部土壙 | 鉄鏃・土師器 | 3世紀後半～4世紀初頭 | 増田他1972 |
| 6 | 塩第1支群25号墳<br>(方墳) | 大里郡江南町大字塩字諸ヶ谷 | 1 | 19.6cm | 木棺直葬 | ガラス玉・土師器 | | 埼玉県立さきたま資料館1994 |
| 7 | 江川山古墳<br>(円墳？) | 上尾市大字畔吉字八幡 | 1 | 破片 | 不明 | 鉄刀・仿製鏡2（四獣鏡・捩文鏡）・管玉・土師器 | 4世紀後半 | 埼玉県1951<br>車崎1990 |
| 8 | 長坂聖天塚古墳<br>(円墳) | 児玉郡美里町関 | 1？ | 破片2 | 第1埋葬施設粘土槨 | 鉄刀・刀子・変形方格規矩鏡・櫛・滑石製有孔円盤 | 4世紀後半～5世紀初頭 | 菅谷・坂本1975 |
| 9 | 前山2号墳(円墳) | 本庄市大字北堀字前山 | 2 | 破片 | 粘土槨 | 鎌・刀子・鉇・土師器 | 5世紀前半 | 小久保他1978 |
| 10 | 屋田遺跡1号墳<br>(円墳) | 比企郡滑川町大字月輪字西新井 | 2 | 約56cm<br>現41cm | 不明 | 刀子・管玉・鎌・土師器 | 5世紀前半 | 今井他1984 |
| 11 | 安光寺2号墳<br>(円墳) | 大里郡岡部町本郷字清水谷 | 1 | 46.0cm | 粘土槨 | 鉄鏃・鉄斧・鉇・ガラス玉・白玉・土師器 | 5世紀第2四半期 | 増田他1981 |
| 12 | 生野山将軍塚古墳<br>(円墳) | 児玉郡児玉町大字児玉字下生野 | 2 | 66.0cm<br>33.5cm | 第2主体部箱式石棺 | 鎌・鉄斧・埴輪・土師器 | 5世紀第3四半期 | 柳田1964<br>菅谷1984 |
| 13 | 埼玉稲荷山古墳<br>(前方後円墳) | 行田市埼玉 | 2<br><br>1 | 73.5cm<br>50.5cm<br><br>破片 | 第1主体部礫槨<br><br>第2主体部粘土槨 | 鉄刀・鉾・石突・鉄鏃・刀子・挂甲・f字形鏡板付轡・壺鐙・鈹具・鞍金具・鈴杏葉・三環鈴・雲珠・辻金具・鐙・鉇・鉄斧・鑷子・砥石・画文帯神獣鏡・勾玉・銀環・帯金具<br>鉄刀・鉄鏃・挂甲・轡・辻金具・鈹具・鎌<br>埴輪・須恵器・土師器 | 5世紀第3四半期 | 斎藤・柳田他1980 |
| 14 | 諏訪山1号墳<br>(円墳) | 東松山市大字西本宿 | 2 | 約90cm<br>約82cm | 1号槨<br>粘土槨 | 鉄鏃・玉類・須恵器 | 5世紀末 | 金井塚他1970<br>関・宮代1987 |
| 15 | 岩鼻2号墳(円墳) | 東松山市大字松山字岩鼻 | 1 | 19.0cm | 粘土槨 | 鉄鏃・砥石 | 6世紀初頭 | 埼玉県立歴史資料館1981<br>埼玉県1982 |
| 16 | 姫塚古墳（円墳） | 比企郡吉見町大字久米田 | 1 | | 竪穴式石室？ | 円筒埴輪 | 6世紀前半 | 吉見町1978 |
| 17 | 善能寺5号墳<br>(円墳) | 坂戸市善能寺小字愛宕 | 1 | 42.0cm | 粘土槨 | 鉄刀・鉄鏃・円筒埴輪 | 6世紀前半 | 坂戸市1992 |
| 18 | 樫樹古墳 ※※ | 秩父郡長瀞町野上 | 1 | 約80cm | 横穴式石室 | 鉄刀・楕円形鏡板付轡・辻金具・円筒埴輪・形象埴輪 | 6世紀前半 | 小澤・柳田1957<br>玉口1971<br>長瀞町教育委員会1974 |

※　基本的に各文献による年代観を提示したが、五領式期の実年代は書上元博氏に御教示を受けた。
※※遺物は個人蔵の資料であり、共伴関係等の詳細は不明である。なお、その年代は馬具の編年観（宮代栄一氏御教示）による。

の立聞に用いられるものと比べるとやや細身である。現段階では、兵庫鎖自体から年代差を求めうるような型式学的分析が進んでいないため、本例の兵庫鎖の年代は、その大きさから5世紀後葉から6世紀後葉までの範囲に位置づけざるを得ない。しかし、このことから、剣身と拵が同時期に製作されたという前提に立つかぎり、本例は5世紀でも前半にさかのぼるものではないと考えられる。

**兵庫鎖の用途**　次に問題なのは兵庫鎖が剣に直行するように取付けられていたのか（第606図A）、平行に取付けられていたのか（第606図B）ということである。言い換えると、遊離している留金具が、残っている留金具と左右対象の位置にあったのか、それとも同じ側の切先もしくは関よりにずれた位置にあったのかという問題である。表面の肉眼観察やX線による写真撮影でも、その痕跡を判別することはできなかった。この兵庫鎖の用途が単なる装飾ではなく、より機能的な佩用のためのものと考えると、この違いは重要な意味合いを帯びてくる。なぜならば刃の側を身体に向けるという不自然なかたちをとらない以上、Aの場合はその佩用は縦向きとなり、Bの場合は横に吊り下げる可能性が大きいからである。

剣の佩用は大刀と異なり、国内にはまったくといっていいほどデータがなく比較することができない。しかし、中国では、璏（えい）という玉器による佩用が春秋戦国時代初期に出現し、南北朝時代まで用いられていた（成・鈷1990）。これは第607図のように、鞘のやや柄よりの部分に設けられ、腰帯をくぐらせて斜めに垂下させるものである。方法は異なるが、1ヵ所での縦の佩用という点ではAと共通する部分がある。さらに、5世紀後半における大刀の佩用は、「杖刀」の補助的な意味合いでの縦位佩用が主流であったと考えられる（瀧瀬1991）ことから、この剣の兵庫鎖はAのように取付けられていた可能性が強い。

なお、出土状態からはそれを裏づけるような情報は得られなかった。ただし、兵庫鎖のうち第606図2dの5連の部分が、長く垂下した先端の状況を示しているようであり、Aの装着とするわずかながらの根拠になると思われる。

以上、稲荷前遺跡C区第1号土壙墓出土の鉄剣について、その年代と拵を中心に考察を加えてきた。その結果、この鉄剣は5世紀後半代の遺物であり、兵庫鎖を佩用金具に持つ特異な剣である可能性を指摘することができた。今後の資料の増加や研究の進展に伴い、さらなる細かな検討がなされることを期待したい。

臼杵　勲・宮代栄一両氏には貴重な御教示をいただいた。末筆ながら記して感謝する次第である。

（瀧瀬芳之）

**注**

1　本県の出土例には短い両刃の利器が鎗先と判断される状況は見いだされていない。
2　宮代栄一氏の御教示による。

**引用・参考文献**

赤石光資他1978『薬師耕地前遺跡』上尾市文化財調査報告第4集　上尾市教育委員会
池淵俊一　1993「鉄製武器に関する一考察 —古墳時代前半期の刀剣類を中心として—」『古代文化研究』No.1　島根県古代文化センター

今井　宏他1984『屋田・寺ノ台』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第32集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
臼杵　勲　1990「武器」『月刊考古学ジャーナル』№321　ニュー・サイエンス社
小澤國平・柳田敏司　1957『古墳調査報告書 第2編 —秩父市及び秩父郡古墳調査—』　埼玉県教育委員会
川越哲志　1993『弥生時代の鉄器文化』　雄山閣
金井塚良一他1970『諏訪山古墳群』　東松山市教育委員会
車崎正彦　1990「江川山の鏡—古墳出土鏡をめぐって—」『上尾市史調査概報』創刊号　上尾市教育委員会
小久保徹他1978『東谷・前山2号墳・古川端』埼玉県遺跡発掘調査報告書第16集　埼玉県教育委員会
後藤守一　1940「古墳時代前期の剣」『考古学雑誌』第30巻第3号　日本考古学会
埼玉県　1951『埼玉県史』第1巻　先史原史時代
埼玉県　1982『新編埼玉県史』資料編2　原始・古代 弥生・古墳
埼玉県立さきたま資料館　1994『埼玉県古墳詳細分布調査報告書』　埼玉県教育委員会
埼玉県立歴史資料館　1981『収蔵展示目録』I
埼玉考古学会他　1993『第150回展示「最新出土品展」』
斎藤　忠・柳田敏司他　1980『埼玉稲荷山古墳』　埼玉県教育委員会
坂戸市　1992『坂戸市史』古代史料編
菅谷浩之　1984『北武蔵における古式古墳の成立』児玉町史資料調査報告古代第1集　児玉町教育委員会他
菅谷浩之・坂本和俊　1975「美里村長坂聖天塚古墳の調査」『第8回遺跡発掘調査報告会発表要旨』　埼玉考古学会他
菅谷文則　1975「前期古墳の鉄製ヤリとその社会」『橿原考古学研究所論集創立三十五周年記念』　奈良県立橿原考古学研究所
成　東・鈡　少昇編　1990『中国古代兵器図集』　解放軍出版社
関　義則・宮代栄一　1987「県内出土の古墳時代の馬具」『埼玉県立博物館紀要』14　埼玉県立博物館
高橋　敦　1987「北通遺跡第25地点・26地点の調査」『針ヶ谷遺跡群』富士見市遺跡調査会調査報告第27集
瀧瀬芳之　1991「大刀の佩用について」『埼玉考古学論集』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
玉口時雄　1971『秩父—土師器を中心として—』早稲田大学考古学研究室報告第10冊　早稲田大学考古学研究室
長瀞町教育委員会1974『ながとろ風土記』
増田逸朗他1972『塚本山古墳群』埼玉県遺跡発掘調査報告書第10集　埼玉県教育委員会
増田逸朗他1981『清水谷・安光寺・北坂』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第1集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
宮島秀夫　1992「東松山市観音寺遺跡の調査」『第25回遺跡発掘調査報告会発表要旨』　埼玉考古学会他
柳田敏司　1964「埼玉県児玉郡生野山将軍塚古墳発掘調査概報」『上代文化』第34輯　國學院大学考古学会
吉見町　1978『吉見町史』上巻

## 2．古墳時代後期～平安時代

稲荷前遺跡B・C区から検出された古墳時代後期以降平安時代に至る集落は住居跡157軒を中核に、掘立柱建物跡、井戸跡、土壙等から構成される。このうち1軒は6世紀前半代のもので、集落構成上は北側に隣接する棚田遺跡との関りが強いものである。本格的に集落が営まれるのはどうも7世紀を前後する時期と思われ、それ以降10世紀まで盛衰を繰り返しながら存続した模様である。先ず、分析の前提として土器群の時間軸を設定し、それに基づき集落の変遷を辿ることをとりあえずの目的としたい。稲荷前遺跡全体の集落様相、また入西遺跡群を包括した集落変遷に関しては稿を改めて行いたい。

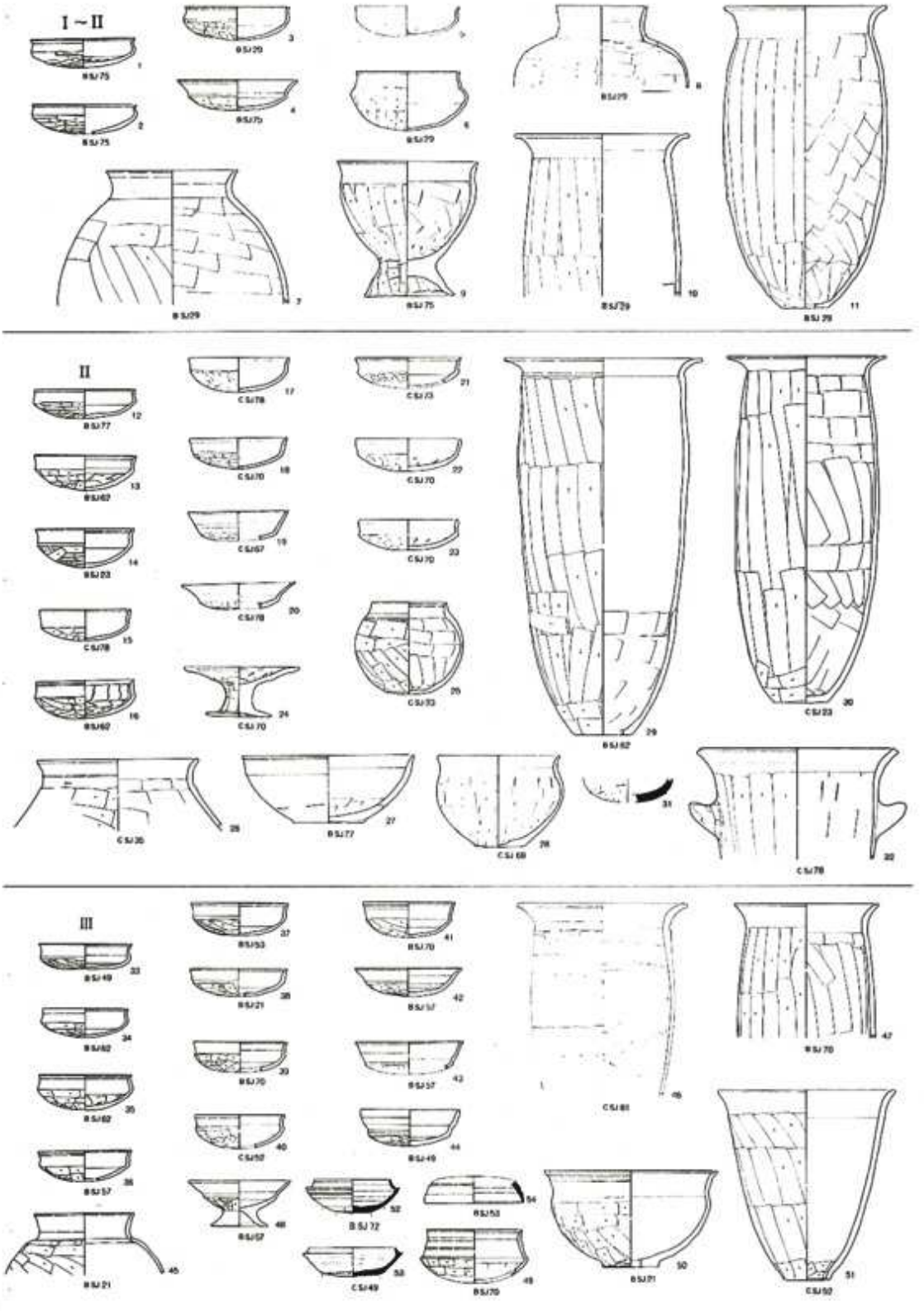
### （1） 出土土器について

稲荷前遺跡の土器様相についてはA区の報告の中で触れたことがある（富田1992）。B・C区の土器群に関しても基本的には同様な変遷を辿るものと考えられ、凡そ7世紀を前後する段階から10世紀に至るまでの間をⅠ期～ⅩⅤ期に段階設定した。第609～613図には土師器坏と甕、須恵器坏類を主体に主要土器群を示したが、全ての器種を網羅したわけではない。7世紀代にあっては主に土師器坏と甕の様相、特に比企型坏の小型化と模倣坏系比企型坏の様相を基軸に据えた。8世紀以降は土師器坏類に替わって須恵器坏類が供膳器の主体を占めるようになることから、供給窯跡である南比企窯跡群における須恵器の変遷観（渡辺1988他）に、武蔵型甕の様相を加味して段階設定した。

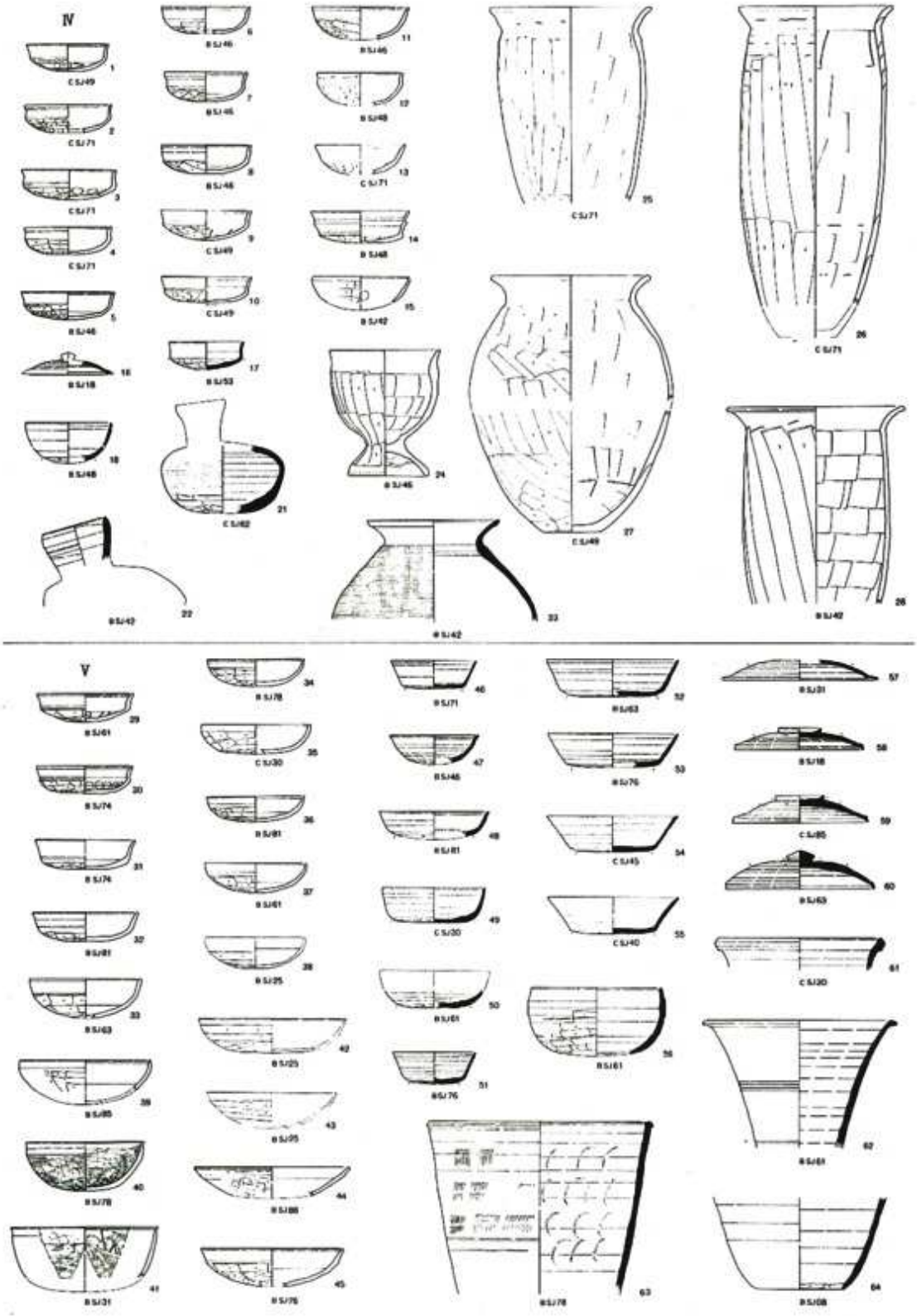
Ⅰ期以前としてはB区5号住居跡がある。土師器坏・甕・高坏・小型甕から構成される。坏は比企型坏と模倣坏があり、前者は口縁部が短く外反し（A1類）、口径13cm前後で体部は深い。甕はやや長胴化が進んではいるがⅠ期以降のものと比較すると胴部の膨らみが強く、器高が低い。6世紀前半代に位置付けられるもので、遺跡北側に存在する棚田遺跡との関りが強いものと推定される。また、C区70号住居跡出土の甕（第463図18）もⅠ期以前に遡る可能性がある。稲荷前Ⅰ期との間には半世紀程の隔たりが存在し、入西遺跡群全体を見渡しても今のところ空白期となる模様である。周辺では稲荷前遺跡西側に近接する長岡遺跡Ⅲ区3号住居跡で、須恵器坏身模倣坏、長脚高坏に伴って口径15cmほどの比企型坏が出土しており（加藤ほか1993）、入西遺跡群の空白期を埋める資料となろう。

Ⅰ～Ⅱ期　土師器坏は比企型坏が主体である。比企型坏は口径13cm程と比較的大振りで口唇部に沈線が巡るもの（第609図2）と沈線がないものがある（1）。口縁下位の内屈が強く腰の位置は高い。甕は口径と胴部最大径が同程度のものである。B区29・75号住居跡が該当する。舞台遺跡B区13号住と比較すると坏では腰の位置が若干下がっており、その分やや後出するかもしれない。塚の越遺跡では比企型坏の口径が13cm代のもので占められる。51・57号住が類似するが、塚の越遺跡の比企型坏は口縁下位のくびれが弱いものが多い。土師器甕は胴部中位に膨らみをもち、長胴化するものとやや短いものが残存するようである（10・11）。Ⅰ期からⅡ期に掛かる時期と考えている。

Ⅱ期　土師器坏が比企型坏を主体とすることには変わりはないが、口径が12cm代のものが主体とな




第609図　I～III期の土器群



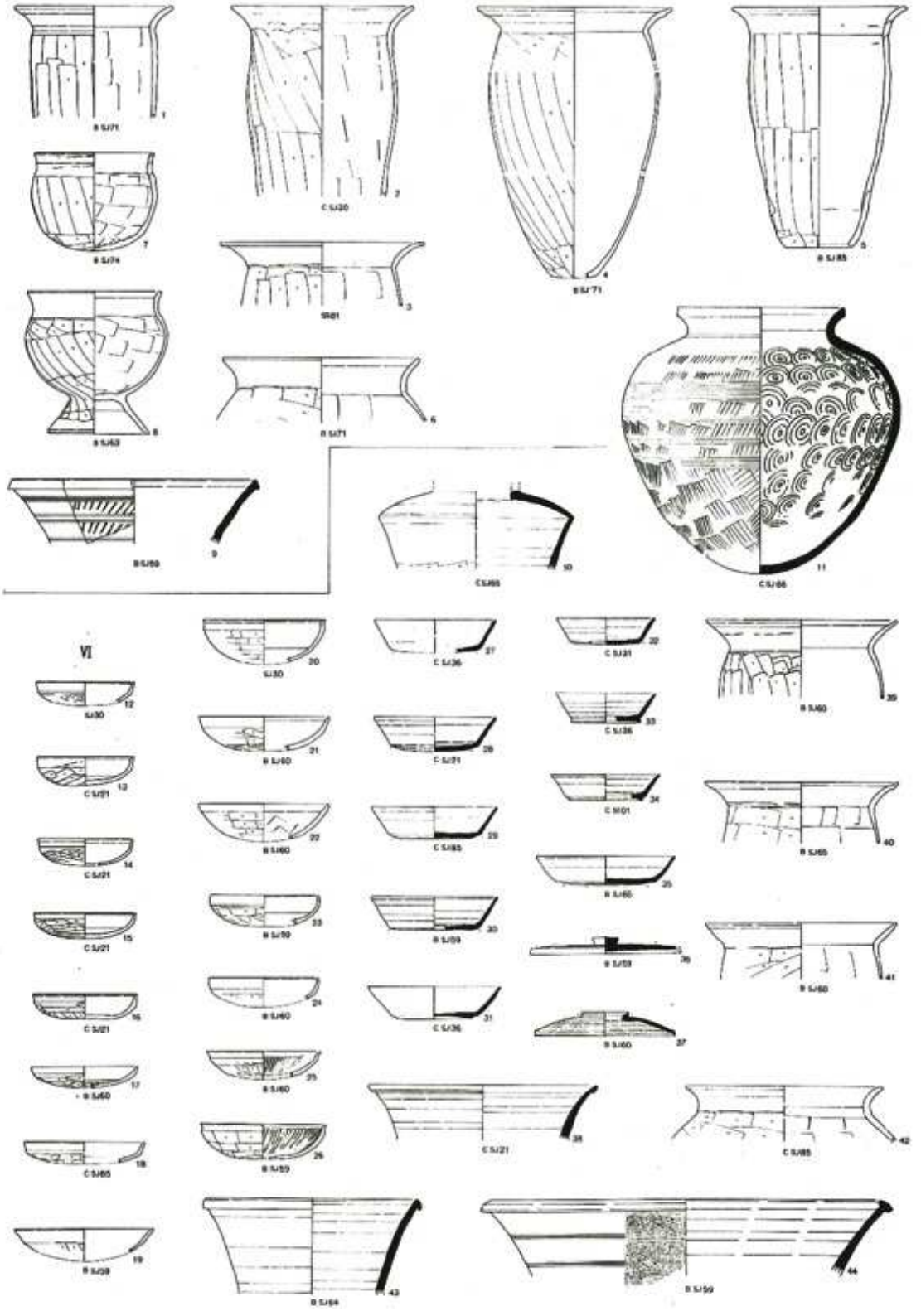

第610図　Ⅳ・Ⅴ期の土器群

る(第609図12等)。勿論、口径の縮小化傾向は漸移的なもので明確に区分できるわけではないが、形態的にみると口縁部下位の内屈が弱く腰の位置も下がるとともに、口唇部内面に沈線を巡らすものが増加する。その他、模倣坏系比企型坏、模倣坏、有段口縁坏が認められる。甕は長胴化が顕著に認められ胴部の膨らみは消滅傾向にある。

Ⅲ期　比企型坏は口径11cm代またはそれ以下に縮小するものが主体を占める。比企型坏は口縁下位が内屈するもの以外に、直立気味のものや外傾するものが相対的に増加するようである。一方、模倣坏の形態に類似した「模倣坏系比企型坏」は該期に出土数が確実に増加する(坏B類)。B類は口唇部内面の沈線と赤彩に比企型坏の影響が認められるが、口縁と体部の境に稜をもつもので、形態的にはいわゆる模倣坏に類似する(39～41)。模倣坏、有段口縁坏は少数ながら存在する。土師器甕には全体を窺える資料はないが、口縁部の外反が弱く斜め上方に立ち上がるもの(47)と、口縁部が緩やかに外反するもの(46)が存在する。須恵器坏はB区72号住居跡(52)・C区49号住居跡(53)から遺存率の高いものが出土した。口縁部の立ち上がりは比較的高いが、前者は口径9・3cm、後者は口径10.6cmと縮小している。52は尾張産と思われ、組み合うであろう蓋は10.5cm程と推定される。残念ながら遺構に伴うものではない。53は南比企窯跡群産である。伴出する土師器は次期(Ⅳ期)に降るものと考えられる。須恵器蓋は良好な資料ではないが、B区53号住居跡例(54)がある。天井部との境に沈線を巡らし、口縁部は内弯気味におさめるもので南比企産の可能性がある。蓋はB区5号周溝墓からも1点出土しているが勿論遺構に伴うものではない。口径11cm程で口唇部内面に斜行する面をもち、天井部は手持ちヘラケズリが施される。産地は不明である。そのほか、B区5号周溝墓からはフラスコ瓶が出土している。口縁部を欠くが胴部にカキ目が施されるもので、胎土には白色針状物質が含まれ明らかに在地産といえる。フラスコ瓶は東松山市立野遺跡出土例があり(酒井1986)、7世紀末葉段階までの存続期間を考慮しなければならないが、そこまで下がるものではなかろう。該期またはそれ以前と思われる。

Ⅳ期　比企型坏は口縁下位が内屈する典型的なタイプは明瞭には認められなくなる。口縁下位が直立、または外傾するタイプは引き続き存続するが口径は10cm前後まで縮小する(第610図1～6)。坏B類は土師器坏の主体となる。口径は同様に10cm前後のものが主体となる(7～9)。また丸椀風の坏(坏C－第610図11)、有段口縁坏(14)、模倣坏(10)は本期にも伴う他、北武蔵型坏(15)が新たに出現する。土師器甕は口縁部が「く」の字状に屈曲するものが目立つようになる。

須恵器蓋は良好な資料に欠けるが、B区18号住居跡から内面にかえりをもついわゆる「坏G」蓋が検出されている(第610図16)。口径10cm程の坏とセットになるものと推定される。17は坏H蓋と見ることもできるが、口径が9.2cmと非常に小形で、セットとなるべき坏は口径8cm程のものが予想される。胎土から南比企産であることは間違いなし、果してそこまで小形化した在地産の坏Hが在存するかどうか疑問な点もあり、取り敢えずここでは坏身と考えておきたい。18は胎土から湖西産と推定されるものである。口縁部内面に沈線が巡るタイプで後藤分類の蓋付無台坏身B類に属するものと考えられる(後藤1989)。21・22は平瓶で両例ともに南比企窯跡群産である。22はぼったりした作りと粘土紐巻き上げ痕を残す手法は東松山市桜山古墳群10号墳出土例と酷似している。両例ともに時期的には前段階としたほうが無難かもしれないが、伴出した土師器はⅢ期に遡るものではない。23



第611図　V・VI期の土器群

は甕で胴部はカキ目が施される。

Ⅴ期　土師器坏Ｂは該期まで存続するようである。Ⅳ期のものに比して口径がやや大きくなり底部平底化したものが目立つ。全体に扁平な印象を受けるものが多い(第610図29･30)。その他、模倣坏系統のもの(31～33)、浅椀風のもの(34～36)、北武蔵型坏(37.38)、ヘラミガキを施す深椀(41･42)、皿形に近いもの(42～45)など坏類の多様性が本期の特徴の一つに挙げられる。浅椀風のものについては赤彩されるものと無彩のものがある。36･40･42･45等は焼成が良好で、素地土が比較的緻密であることなど共通点が見られる。白色針状物質は少量含まれるものと、確認できないものがある。類例は川越市霞ヶ関遺跡92号住居跡をはじめ、最近では川越市東下川原遺跡で前述した坏類が多量に検出されている(註１)。また、坂戸市明泉遺跡、蔵ヶ谷戸遺跡、東松山市大塚原遺跡などでも類例が見られ、少なくとも入間北部から比企丘陵にかけて一定の分布範囲をもっているようである。土師器甕は古墳時代タイプのもの(第611図１)の他に、武蔵型甕の系列につながるような口縁部が長く水平方向に引き出されるものが出現する(第611図２～４)。

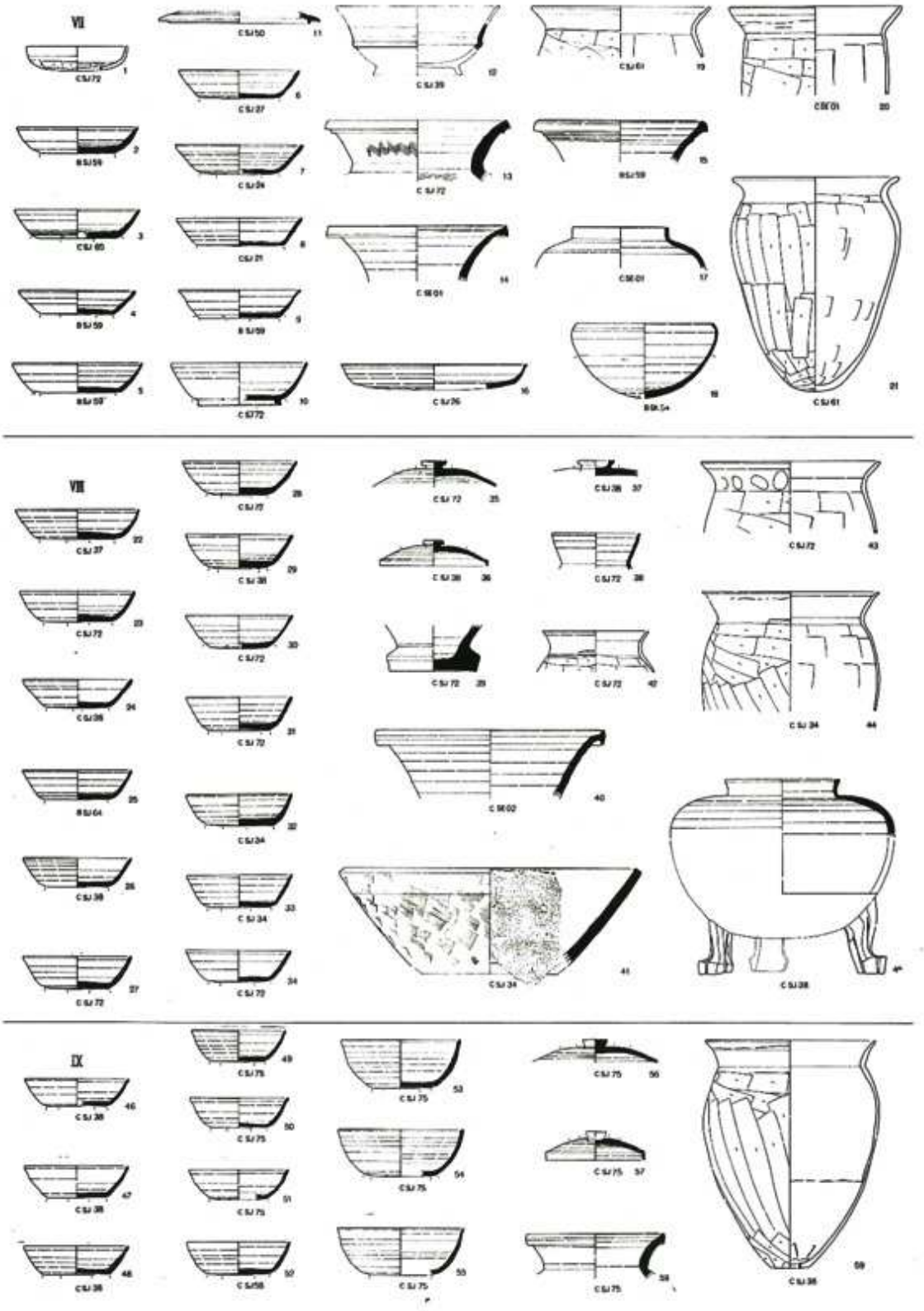
須恵器は該期以降ほとんどが南比企窯跡群産となる。坏は立野遺跡の系譜を引くような平底風のもの(第610図46)、丸椀風のもの(47～50)、坏Ｇ風の深身の小形坏(51)、山下６号窯併行期と思われる大形坏(54･55)等がある。坏Ｇ風の小形坏はＢ区76号住居跡から２点出土しており、供伴土器から見ても前期には遡らないものである。典型的な坏Ｇと比較すると、口縁部の外反が顕著な点に新しい様相が示されていよう。広町Ａ遺跡８号住居跡にはⅥ期に下がる例が確認されている。蓋はかえり蓋(57)と、無かえり蓋(58～60)がある。57は在地産であるが、かえりが退化しており次期に下がるかもしれない。56は無台椀と思われ、立野遺跡に類例がある。63･64は甑。63は大形甑で立野遺跡、稲荷前遺跡Ａ区145号土壙と同類と思われ鳩山窯跡群において次期以降主流となる甑の系譜からは外れるタイプである。64は底部筒抜けの甑であろうか。該期とすると須恵器としては異例に属する。第611図９は東海産と思われる甕で頸部に沈線区画と列点文が巡る。

Ⅵ期　土師器坏は前段階の浅椀風の一群と深椀･皿が残存する(第611図12～22)。底部が平底化した16は新しい様相といえるかもしれない。坏Ｂ類はほとんど確認できない。また、北武蔵型坏(23･24)、暗文坏(25･26)など非在地産と思われる土器も少量存在する。土師器甕は胴部上位を縦ケズリするものと、横ケズリするものがあり、口縁部は強く屈曲する(39～41)。

須恵器坏は口径15cmを越える大形坏が主体となる(27～31･35)。底部は僅かに丸底風で、糸切り後ヘラケズリ調整されるものが多い。31は糸切りが深く入りすぎたためヘラケズリは施されていない。32は大形坏をスケールダウンしたような比較的小形の坏で、基本的に法量分化しない南比企窯跡群産須恵器にあって稀少例である。須恵器甕11は小形の丸甕で、古墳時代タイプの残存形態と考えられる。胴部外面に叩き後カキ目調整が施される。

Ⅶ期　土師器坏は良好な出土例に乏しい。基本的に在地産土師器坏類はその役割を終える段階といって良いだろう。土師器甕20は武蔵型甕の系列で、最大径は口縁部にある。21は在地産の甕で器壁は厚く胎土に白色針状物質を多量に含む。胴部は縦方向のヘラケズリ調整される。Ｃ区61号住居跡から出土したもので、伴うとすれば在地産土師器の甕では最新段階のものとなる。

須恵器坏は口径14cm前後の比較的大振りのものが主体となる。底部は平底化し、扁平･盤状の器形




第612図　VII～IX期の土器群

をとる。口縁部は内弯気味に開くものが多いようである。底部調整は糸切り後回転ヘラケズリ調整される。蓋の様相はよくわからないが、「特殊かえり蓋」が数点検出されている(11)。尤もV期～該期までの存続幅があるようで(渡辺1991)、必ずしも該期に固定化することはできない。甕(13)は伴出土器から該期としたが良好な類例が乏しい。鉄鉢形(18)は薄手の精製品であるが伴出土器がなく、該期以降とした方がよいかもしれない。

Ⅷ期　土師器坏には良好な伴出例が認められない。土師器甕は武蔵型甕の系列にあるもので、胴部の膨らみが目立つようになる。須恵器坏は口径が14cm～13cm前後とⅦ期よりも若干縮小する。第612図22は前期としても良いかもしれない。底部は全体に厚いものが多く、底部調整は回転糸切り後周辺ヘラケズリが主流である。蓋は釘頭状の鈕をもつもの(35・36)とリング状の鈕をもつもの(37)がある。37は佐波理模倣椀の蓋と思われる。浅鉢型の41は、口縁部を折り縁にするタイプが主流となる南比企窯跡群の中で類例の少ないものである。45は獣脚付短頸壺でやはり類例は少ないものである。

Ⅸ期　須恵器坏の法量の縮小化は続き、口径12cm代が主体となる。底部調整は回転糸切り後ヘラケズリされるが、全体に器肉が薄くなる。椀は体部が内弯気味に開くもので55は口唇部が薄く外反気味となる点で新しい様相が窺える。土師器甕は良好な例がない。C区38号住居跡出土例(59)を掲げたが典型的とはいえないようである。口縁部は外反し、胴部上半の張りが強まり最大径を胴部にもつ。

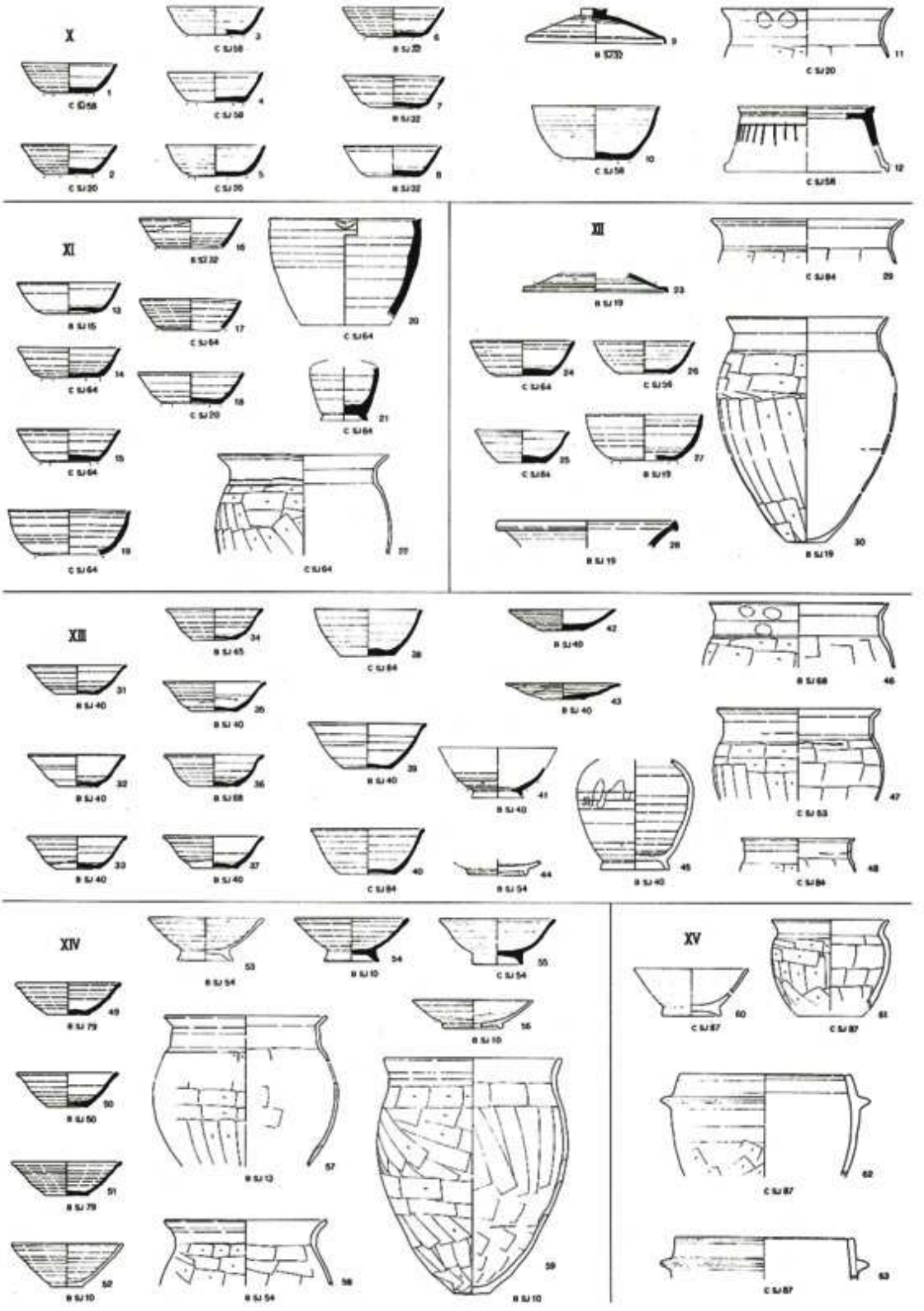
X期　須恵器坏は口径11cm代の小振りのものを主体に12cm代のやや大きいものを含む(第613図1～8)。体部に丸みを残すものと直線的に伸びるものがある。底部調整は回転糸切り後ヘラケズリを施すもの、無調整のものの両者が見られる。蓋(9)は椀蓋で口唇部は薄くつくりは甘い。椀(10)は深椀で口縁部は肉薄で外反気味となる。円面硯(12)は中堤がなく、脚部透かし穴も沈線刻みに変化している。土師器甕(11)は口縁部上端を折り曲げ、「コ」の字状口縁となっている。

XⅠ期　須恵器坏は前段階に比して口径がやや拡大するようである。底部再調整を施すものと無調整のものがある(第図13～18)。伴う土師器甕は「コ」の字状口縁甕である。20は片口鉢、21は小形の長頸瓶か。

XⅡ期　須恵器坏はほぼ底部回転糸切り後無調整のものに統一される。口径に対する底径比は1/2よりもまだ大きい(24～26)。椀(27)は厚手のものでロクロ目が目立つ。土師器甕は「コ」の字状口縁甕で、頸部が外傾するもの(29)と、頸部が内傾するもの(30)がある。

XⅢ期　須恵器坏は口径に対する底径比が1/2以下となる段階である。体部中位に膨らみをもち口唇部は玉縁状になるものが目立ってくる(第613図31～37)。椀(38～40)は深椀でロクロ目が目立つこと、口縁が外反するものが現れるなど坏と同様新しい要素が認められる。皿は本段階に認められる(42・43)。45は灰釉陶器の瓶で胎土から猿投産と推定される。土師器甕は前代同様「コ」の字状口縁甕である。

XⅣ期　須恵器坏の底部が更に縮小し、結果的に体部の開きが大きくなる(49～52)。高台椀は高台が前段階のもの(41)に比べて厚いようである。土師器甕は「コ」の字状口縁を保つものもあるが(57)、胴部器壁が厚くなるなど規範が崩れつつある。また、「コ」の字が崩れて「く」の字状に外反するもの(58)や、口縁部の屈曲が弱まり、厚手の甕に変質したものも現れている(59)。この段階の甕には胎




第613図　X～XV期の土器群

土に白色針状物質が多量に含まれるものが明瞭に認められ、前段階までの武蔵型甕の様相とは異なる点である。甕の様相から見ても新旧２時期に分けるべきかもしれない。

ＸＶ期　Ｃ区87号住居跡で代表させる。煮沸形態に羽釜をもつ段階である。酸化焔焼成の高台坏(第603図60)と小形甕(61)、羽釜(62・63)がセットを構成する。羽釜は土師質の焼き上がりを示し、胎土には白色針状物質が含まれることから明らかに在地産である。小形甕(61)は胎土に雲母が目立ち在地の胎土とは異なるようである。本段階をもって稲荷前の集落は解体する。

年代観

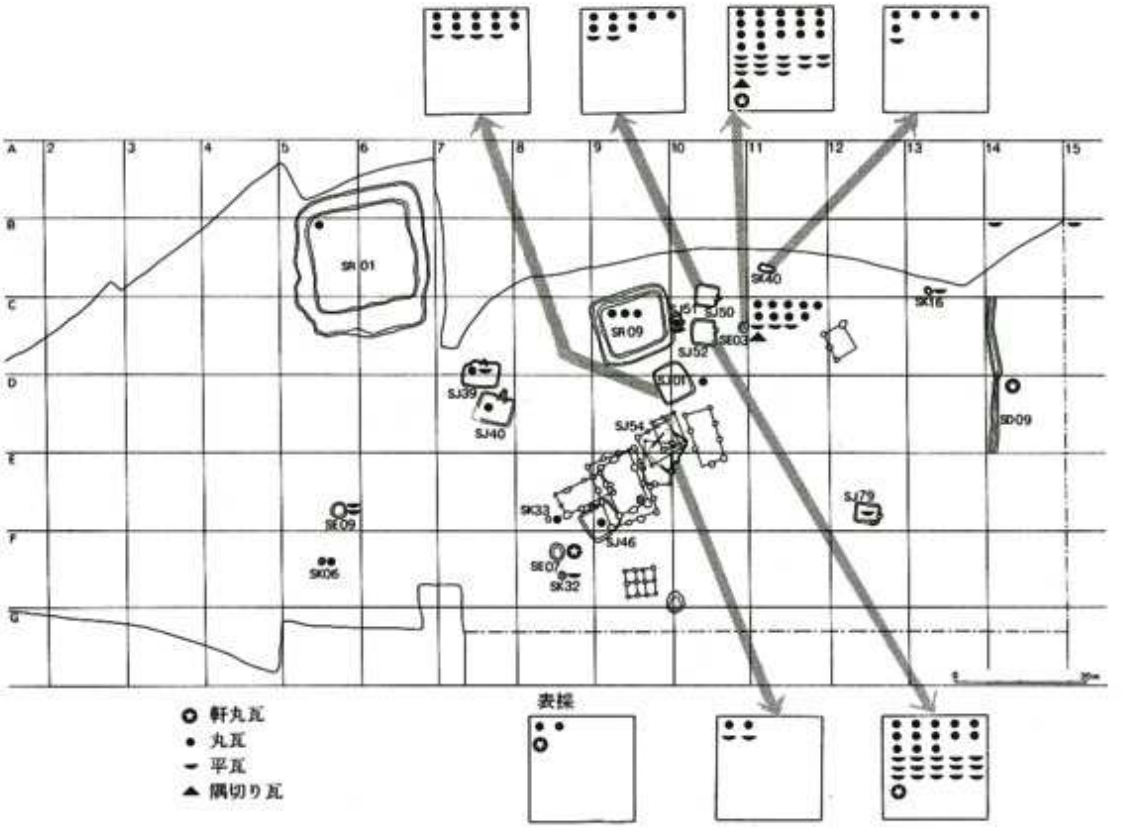
各段階の年代については確定するだけの根拠に乏しいのが実状である。最近では飛鳥Ⅱ期新段階の水落遺跡出土土器が文献から660年頃に比定する見方が有力になりつつある(西口1993)。従って、飛鳥Ⅲ期は必然的にそれ以降に降ることになる。また、８世紀以降では武蔵国分寺の創建期と再建期が本遺跡でいうⅧ期、ＸⅡ期にそれぞれ対応するものと理解されている(渡辺1990)。概ねそれに沿った形でⅠ～Ⅲ期が７世紀前後～７世紀中葉、Ⅳ・Ⅴ期が７世紀後葉から８世紀初頭、国分寺創建期を含むⅧ期が８世紀中葉であることから、Ⅵ・Ⅶ期が８世紀前半、Ⅸ期が８世紀後葉となる。８世紀終末から９世紀代はＸ期～ＸⅢ期、ＸⅣ期・ＸＶ期の年代は９世紀末葉～10世紀代と考えられるが、特にＸＶ期についてはＸⅣ期との整合性を含めて年代を限定する根拠を持ち合わせていないため、取りあえず保留しておきたい。

## (２)　小形瓦について

稲荷前遺跡からは通常の瓦よりもかなり小さい瓦が100点以上検出された。小形瓦といっても滑川町大沼遺跡から出土した(福田1993)ようなミニチュア版といえるほど小形ではなく、十分実用に耐えるものと判断される。通常一遺跡でこれだけの数量の瓦が検出されれば寺院跡に比定される場合が多いが、本遺跡に大規模な伽藍を備えた寺院的機能を求めるのは無理がある。最近、注目されつつある小規模な堂宇を備えた「村落内寺院」と想定することはできないであろうか。出土状況、分布、時期等基礎的な整理を行いつつ問題点を抽出してみたい。

**概要**　種類としては軒丸瓦、丸瓦、平瓦、隅切り瓦の４種類があり、軒平瓦を欠く。小形瓦はＢ区から集中して検出され、Ａ区で数点、Ｃ区からは皆無であった。一応Ｂ区に限定したうえで出土数(破片数)を示すと、軒丸瓦が５点、丸瓦が78点、平瓦が49点、隅切り瓦が２点、総数134点となる。焼成は灰色～青灰色を呈し須恵質に焼き上がったものと、灰白色～黄灰色を呈しやや軟質なものがあるが、種類別に焼成が異なるということはない。胎土には白色針状物質が明瞭に認められ、南比企窯跡群において生産されたことは間違いない。

軒丸瓦は瓦当面の直径が約10cm。瓦当面は界線によって区画され、蓮弁は単弁４葉をデフォルメしたような特異な意匠で、２本１対の棒状凸線が計８本(４対)中房まで延びている。また、界線から中央に向かって伸びる三角形の楔状の突起が、棒状凸線２本毎に１個、計４個配されており、おそらく間弁を表現したものと推定される。この間弁と思われる突起をもつものと当初からもたないものの２タイプが存在する。丸瓦との接合方法はいわゆる印籠接ぎ技法によるものである。




**第614図　小形瓦の分布**

丸瓦は凸面平行叩き、凹面布目が原則である。両側縁の遺存するものを見ると幅は約10cm、厚さは1cm前後を測る。凸面は平行叩き、凹面は布目痕を残すものと、その後ナデ調整を施すものがある。端面は平行叩き痕を残すものとヘラケズリされるものがある。また、凹面には布目の上に巻かれた紐状圧痕が瓦の円弧に平行する形で残されているものがかなりの割合で認められ、成形台に巻かれた布を緊縛するために撚紐が使用されたことを示している。

平瓦は全体の遺存するものはない。厚さは1cm前後で凸面平行叩きで、凹面はナデ調整が原則で枠板状の痕跡が認められるものはない。端面は丸瓦同様平行叩き痕を残すものとヘラケズリ調整されるものがある。

隅切り瓦は2点あるがいずれも小片で全体は判明しない。平瓦の端面をヘラ状工具により斜めに切り落としたものである。

今のところ、これらの特徴を持った瓦の類例は県内他遺跡では認められず、軒丸瓦の系譜関係も明らかにできない。退化した単弁4葉の軒丸瓦は旧盛徳寺や石原山遺跡に類例があり、9世紀後半～10世紀頃の年代が与えられている(坂野1982)。本例はそれにも増して退化的であるが、小型製品故のデフォルメとみることもでき、一概に後出的というのも問題があるのかもしれない。製作技法も特異で他に類例を知らない。小形瓦が出土した遺跡としては京都府南春日町遺跡(上村1983)、兵庫県播磨千本屋廃寺(高井他1982)が著名である。南春日町遺跡から出土した軒丸瓦は数種類の大きさのものが存在するが最も出土量の多いものは瓦当径11cm前後、播磨千本屋廃寺のそれは直径6cm

となり、稲荷前遺跡出土の軒丸瓦は両者の中間域に位置するものといえる。両遺跡ともに標準サイズの塔を1/2または1/3にスケールダウンさせた五重塔の軒を飾ったものと推定されている。小形の瓦が必ずしも小形の建物の屋根を葺いたとは断言できないが、南春日町遺跡や千本屋廃寺例を参考にすると本遺跡出土の小形瓦の機能としてやはり小規模な建物の屋根を葺いたものと考えるのが最も自然であり、おそらく当初から小形建物の建築を意図して製作させたオーダーメイド品と考えるのが妥当ではなかろうか。

**分布と時期**　小形瓦は先述したようにB区からその大半が出土している。更にB区の中での分布状態を検証すると、C-9～11グリッド周辺に集中することがわかる(第614図)。地形的に見ると小形瓦の集中した地点は調査区内でも最も標高の高い部分に相当しており、若し瓦葺きの建物が存在したとするならばこの地域周辺が最も蓋然性が高いものの、調査によってそれに該当する建物跡は検出されなかった。第3号井戸跡から32点、52号住居跡から29点、1号住居跡から14点出土しているほか、C-11グリッドからは確認面付近から13点が検出された。その他の地点からの出土数は極端に少なく、各遺構から1・2点が出土したに留まる。

出土遺構は方形周溝墓、住居跡、井戸、土壙、溝跡と様々で、また時期的に見ても古墳時代前期～中世と幅広い時期に及ぶ。古墳時代前期、及び中世は何らかの原因で混入したと考えられるが、造瓦活動の盛行期に相当する8～9世紀代の住居跡から出土したものに関しては時期を限定する材料でもあり、出土状態を検証してみたい。

第50号住居跡は小形瓦が10点出土した。確認面から床面まで散在的に検出され、そのうち1点は床面下の土壙から出土した。住居の時期はXIII期後半、またはXIV期前半頃と考えている。床面下の土壙から出土したことを重視すれば、住居構築以前に遡ることになる。

第52号住居跡からは小形瓦は29点検出され、主に北半に集中していた。傾向としては壁際に高く中央部では床面から出土したものも存在する。出土状態及び土層堆積から判断すれば壁際の一次堆積層が覆った後さほどの期間を置かずに流入、もしくは投棄されたものと推定された。出土遺物の時期はXIII期～XIV期頃と考えられる。

第39・40号住居跡はXIII期、第54号住居跡はXIII期～XIV期、第79号住居跡はXIV期に比定される。いずれも中心分布域から外れ、小形瓦の出土数自体は少ない。尚、第1号住居跡は古墳時代前期に属し、出土瓦の数量は多いが混入資料と捉える他はない。また第46号住居跡は7世紀代で出土瓦は混入と見て良いであろう。また、3号井戸跡上層からも比較的多量に出土しているが、下層から出土した遺物がなく時期は不明確である。

このように小形瓦が出土した住居跡は、明らかな混入を除くといずれも本遺跡XIII期～XIV期、概ね9世紀後半頃に位置付けられる。遅くともXIV期、50号住居跡の床下土壙出土例を積極的に評価すればXIII期頃には瓦としての役割を終えていたとすることができる。若し瓦葺きの建物が存在し、且つ一定の存立期間を考慮するならば瓦の製作年代はそれ以前に遡ることになるが、上限に関しては今のところ明確にできない。軒丸瓦の形態を考慮すると8世紀代に遡上させるのは難しいかもしれない。

次に集落の動向と掘立柱建物跡の分布について概観すると、稲荷前遺跡B区では本遺跡VIII期を境

に調査区中央部から東側にかけての空間(7列～14列)は、集落適地であるにも関わらず竪穴住居跡が営まれなくなる。その後、この地域に集落が出現するのは小形瓦を伴うXIII期以降となる。一方、この空間に含まれるE-9区周辺には古代の掘立柱建物跡が数棟重複して構築されている。掘立柱建物跡についてはその性格上時期的に限定することは難しく、非住居エリアとなる時期に対応するかどうかは検討を要するが、特に第2号掘立柱建物跡は5×3間の大形建物である。この2号掘立柱建物跡は内部に3×2間の3号掘立柱建物跡が入れ子状に重複していた。村落内寺院として知られている千葉県遠道原遺跡や公津原遺跡L oc.15から検出された建物が3×2間程度の側柱建物に四面庇が付く(笹生他1990)ことから、2号・3号掘立柱建物跡を同一の四面庇付建物と捉えられないかとも考えたが、主軸が僅かにずれ柱筋が通らないことや、寺院に関連するような遺物が皆無であり、いまのところ否定的に考えざるを得ない状況である。ただ、美里町東山遺跡では3×2間の側柱建物に伴って、瓦塔と瓦堂をおさめたであろう2×1間の「堂」的な小規模建物跡が検出されている(横川ほか1980)。本遺跡においてもこのような掘立柱建物跡と瓦葺きの「小堂」をセットとした施設をイメージすることも可能であろう。本遺跡ではA区から1点、B区から1点計2点に留まるが瓦塔の破片が出土したことは村落内の寺院的施設の存在を示す徴証といえるかもしれない。

以上、雑駁な検討を行ったが、小形瓦を葺いたであろう建物の存在を具体的に立証することは現状では難しい。しかしながら蓋然性という面ではかなり強いものと考えられる。調査区以外にその可能性を求めるとするならば、小形瓦の集中するエリアの北側隣接地(調査区外)が有力候補である。この地区は沖積地にやや張り出すような地形を示し、低地からの眺望性という意味では最も適した立地条件を備えているからである。隔靴掻痒の感は否めないが、遺跡周辺部の今後の調査に期待を繋ぐと共に、小なりとはいえ瓦葺き建物を有したであろう本遺跡の性格を改めて検討したい。

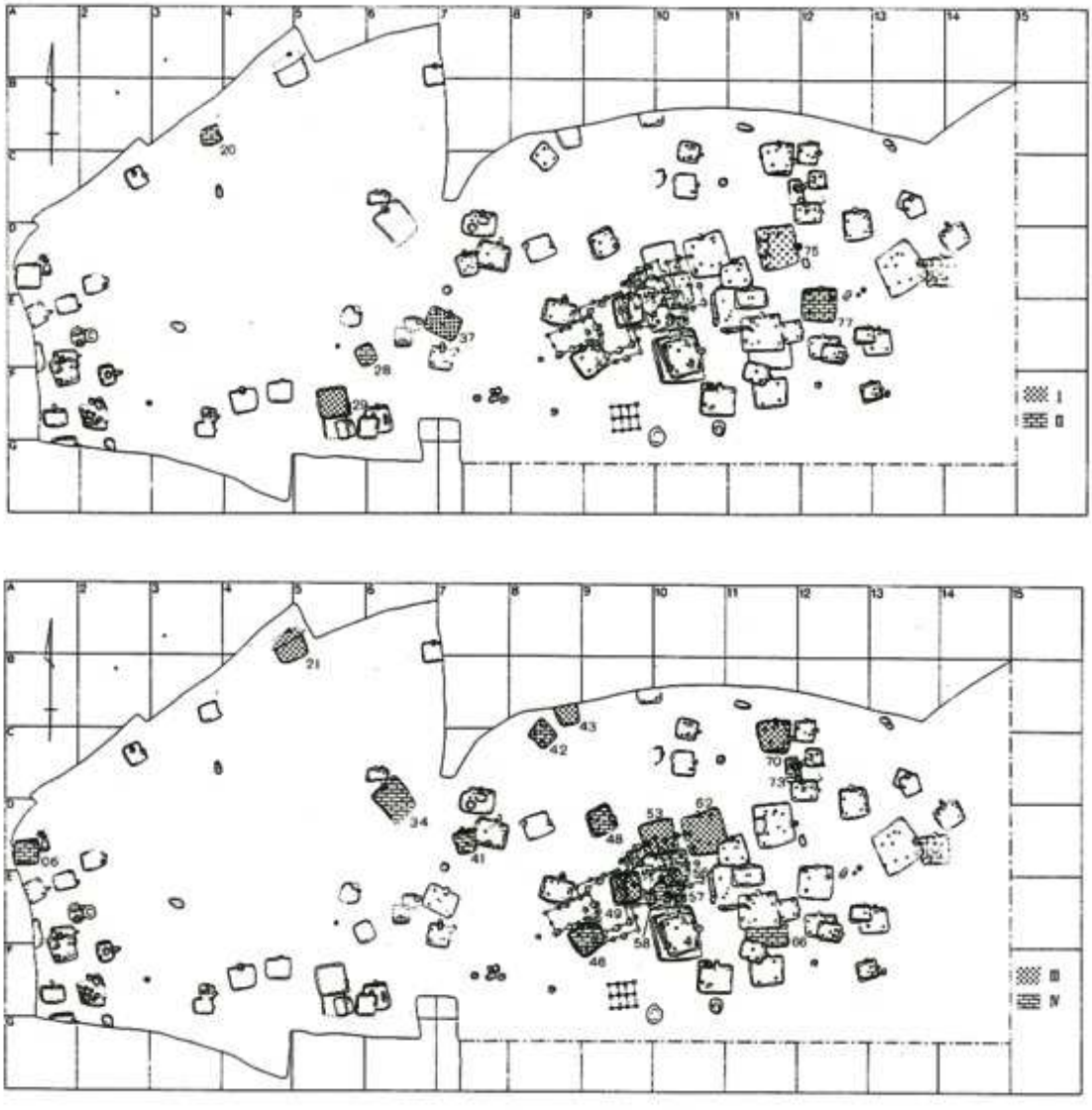
## (3) 集落変遷について

古墳時代後期以降の集落は出土土器から15期に分割した。出現期はA区よりも遡り、凡そ7世紀前後、終末段階は羽釜を伴う時期で10世紀代と推定される。第615図～第622図に集落の変遷図を掲載したが、前後の時期に跨る住居跡や時期を特定できない遺構も数多く認められ、必ずしも同時期存在の遺構を網羅したわけではない。それでも、「稲荷前集落」の時期的な盛衰を把握することはできるであろう。

I・II期(第615・616図)

集落の出現段階である。B区では北西端部の20号住居跡、中央付近の28・29・37号住居跡、東域の75・77号住居跡の3グループで構成される。75・77号住居跡はこの順に継続的に営まれた可能性があり、何れも比較的大型の住居跡である。同様に29・37号住居跡が先行し、20・28号住居跡が後続するものと思われる。

C区では23・35・46・67～70・73・86号住居跡が該期に相当する。67～70号住居跡は集落中央部に集中し、核をなすが、切り合い関係や遺構間隔から4軒の同時併存は不可能である。但し69号住居跡に関しては重複する70号住居跡以前というのみで同グループの初現形態かどうかは明らかではない。68号住居跡がやや古くI～II期、67・70号住居跡がそれに後続するII期と考えておきたい。他の住居

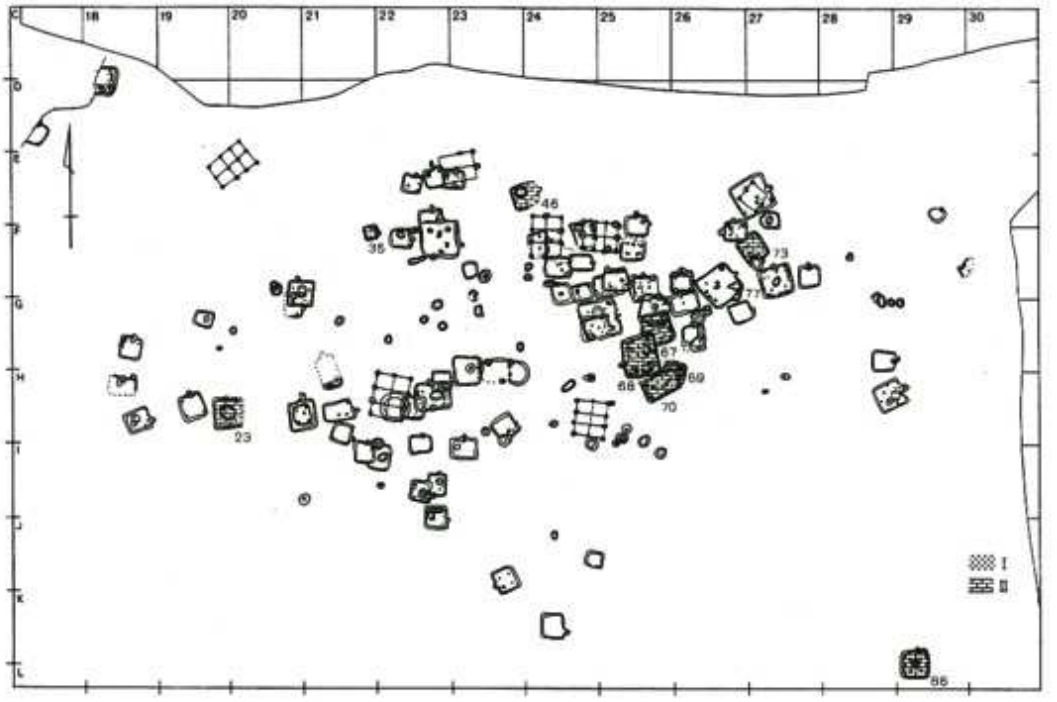


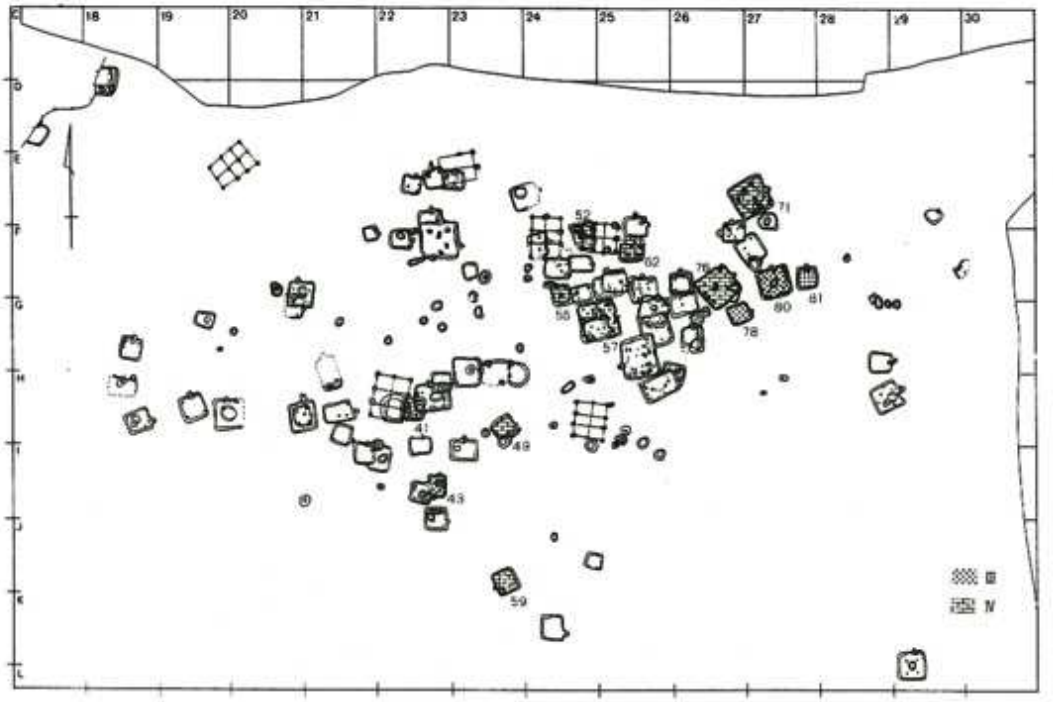
第615図　B区Ⅰ～Ⅳ期の集落

跡は調査区全体に散在する。73号住居跡がⅠ～Ⅱ期、23・35・46号住居跡Ⅱ期に出現するようである。86号住居跡は調査区南東部に単独で位置し、出土遺物から時期決定し難い面があるが一応該期に含めておきたい。

Ⅲ・Ⅳ期(第615・616図)

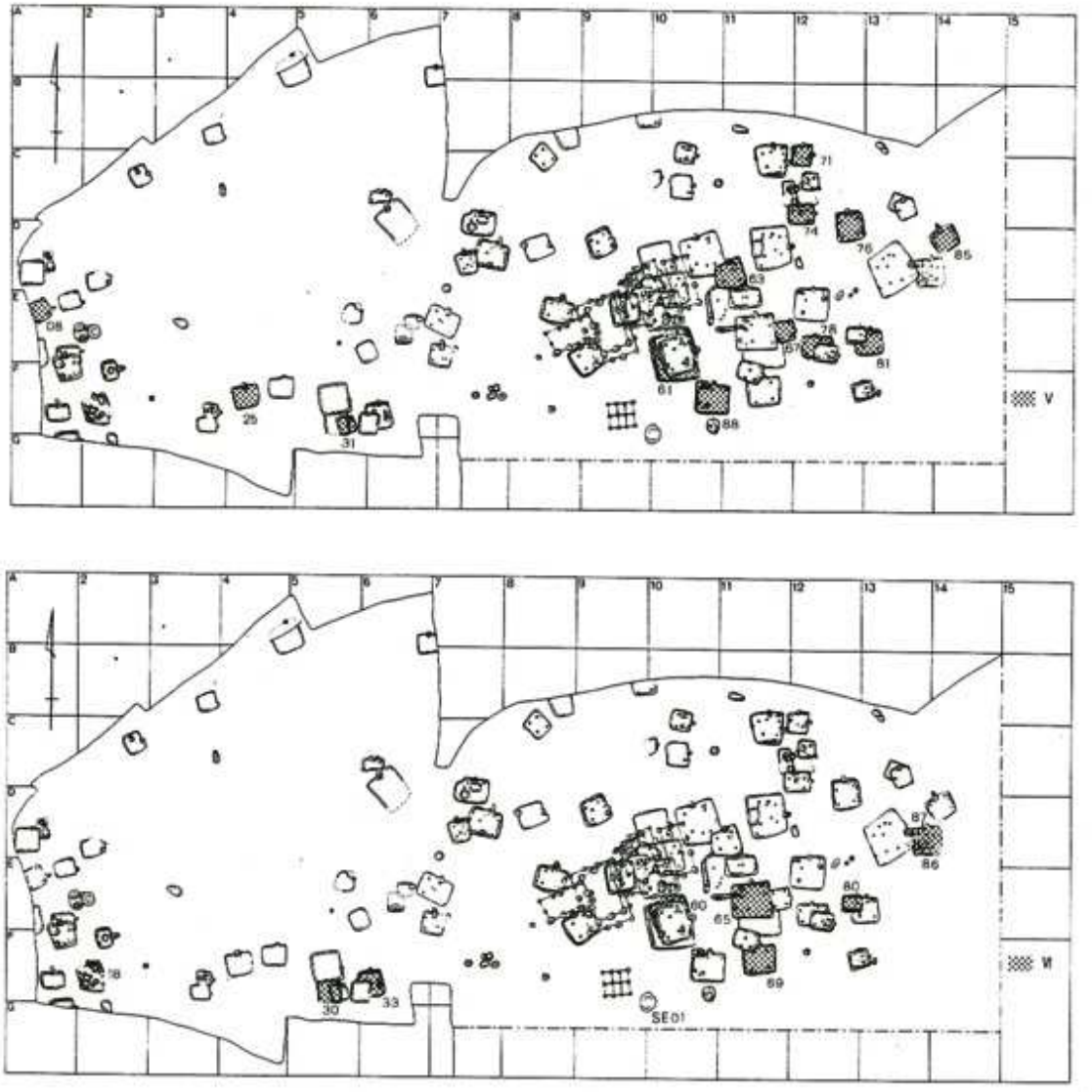
B区ではⅢ期に位置付けられるものとして21・43・49・53・57・62・70号住居跡があり、集落としては拡大傾向が現れる。とりわけ、調査区中央からやや東に寄った地点に4軒が集中して構築される。このなかでは57・62号住居跡が相対的に古い土器を含み、構築時期はⅡ期に遡上するかもしれない。49・53号住居跡がそれに続くものと考えられる。この住居跡群はⅢ期後半からⅣ期に至っても46・48・56・58号住居跡が営まれ継続的に推移したものと考えられる。Ⅳ期に相当する住居跡は他に6・34・42・73号住居跡が挙げられ集落構造としては安定し、分布域も広がることがわかる。Ⅲ期から継続する




**第616図　C区Ⅰ～Ⅳ期の集落**

住居跡は43→42号住居跡、70→73号住居跡と推定されるが、調査区西域では明確な変遷は摑めない。また、66号住居跡は出土遺物が乏しく必ずしも明確にできないが、北武蔵型坏の様相から本期に含

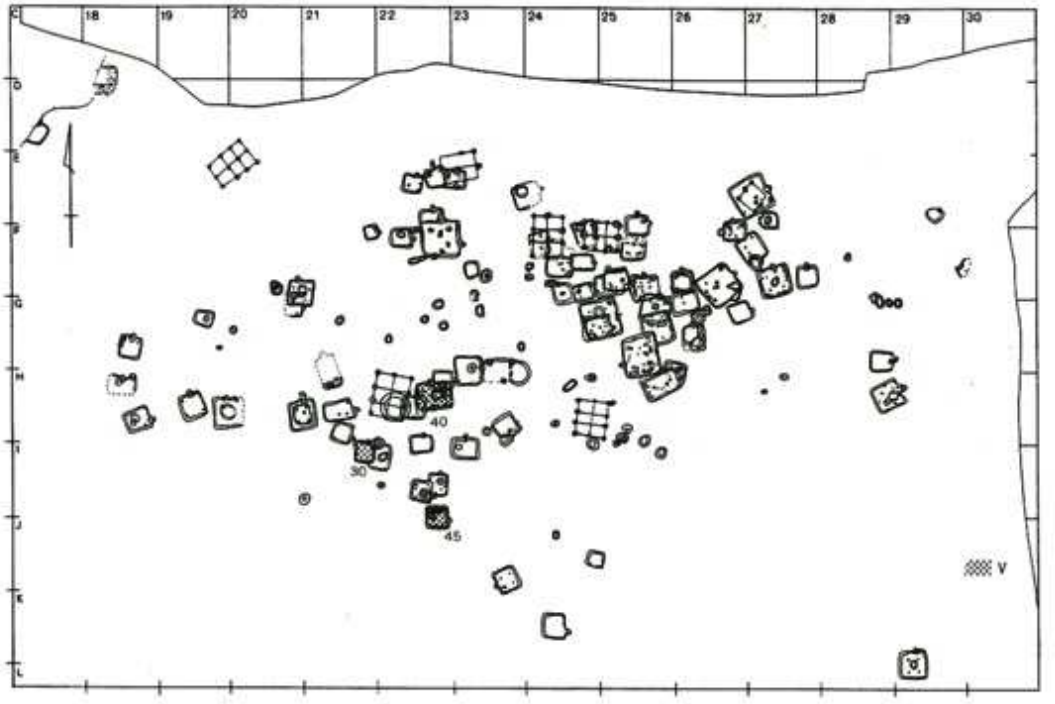


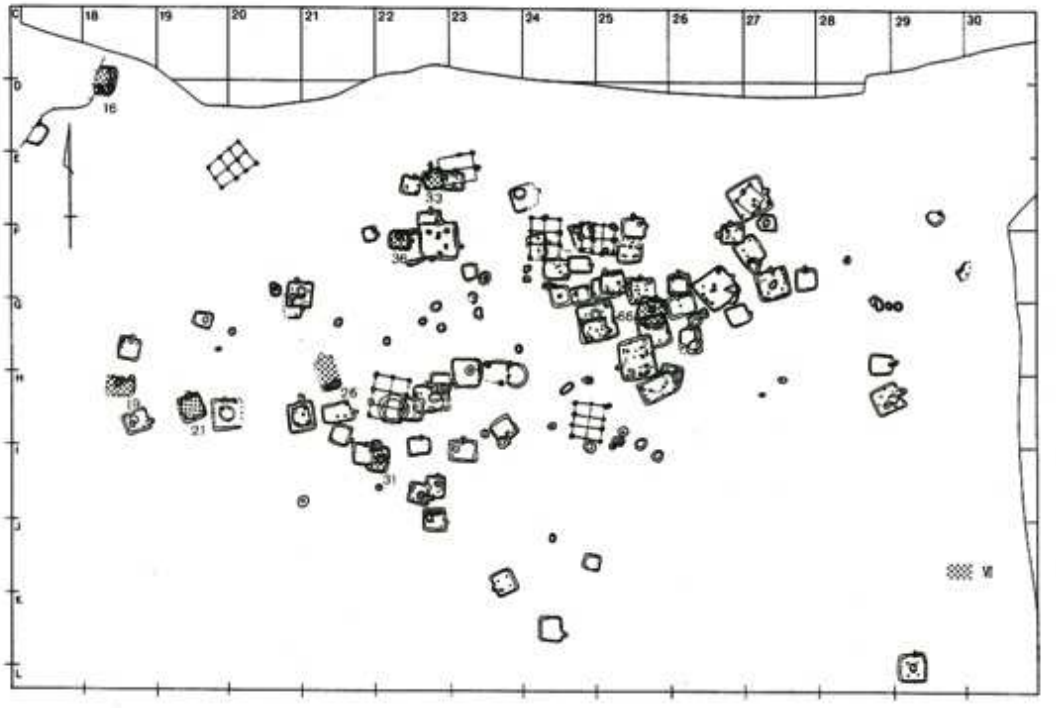

第617図　B区V・VI期の集落

まれる可能性が高い。

C区では43・57・78・80・81号住居跡がIII期に位置付けられる。43・57号住居跡が相対的に古い様相をもちII期～III期にかけて営まれたものと推定される。中心は前代に引き続き調査区中央から東に寄った住居群で、78・80・81号住居跡が近接し、やや西に離れて57号住居跡が構築されている。78・80・81号の3軒からなる住居跡群では78号住居跡が相対的に古い様相を示す。80・81号住居跡は隣接し、同時併存は難しいかもしれない。IV期では調査区中央南寄りの地点には、前期の43号住居跡を取り巻くように41・49・59号住居跡が構築される。調査区中央から東寄りの地点はIII期の57号住居跡の北側に52・55・62号住居跡が、78・80・81号住居跡の北側に71・76号住居跡が営まれ、引き続き安定した住居跡群として存続している。

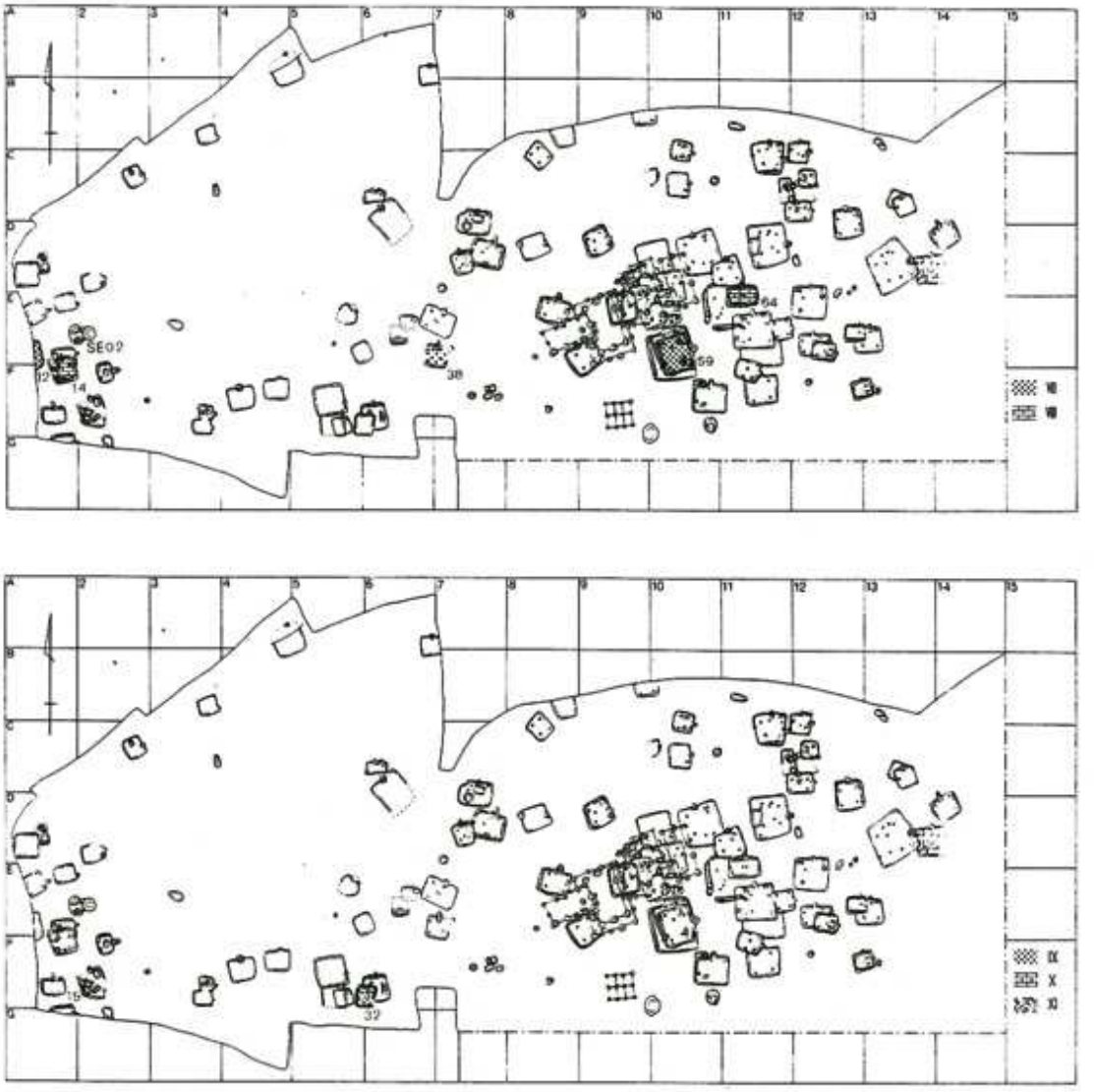
V・VI期(第617・618図)




**第618図　C区V・VI期の集落**

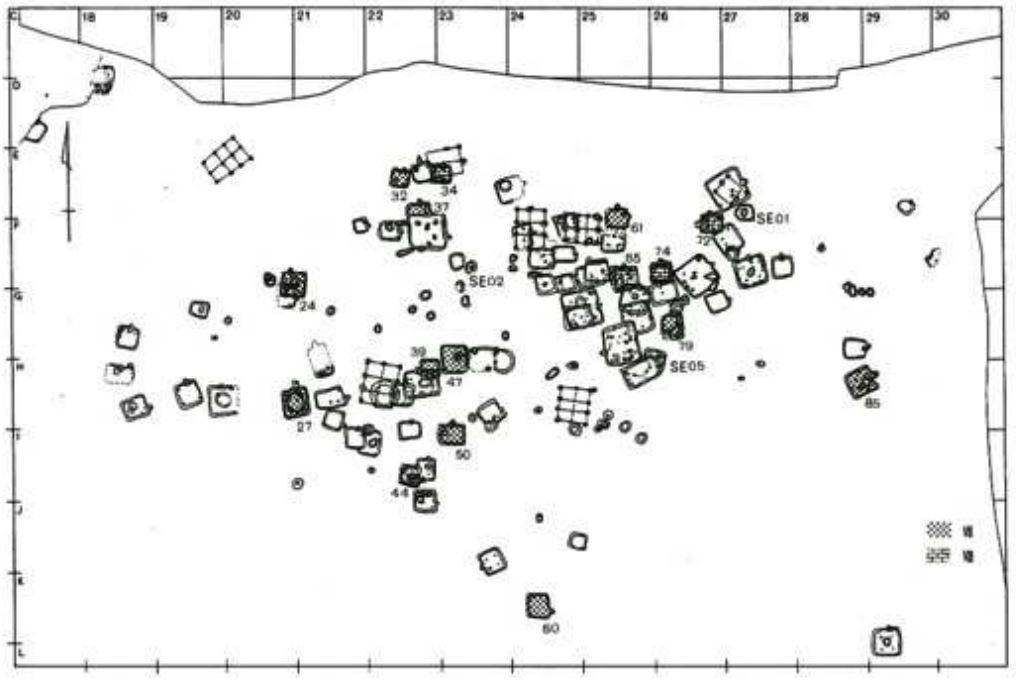
B区では8・25・31・61・63・67・71・74・76・78・81・85号住居跡がV期に相当する。66号住居跡は既述したようにIV期と見た方がよい。前段階にも現れていた傾向であるが、調査区東半の優勢が顕著に認

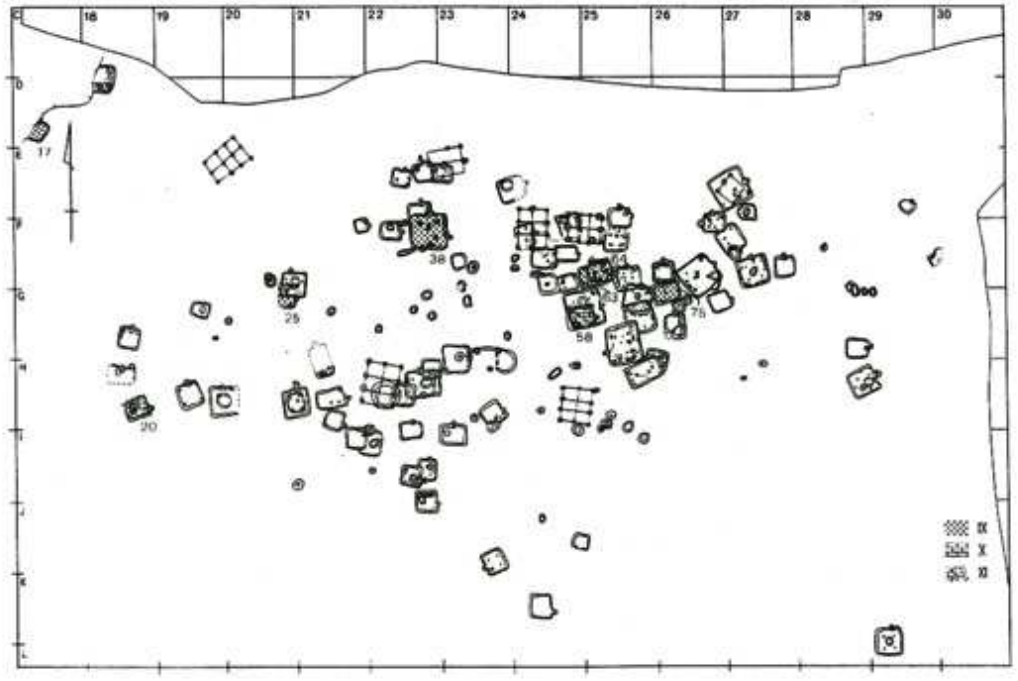


第619図　B区Ⅶ～ⅩⅠ期の集落

められ、西域には8・25・31号住居跡の3軒のみとなる。住居跡数は12軒を数え、集落としても最盛期を迎える。続くⅥ期では18・30・33・60・65・69・80・86・87号住居跡が構築される。構成軒数は9軒となり、前期より若干減少するがまだ比較的安定的な集落が維持されていると言えるだろう。集落構成は前期と大差なく東域の優勢は変わらないが、谷に面した調査区南部に集中して営まれる傾向がある。Ⅴ期からの変遷で見ると60号→61号住居跡、67→65号住居跡、81→80号住居跡、85→86・87号住居跡等、同一地点や近接した位置での建て替えと思われる例が顕著に認められる。逆に、このことが集落構造がほぼ維持された証ともいえるかもしれない。

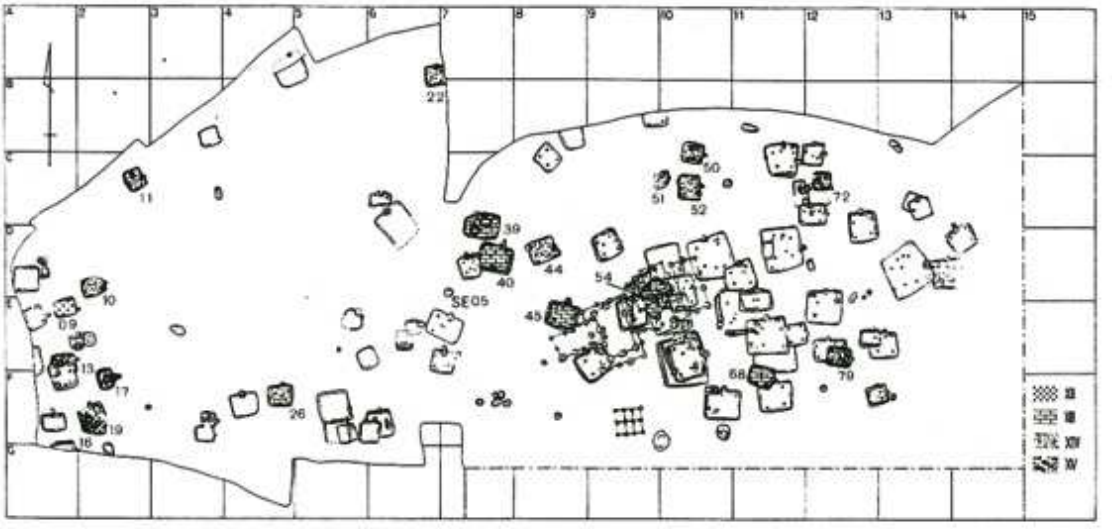
C区では30・40・45号住居跡がⅤ期に該当する。B区とは対照的に構成住居は少なく、前期からも著しく減少する。特に前段階まで中心的な居住域であった調査区中央から東域にかけては皆無となる。続くⅥ期には16・19・21・26・31・33・36・66号住居跡の8軒と、Ⅶ期にいれたが85号住居跡が本期に



第620図　C区Ⅶ～ⅩⅠ期の集落

は構築されていたものと考えられる。合計9軒となり住居跡数は増加に転じる。主に調査区西域に分布し、東域では66・85号住居跡の2軒に留まる。31号住居跡は30号住居跡からの継続的な建て替



**第621図　B区XII～XIV期の集落**

えと思われる。また、21・33号住居跡はVI期からVII期にかかる可能性もある。

VII・VIII期(第619・620図)

B区では前期から一転して構成住居数は極端に減少する。VII期に相当する住居跡は12・38・59号住居跡の3軒となる。第59号住居跡はV期以来同一地点で3回建て替えられたもので該期にまで継続するものと思われる。3軒ともに前期に形成された3つの住居跡群による分布域を継承しているが住居跡自体の連続性は59号住居跡以外は判然としない。

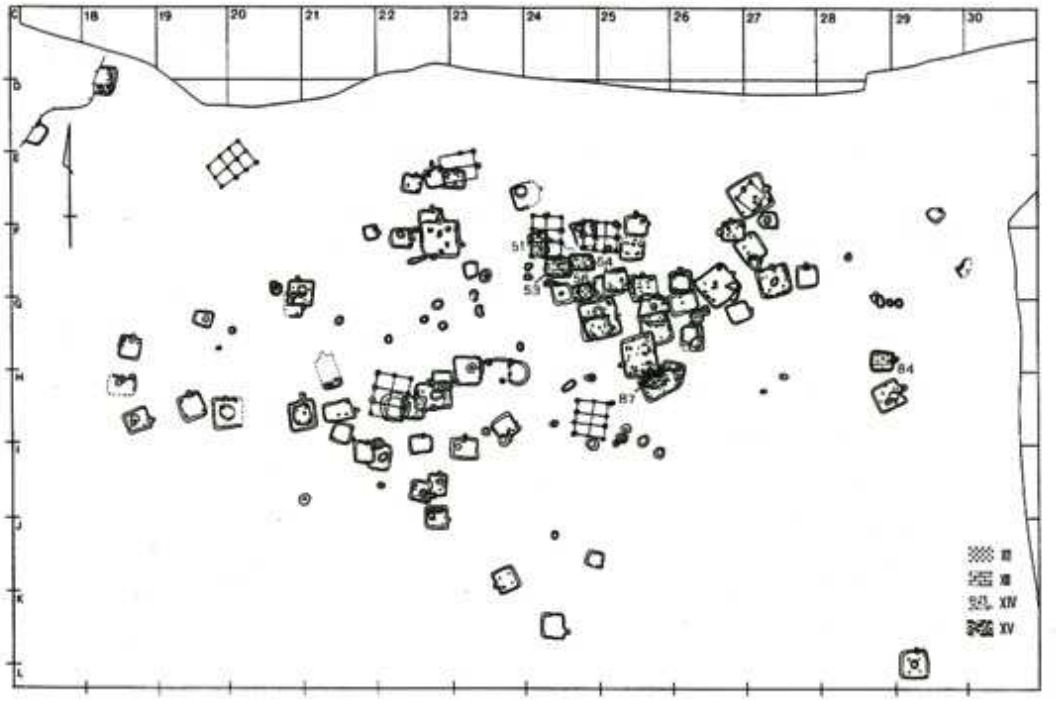
VIII期に至ると集落の衰退は顕著に現れ、構成住居跡は西域の14号住居跡、東域の64号住居跡の2軒を数えるのみとなる。

B区とは対照的に、C区ではVII期に相当する住居跡は24・27・32・37・39・47・50・60・61・79・85号住居跡の11軒を数え、集落規模としては最大に膨張する。それに伴い、居住域も拡大傾向に向かい調査区西端部を除く全域に広がる。続くVIII期に至ると34・38・44・65・72・74号住居跡の6軒となり、一定の住居跡数は維持されるものの前期に比較すると減少するようである。尤も前期とした50号住居跡は本期まで存続する可能性があり、また38・65号住居跡は本期から後続するIX期まで残存するものと考えられる。

IX～XI期(619・620図)

B区ではVII期以来の衰退化傾向は極限に達し、IX期には該当する住居跡は見出せなくなる。現象的には一時的にせよ居住域としての機能を失ったかに見える。続くX～XI期に掛けて15・32号住居跡が構築されるが、僅かに2軒のみで衰退化現象に歯止めがかかったとは言い難い。特に調査区中央から東域にかけての地域にはIX期～XI期に至るまで少なくとも住居跡が営まれた形跡は認められない。

C区では17・25・38・63・65・75号住居跡の6軒が該期に相当する。このうち、38・65号住居跡は前期から本期に掛けて営まれたものと推定される。また、17・25号住居跡は本期に含めたが、良好な資料に乏しくやや不安定である。X期には20・58号住居跡の2軒、XI期には64号住居跡の1軒に減少し、




第622図　C区XII～XV期の集落

B区と同様に集落としては衰退する模様である。

XII～XV期(621図)

B区では9・19号住居跡の2軒がXII期に相当する他、可能性としては16号住居跡が含まれるかもしれない。構成住居跡数は2乃至3軒と少ない。いずれも調査区西端部に分布しており、中央から東域にかけては前期同様「非住居空間」となる模様である。XIII期となると39・40・45・54・68号住居跡が調査区中央から東域にかけて営まれ、また、26・52号住居跡は本期から次期にかけて継続したものと推定される。集落としては復興傾向が現れるようである。XIV期は10・11・13・22・26・44・50～52・72・79号住居跡の11軒から構成される。住居軒数の増加とともに分布域も調査区のほぼ全面に広がり、集落として再興するようである。しかしながら、この段階を最後にB区から住居跡は消滅してしまう。

C区のXII期～XV期の住居跡は調査区中央北寄りに51・53・54・56号住居跡、やや南に離れて87号住居跡、東端に84号住居跡の合計6軒が該当する。集落構成としては前期からの衰退化傾向の延長線上にあり、特に調査区西域は空閑地化する模様である。このうち、中央北寄りの住居跡群では56号住居跡がXII期頃、51・53号住居跡がXIII期、54号住居跡がXIV期に相当し、比較的狭い区画の中で連続的な変遷を辿ったものと推定される。84号住居跡はXIII期、87号住居跡はXV期に降るものと考えられ、それぞれ単独で構築されている。この87号住居跡を最後に、稲荷前遺跡から何故か古代集落は消滅する。再び集落域として復活するのは中世、鎌倉時代を待たねばならない。

以上、B区及びC区の集落構成を対比しながら概述してきた。全体としては同様な時期幅の中で推移しつつも、各時期に細分してみると集落構成はかなり動きが激しく個性的で、必ずしも同一の

変化は辿らないことが判明した。更にA区も含めて比較すれば共通性と個別様相が鮮明となろう。同時に稲荷前遺跡全体を見渡した場合、7世紀初頭頃から10世紀に至るまで集落が連綿と継続したことは注目されてよいものと考えられる。いわゆる「計画村落」(高橋1979)、あるいは「計画的集落」(鈴木1991)などと措定された律令期集落のあり方と対比すれば、本遺跡は古墳時代から律令期に至るまで長期にわたって継続するという側面から見る限り「非計画村落」、あるいは「自然村落」ということになるであろう。計画村落の出現が古墳時代集落の再編成を前提とする以上、一方において本遺跡にみられるように律令的な再編成に無縁であったかはともかく、現象的には「長期継続型集落」が存在することにも一定の意味が見出されるべきであるし、逆に自然村落の存在形態が問い直されねばならない。ただ、本遺跡の性格が基本的には農業集落として把握されるならば、やはり本集落が長期に渉って継続する背景に北側に広がる広大な水田域(いわゆる「入西条里」の施行と直接的に結びつくかどうかは別として)の存在を抜きにしては考えられないものと推定される。

集落分析の切り口は多様である。上記の計画村落論のように集落の出現と消滅段階を問題とするもの、あるいは集落の継続期間から弁別する方法、そして遺構及び出土遺物から集落の性格を規定する方法(例えば井上1989)などがある。いずれにしても本遺跡も周辺遺跡との関連性の中で存在し得たものである限り、やはりそれらとの対比のうえでその性格を規定するべきであろうと考える。

問題点の指摘に終始してしまったが、稲荷前遺跡全体の集落動態、そして入西遺跡群全体の律令期集落の動向については今回まとめることができなかった。周辺遺跡の様相を含めて別途検討したい。

## (4) 胎土分析結果から

稲荷前遺跡から出土した土師器と須恵器について、第四紀地質研究所の井上 巖氏に委託して胎土分析を実施した。詳細なデータと分析結果に関しては附編に譲るが、ここでは分析の意図と分析結果に対する筆者なりの見解を述べることにする。蛇足ながら分析値の評価とグルーピングは井上氏のそれとは異なる部分がある点をお断りしておきたい。

土師器

従前から南比企窯跡群産の須恵器胎土中に白色針状物質が多く含まれることはよく知られており、同窯跡群産須恵器のメルクマールとされている。白色針状物質は肉眼的な識別が容易であることから、武蔵国における須恵器の分布論、あるいは流通問題を扱う際にも重視されてきたところである。前回、稲荷前遺跡A区の整理を通じて入西遺跡群から出土した土器を観察する中で、白色針状物質は須恵器のみならず、縄文土器、弥生土器、土師器にまで通有に含まれることに気づいた。須恵器の在り方を援用すれば、白色針状物質は当地域の在地産土師器のメルクマールとすることも充分可能となる訳で、土師器の生産と流通を考えるうえでも本遺跡周辺は絶好のフィールドといえる。

ところで、律令期の器種組成を通観すると、既に指摘されているように入間郡北部地域は南比企窯跡群が本格的な操業を始める8世紀前半以降、供膳器は須恵器坏類でほぼ占められ、土師器坏類は器種構成から基本的に欠落するといっても良いほど減少すること、一方土師器甕類は「武蔵型甕」として類型化された胴部器壁の極めて薄いものが主体的に存在し、8・9世紀段階において煮沸具

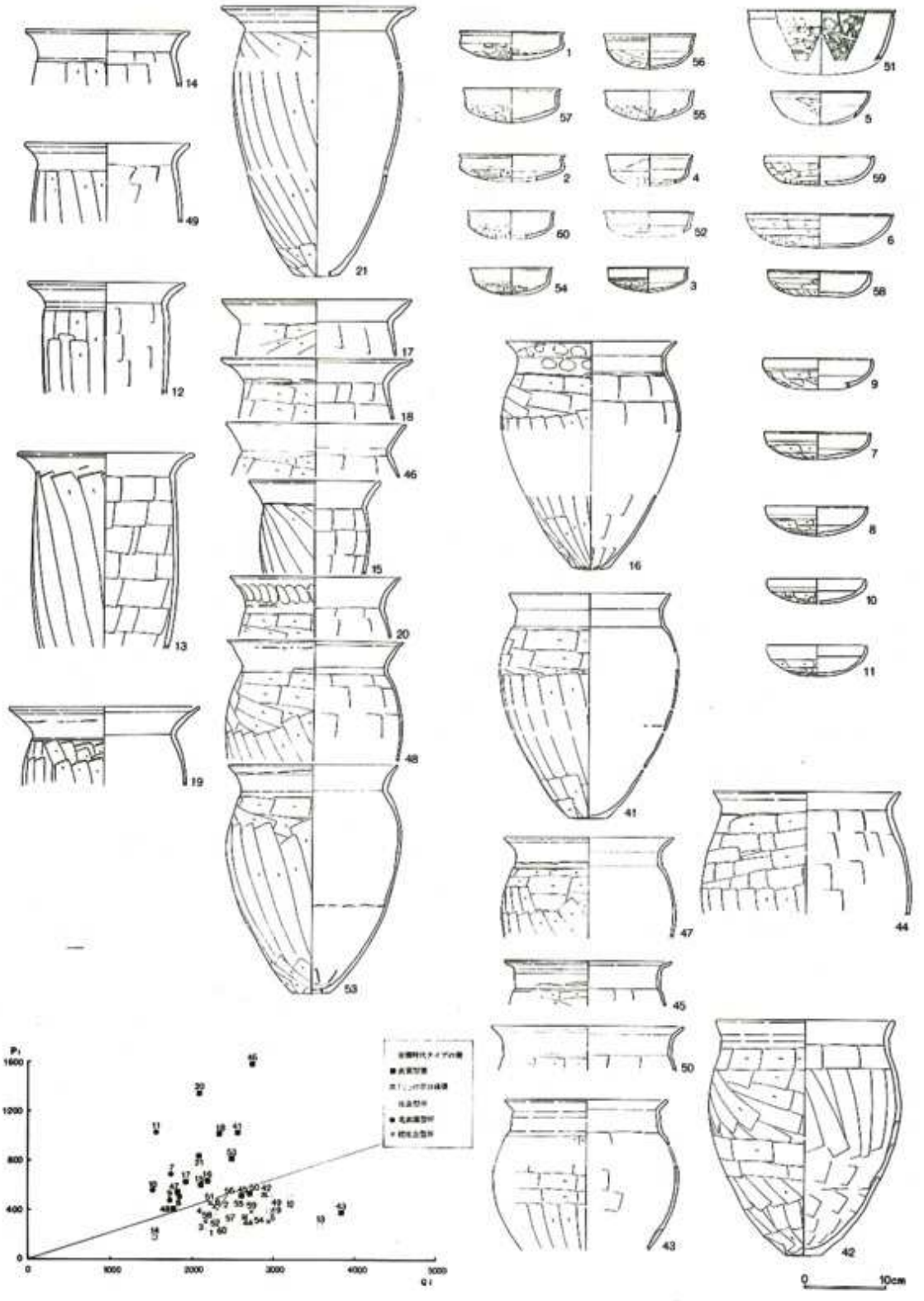
として継続的に使用されていることが指摘されており、稲荷前遺跡においても基本的には同様な在り方を示す。

このことを念頭に稲荷前遺跡から出土した7世紀以降の土師器の胎土を観察すると、在地産土師器坏(比企型坏・続比企型坏)は白色針状物質が明瞭に含まれるものと、短い針状物質が少量含まれるか、場合によっては含まれないもので比較的硬質な焼き上がりを示すものの大きく2タイプに分かれるようである。有段口縁坏は白色針状物質が含まれるものと含まれないものの2者が認められ、比率的には前者が多いものと考えている。在地産土師器坏類は先述したように8世紀初頭～前半段階までは確認されるが、それ以降確実に伴う例は認められなかった。一方、いわゆる北武蔵型坏は量的には少ないが7世紀後半以降認められ、胎土に白色針状物質は全く確認できなかった。このことから肉眼観察による限り比企型坏とは明らかに異なり、少なくとも本地域以外で生産されたものが搬入された可能性が高いものと判断された。また、北武蔵型坏に限っては在地で形態を模倣した製品はあまり生産されなかったものと思われ、その意味で、いわゆる模倣坏や有段口縁坏の在り方とは一線を画すものがあり今後注意すべき現象といえよう。

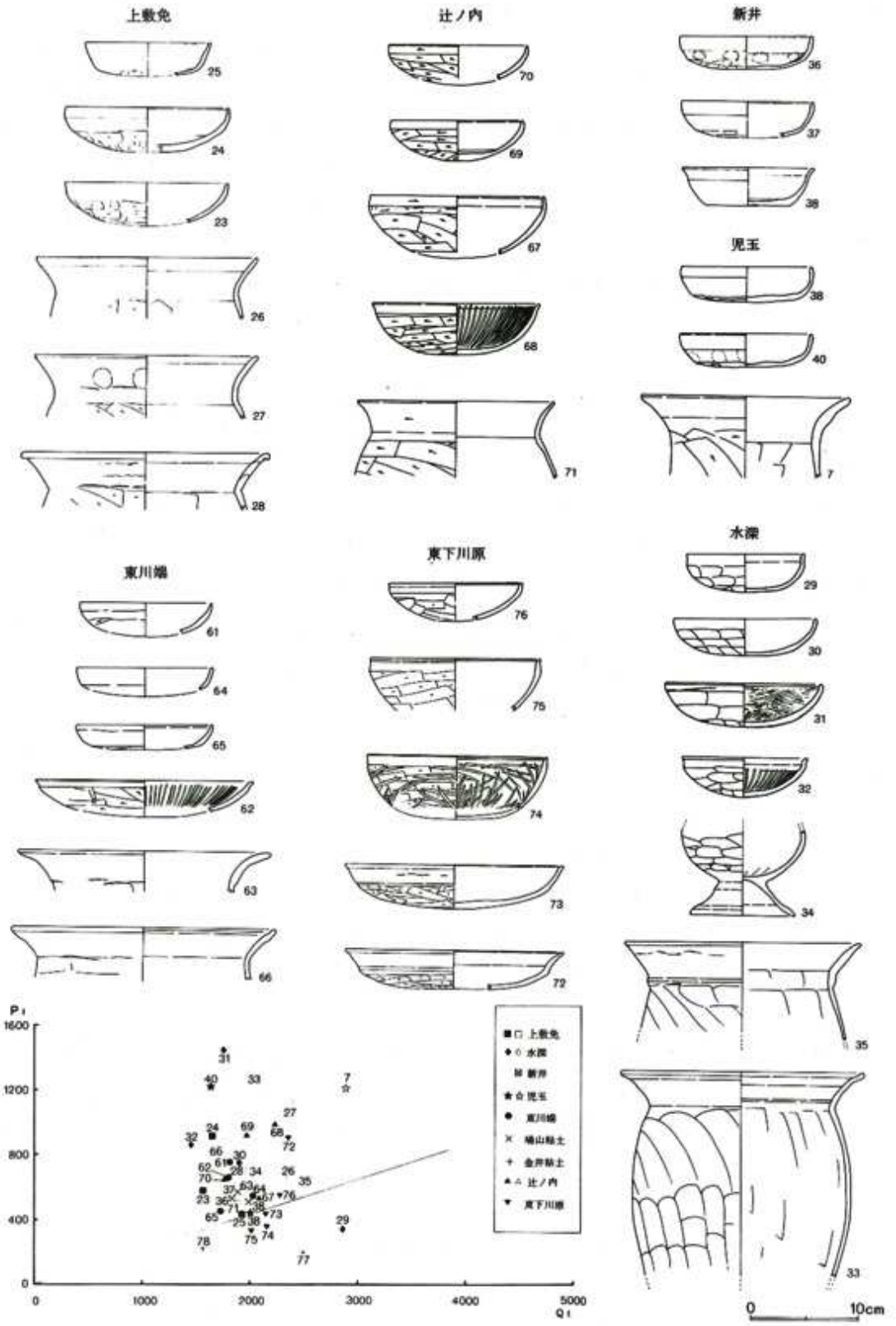
土師器甕は古墳時代以来の伝統的な形態である比較的厚手の甕で縦ヘラケズリを施すものについては白色針状物質が明瞭に観察できた。一応、C区61号住居跡から出土した甕(第445図7)が在地品としては最も新しい段階に位置づけられるものの一例と考えている。これは形態的にやや異例に属するものであるが、器壁は厚く胎土に白色針状物質が明瞭に含まれていた。伴出土器から時期は8世紀前半であろう。他方、8世紀前半～9世紀代に位置付けられる武蔵型甕の系列にある比較的薄手の甕には、肉眼観察による限り白色針状物質の明瞭に含まれるものはほとんど認められず、そのほとんどが他地域から供給された可能性が高いものと推定された。但し、いわゆる「コ」の字甕の段階になると一部に白色針状物質を含む在地品が再び出現する模様である。更に武蔵型甕の退化形態ともいえる「く」の字状口縁で厚手の甕には確実に白色針状物質が含まれていた。

稲荷前遺跡を一つのケーススタディとして、古墳時代後期～平安時代に至る土師器の供給体制を捉えると、7世紀～8世紀初頭までは比企型坏に象徴される在地産土師器(坏・甕)が主として供給され、少量の北武蔵型坏が搬入される。8世紀前半頃を境に在地産土師器はほぼ消滅し、9世紀後半頃に至るまでの間は供膳器は須恵器坏類に取って代わられ、煮沸具としての土師器甕は非在地産の武蔵型甕が供給された。ところが、9世紀後半頃になると再び在地産の甕が一部復活し、武蔵型甕の退化する段階(XIV期)以降は在地産の甕に主役を交代するものと考えられる。こうした現象は「供膳器に須恵器を充当した主に南部地域では、土師器生産は行われず、煮沸器である土師器甕も他地域から供給した」(中村1984)という中村の指摘とほぼ一致する。つまり、「武蔵型甕の型式的連続性が崩壊した段階」(鈴木1983)を契機として武蔵型甕の供給が何らかの理由で停止したために、日常の煮沸具として不可欠の甕を在地において生産するようになったのではないかと考えることもできる。こうした仮説の当否について、今回、一つの方法として胎土の科学的分析から検証することを試みた。

分析対象は稲荷前遺跡から出土した土師器坏と土師器甕である。土師器坏はいわゆる比企型坏、比企型坏の系譜を引くであろう土器群(続比企型坏とした)、北武蔵型坏の3タイプを取り上げた。




第623図　胎土分析資料(土師器)と分析値




第624図　胎土分析比較資料

土師器甕は古墳時代タイプの縦ヘラケズリを施す甕、武蔵型甕の系譜に連なるもの、武蔵型甕の退化形態(くの字状口縁甕とした)に大きく分け、それらの中からある程度時期差を反映する資料をいくつか選択した。比較資料としては深谷市上敷免遺跡・同市東川端遺跡・加須市水深遺跡・岡部町新井遺跡・児玉町辻ノ内遺跡・川越市東下川原遺跡といった「土師窯」が検出された遺跡から出土した資料と児玉工業団地内遺跡出土資料を井上巌氏のご厚意により分析していただいた(註1)。

第623図には胎土分析に供した稲荷前遺跡出土土器とQT－PL相関図を掲載した。散布図の縦軸はPL(長石)、横軸はQT(石英)値を表している。それによれば、非在地産と考えた北武蔵型坏と武蔵型甕は分布域が概ね重複し、相対的に長石比が高く石英比が少ない傾向にあることがわかる。一方、在地産及至その可能性が高いと考えた古墳時代タイプの甕、比企型坏、続比企型坏、「く」の字状口縁甕は長石比が低く、石英比が高い傾向が認められ、明確に分布域を異にする。すなわち、前者はグラフの左上(仮に北武蔵領域と呼ぶ)、後者は右下(仮に南比企領域と呼ぶ)に分布するという結果となった。なお、グラフ内の斜線は両者の境界を大まかに示すため筆者が意図的に引いたものである。

まず甕から見ると、12～14・19・49は古墳時代タイプの胴部に縦ヘラケズリを施すもので、時期的には7世紀～8世紀初頭段階に位置付けられる。19については肉眼観察では不明瞭であったがその他の甕には胎土中に白色針状物質が明瞭に認められる。分布領域は全て南比企領域である。

15～18・20・21・41・43・45～48・50・53は武蔵型甕の系列に属するタイプで8世紀前半～9世紀後半頃までの資料である。これらのQT－PL相関を見ると、43・45・50を除くと相対的に長石比が高く、石英比が低い北武蔵領域に属する。45・50は境界線からやや南比企領域内に、43に至っては完全に南比企領域内に分布している。白色針状物質の有無という点から見ても白色針状物質が含まれる43・45・50は南比企領域に、その他の含まれないものは北武蔵領域に属し、両者の相関関係は極めて明瞭である。武蔵型甕の中で異質ともいえる43・45・50の3点はいずれも口縁部が「コ」の字状を呈し武蔵型甕の型態変遷からみて最新の様相を示すものである。

42・44は取りあえず「く」の字状口縁甕としたものである。これは「コ」の字状口縁甕が衰退した段階で出現するタイプで、武蔵型甕に比して器壁が厚い点に特徴がある。相関図の分布域は南比企領域に包含され、胎土にも白色針状物質が明瞭に含まれる。

時期的に整理してみると7世紀～8世紀初頭頃までは在地産の甕が主体となり、8世紀前半頃～9世紀中葉乃至後半頃までは非在地産と考えられる武蔵型甕で構成され、9世紀後半以降、「コ」の字甕及びその退化した甕の段階に再び在地産甕が出現し10世紀段階まで継承されるものと考えられる。付言すれば、C区87号住居跡出土の羽釜には白色針状物質が含まれており、「く」の字状口縁甕以降も在地産甕が生産されていたことは確実である。

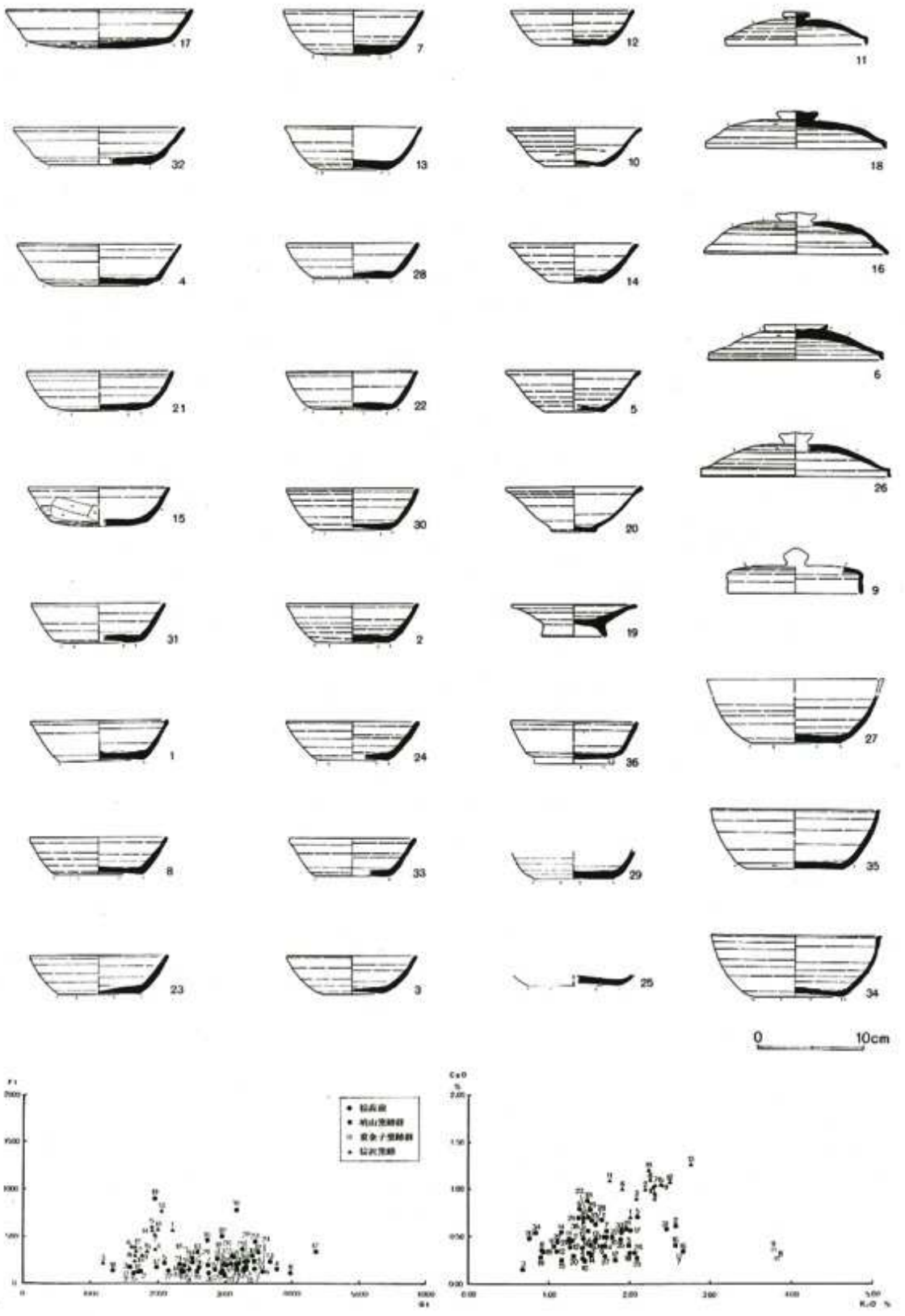
次に土師器坏についてみてみたい。1～4・52・55～57・60は比企型坏及び模倣坏系比企型坏、5・6・51・58・59は続比企型坏としたものである。何れも分布域は南比企領域にあり、比較的まとまりはよい。続比企型坏は比企型坏に比して素地土が緻密で、白色針状物質が少ないものがあるが、分布域としては南比企領域に属する点は注意される。7～11は北武蔵型坏で、比企型坏系土器群に対して長石比が高く、石英比が低い傾向にあり分布域は図上の左上(北武蔵領域)に位置する。このタイ

プには白色針状物質が含まれるものは確認できず、全て他地域から搬入された土器群と思われたが分析結果もそれを支持するものといえよう。有段口縁坏については在地産が一定量を占めるのに対し、北武蔵型坏には在地における形態模倣が見られないことは興味深い点の一つである。何れにせよ、比企型坏系土器群と北武蔵型坏とは肉眼観察による相違通り、胎土分析によっても分布域が異なることが判明したわけである。

続いて県内の土師窯出土資料の胎土分析結果と比較してみたい(第624図)。北武蔵型坏及び武蔵型甕を焼成したとされる遺跡は上敷免遺跡(庄野ほか1978)、東川端遺跡(瀧瀬1990)、辻ノ内遺跡(鈴木・恋河内1991)、新井遺跡(佐藤1972)、水深遺跡(栗原ほか1972)がある。児玉工業団地出土土器は集落遺跡であるが参考とした。基本的に同系列の土器群で位置的には辻ノ内遺跡に近接している。第624図をみると、水深遺跡出土土器(29)を除くと、ＰＬ値400～1600、ＱＴ値1500～3000の範囲内に比較的良く纏まって分布することがわかる。遺跡毎に見ると、新井遺跡出土土器の３点が集中する以外は特に強い集中度を示す遺跡は認められず、遺跡単位の特徴を見いだすのは現状では難しいと言わざるを得ない。しかし、先述した分布範囲は稲荷前遺跡出土土器の分析図で北武蔵領域とした分布範囲にほぼ一致するもので、とても偶然の産物と言えるものではない。稲荷前遺跡の北武蔵型坏及び武蔵型甕はこれら広義の利根川水系に位置する土師器焼成遺跡からもたらされた可能性は極めて高いものと考えて良かろう。

東下川原遺跡は川越市的場に所在する遺跡で、詳細な検討は報告書の刊行を待たねばならないが、比企型坏系土器群の焼成遺構が未発見のなかで、唯一その可能性をもつ遺跡と推定される。時期的には８世紀を前後する段階が主体になると思われる。第624図72～76がそれであるが、ＱＴ－ＰＬ値は北武蔵領域と南比企領域の境界線を挟む範囲に分布している。北武蔵型坏と比較するとＰＬ比が相対的に少なく、主体は南比企領域に属するものと見て良いであろう。稲荷前遺跡から出土した6・51は形態・胎土及び色調が東下川原遺跡出土土器と極めて類似しているばかりか、分析値も非常に近い範囲に分布している点は両者の関連性を指し示すものとして注目される。本遺跡から出土した続比企型坏の産地の一つとして東下川原遺跡、またはその周辺地域が有力候補となるものと考えている。川越市霞ヶ関遺跡92号住居跡からも類似した坏類が纏まって出土しているが、その多くは至近距離にある東下川原遺跡からもたらされた可能性は十分想定されよう。同種の坏は坂戸市若葉台遺跡をはじめ、東松山市大塚原遺跡など入間北部から比企郡南部までは確実に広がりをもち、本遺跡周辺の在地産土師器終末段階の様相を知るうえで鍵を握る遺跡と言っても過言ではなかろう。

このように、稲荷前遺跡出土の土師器は、主として白色針状物質の有無により北武蔵型坏・武蔵型甕グループ、比企型坏・続比企型坏・古墳時代タイプの甕のグループに大きく２分され、それぞれが胎土分析によって北武蔵領域と南比企領域に分布域を異にすることが判明した。こと土師器に関しては肉眼観察による産地推定と胎土分析の結果が極めて良好に対応し、当初の目論見通り、仮説の妥当性が胎土分析によって検証されたものと考えている。胎土分析の有効性という視点から見れば、現状の分析方法においても取りあえずタイプ別の領域設定が可能となり、今後他遺跡資料との比較が可能となったわけで、北武蔵型坏や武蔵型甕の流通問題を考えるうえで一定の指標となろう。今後、より一層の基礎資料の充実を図り、土師窯及び集落出土資料を分析するなかで更に検証




第625図　胎土分析資料(須恵器)と分析値

する必要があろう。

分析結果を踏まえて土師器生産と流通という側面から見ると、次なる問題は8世紀前半を画期としてなぜ在地産土師器の生産が停止したのか、土師器生産が復活する契機は何なのかという点、そして武蔵型甕や北武蔵型坏の生産と流通の在り方を如何に捉えるかという点にある。おそらく須恵器生産の本格化が背景にあることは間違いないところであるが、土師器生産との関係においてその実態が解明されたとは言いがたい。今後の課題としておきたい。

須恵器

稲荷前遺跡から出土した須恵器のうち、供膳器を主体に36点抽出し分析を試みた。ほとんど全てが白色針状物質を胎土中に含む製品で肉眼的にみて広義の南比企窯跡群産と考えて良いものである。分析目的としては南比企窯跡群産として一定の纏まり(領域)をもつか否か、そして末野窯跡群や東金子窯跡群産須恵器がそれぞれ異なる領域設定が可能なのかどうか、換言すれば須恵器の産地同定としての胎土分析が有効か否かという点の検証にあった。比較資料として南比企窯跡群の代表的な窯跡群である鳩山窯跡出土土器及び粘土(註2)、東金子窯跡群産と思われる坂東山西遺跡出土土器、広義の末野窯跡群に含まれる桜沢窯跡出土土器と瓦を取り上げていただいた。

第625図には稲荷前遺跡から出土した胎土分析に供した土器とその分析値を示した。下段左図にはQt－Pℓ相関図、右図は$K_2O$－CaO相関図を掲載した。Qt－Pℓ相関図を見ると稲荷前遺跡と鳩山窯跡群、東金子窯跡群産須恵器は長石比が低く、石英比の多寡によって図上では横に長く分布している。一方桜沢窯跡群産須恵器は長石比が相対的に高く、石英比が低い傾向にあり、これらの窯跡群の中では比較的纏まりが強いことが指摘できるであろう。その意味では桜沢窯跡群産須恵器と南比企乃至東金子窯跡群の違いを同相関図によって求めることは可能かもしれない。但し須恵器の場合、焼成温度が高いために長石がガラス化し本来の組成が変化する可能性があること、更に、桜沢窯跡群は時期的に新しく焼成も相対的に甘いものが主体を占めることから、必ずしも末野窯跡群の特徴を典型的に表しているとは言いがたい点がある。土器本来の組成が大幅に変わる可能性のある物質を分析指標にすること自体にも若干問題が残されているのかもしれない。Qt－Pℓ相関図のみでは、少なくとも南比企窯跡群産須恵器を他の窯跡から識別する有効な分析方法たり得ないといわざるを得ないであろう。そのため、いくつかの化合物を基にした相関図を作成していただいたが、その中で南比企、東金子、末野窯跡群の分布域が比較的明瞭に分かれる酸化カリウム・酸化カルシウムの相関($K_2O$－CaO)図が注目される。稲荷前遺跡と鳩山窯跡の南比企窯跡群産須恵器が比較的集中度が高く、桜沢窯跡や東金子窯跡も分布域が異なる可能性をもつ。まだ末野窯跡群産須恵器と東金子産須恵器の母資料が少なく、窯跡群の組成分布域が明確にできない点に最大の難点があるが、今後資料の充実によって有意の差であるのかどうか判断されるべきであろう。

今回、土師器と須恵器の産地同定を目的とした胎土分析を行った。土師器については一定の成果を挙げることができたが、須恵器に関しては残念ながら現状のままで産地同定に生かすことは難しい面もあるようである。我々調査者と分析機関が連携して、最低限主要窯跡資料を積極的に収集し、その組成と特徴を把握することが早急に求められているといえよう。そして更に有効な分析方法が

開拓されることを念じたい。

註1　上敷免遺跡については深谷市教委澤出晃越氏、水深遺跡はさきたま資料館小川良祐氏(当時)、新井遺跡は岡部町教委鳥羽政之氏・平田重之氏、辻ノ内遺跡は児玉町教委鈴木徳雄氏、東下川原遺跡は鶴ヶ島市遺跡調査会斉藤稔氏、早川由利子女史のご厚意により資料を提供していただいた。東下川原遺跡からは多量の土師器坏類が集積した遺構が検出され、土師器焼成遺構となる可能性がある(斉藤・早川氏のご厚意により筆者実見)。

註2　鳩山町教育委員会渡辺　一氏の御厚意により資料を提供していただいた。

**引用・参考文献**


井上尚明　1989　「古代集落遺跡の再検討－郡衙・郷家・一般集落」『研究紀要』第5号　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

井上尚明　1991　「郷家に関する一試論」『埼玉考古学論集』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

井上　肇　1978　『舞台』埼玉県遺跡発掘調査報告書第17集

伊藤研志　1981　『勝呂廃寺』坂戸市勝呂廃寺跡範囲確認調査概報　坂戸市教育委員会

今井　宏　1980　『児沢・立野・大塚原』埼玉県遺跡発掘調査報告書第28集

上村和直　1983　「南春日町遺跡の小型瓦」『古代研究』25・26　(財)元興寺文化財研究所

加藤恭朗他1987　『古代の坂戸－坂戸市遺跡発掘調査概報Ⅰ－』　坂戸市教育委員会

加藤恭朗他1988　『坂戸市遺跡群発掘調査報告書第Ⅰ集』　坂戸市教育委員会

加藤恭朗他1989　『若葉台遺跡－若葉台遺跡発掘調査報告書Ⅰ－』坂戸市遺跡発掘調査団

加藤恭朗他1990　『坂戸市遺跡群発掘調査報告書第Ⅱ集』　坂戸市教育委員会

加藤恭朗他1991　『坂戸市遺跡群発掘調査報告書第Ⅲ集』　坂戸市教育委員会

加藤恭朗他1993　『坂戸市史』古代史料編　坂戸市教育委員会

栗原文蔵他1972　『水深』　埼玉県遺跡調査会

恋河内昭彦1991　『辻ノ内・中下田・塚畠・児玉条里遺跡』児玉町文化財調査報告書第15集

小久保徹　1981　『桜山古墳群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第2集

後藤健一　1989　「湖西古窯跡群の須恵器と窯構造」『静岡県の窯業遺跡』静岡県文化財調査報告書第42集

後藤健一　1991　「3　須恵器の編年　5東海」『古墳時代の研究』6土師器と須恵器　雄山閣

埼玉県　1984　『新編埼玉県史』資料編3　奈良・平安

埼玉県　1987　『新編埼玉県史』通史編1　原始・古代

斉藤 稔他 1979　『若葉台遺跡群 第一次発掘調査概報』若葉台遺跡C地点　鶴ヶ島町教育委員会

斉藤 稔他 1980　『若葉台遺跡群 第二次発掘調査概報』若葉台遺跡D・E地点　鶴ヶ島町教育委員会

斉藤 稔他 1983　『若葉台遺跡群発掘調査報告書』　鶴ヶ島町教育委員会

斉藤 稔他 1984　『若葉台遺跡群 A・B・B地点南』　鶴ヶ島町教育委員会

酒井清治　1982　『緑山遺跡』　日本住宅公団高坂丘陵地区埋蔵文化財発掘調査報告－Ⅶ－　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第19集　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

酒井清治　1986　「北武蔵における7・8世紀の須恵器の系譜について－立野遺跡の検討を通して－」『研究紀要』第8号　埼玉県立歴史資料館

酒井清治　1989　「古墳時代の須恵器生産の開始と展開」　『研究紀要』第11号　埼玉県立歴史資料館
笹生　衛　1990　『平安前期の村落とその仏教』資料　房総風土記の丘資料館
佐藤忠雄　1976　『水窪・新井遺跡の調査』岡部町教育委員会
庄野靖寿・蛭間真一　1978　『上敷免遺跡』深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書
鈴木徳雄　1983　「古代北武蔵における土師器製作手法の画期」『土曜考古』第７号　土曜考古学研究会
鈴木徳雄　1984　「いわゆる北武蔵系土師器坏の動態」『土曜考古』第９号　土曜考古学研究会
鈴木徳雄　1991　「古代児玉郡における集落設営の計画性」『辻ノ内・中下田・塚畠・児玉条里遺跡』児玉町文化財調査報告書第15集
高井悌三郎他　1982　『播磨千本屋廃寺』山崎町教育委員会・千本屋廃寺発掘調査団
高橋一夫　1979　「計画村落について」『東国集落遺跡の検討』古代を考える20
瀧瀬芳之　1990　『東川端遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第94集
谷井　彪　1973　『山田遺跡・相撲場遺跡発掘調査報告』埼玉県遺跡調査会報告第18集　埼玉県遺跡調査会
富田和夫　1992　『稲荷前遺跡（Ａ区）』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第120集
中村倉司　1984　「古代北武蔵における供膳器の様相」『土曜考古』第９号　土曜考古学研究会
西川　制　1989　『若葉台遺跡群－Ｓ地点発掘調査報告書－』　鶴ヶ島町遺跡調査会
西口壽生　1993　「飛鳥・藤原地域出土の須恵器」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東２　須恵器－』
坂野和信　1982　「北武蔵における古代瓦の変遷」『埼玉県古代寺院跡調査報告書』　埼玉県史編さん室
昼間孝志　1991　『塚の越遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第101集
福田　聖　1993　『大沼遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第133集
松本修自　1984　『小建築の世界』飛鳥資料館図録第12冊
水口由紀子1989　「いわゆる〝比企型坏〟の再検討」『東京考古』第７号
山田邦和　1988　「飛鳥・白鳳時代須恵器研究の展望」『古代文化』第40巻第６号　財団法人古代学協会
横川好富他　1980　『甘粕山』　埼玉県遺跡発掘調査報告書第30集　埼玉県教育委員会
渡辺　一　1988　『鳩山窯跡群Ⅰ』鳩山窯跡群遺跡調査会・鳩山町教育委員会
渡辺　一　1990　「南比企窯跡群の須恵器の年代」『埼玉考古』第27号
渡辺　一　1990　『鳩山窯跡群Ⅱ』鳩山窯跡群遺跡調査会・鳩山町教育委員会
渡辺　一　1991　『鳩山窯跡群Ⅲ』鳩山窯跡群遺跡調査会・鳩山町教育委員会
渡辺　一　1992　『鳩山窯跡群Ⅳ』鳩山窯跡群遺跡調査会・鳩山町教育委員会

# 附篇

## （1） 稲荷前遺跡出土土器胎土分析（土師器）鑑定報告

（株）第四紀 地質研究所　井上巌

目　　次

1　実験条件
2　実験結果の取扱
3　X線回折試験結果
　3－1　タイプ分類
　3－2　石英－斜長石の相関について
4　まとめ

図　表　目　次

第1図　三角ダイヤグラム位置分類図
第2図　菱形ダイヤグラム位置分類図
第3図　Mo－Mi－Hb三角ダイヤグラム
第4図　Mo－Ch、Mi－Hb菱形ダイヤグラム
第5図　Qt－Pl図（総合図）
第6図　Qt－Pl図（稲荷前遺跡）
第1表　胎土性状表
第2表　タイプ分類一覧表

X線回析試験及び電子顕微鏡観察

### 1　実験条件

1－1　試料

分析に供した試料は第1表胎土性状表に示すとおりである。

X線回析試験に供する遺物試料は洗浄し、乾燥したのちに、メノウ乳鉢にて粉砕し、粉末試料として実験に供した。

電子顕微鏡観察に供する遺物試料は断面を観察できるように整形し、φ10 m/m の試料台にシルバーペーストで固定し、イオンスパッタリング装置で定着した。

1－2　X線回析試験

土器胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物の同定はX線回析試験によった。測定には日本電子製JDX－8020X線回析装置を用い、次の実験条件で実験した。

Target: Cu, Filter: Ni, Voltage: 40Kv, Current: 30mA, ステップ角度：0.02°
計数時間：0.5ＥＳＣ。

1－3　電子顕微鏡観察

土器胎土の組織、粘土鉱物及びガラス生成の度合についての観察は電子顕微鏡によって行った。
観察には日本電子製Ｔ－20を用い、倍率は35、350、750、1500、5000の５段階で行い、写真を撮影した。
35～350倍は胎土の組織、750～5000倍は粘土鉱物及びガラスの生成状態を観察した。

**2　実験結果の取扱い**

実験結果は第１表胎土性状表に示すとおりである。
第１表右側にはＸ線回析試験に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の組織が示してあり、左側には、各胎土に対する分類を行った結果を示している。
Ｘ線回析試験結果に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現われる各鉱物に特有のピークの高さ（強度）をｍ/ｍ単位で測定したものである。
電子顕微鏡によって得られたガラス量とＸ線回析試験で得られたムライト(Mullite)、クリストバーライト（Cristobalite）等の組成上の組合せとによって焼成ランクを決定した。

2－1　組成分類

1）　Mo-Mi-Hb 三角ダイアグラム

第１図に示すように三角ダイアグラムを１～13に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表した。
Mo、Mi、Hb の三成分の含まれない胎土は記載不能として14にいれ、別に検討した。三角ダイアグラムはモンモリロナイト(Mont)、雲母類(Mica)、角閃石(Hb)のＸ線回析試験におけるチャートのピーク高を、パーセント(%)で表示する。
モンモリロナイトは Mo/Mo＋Mi＋Hb＊100でパーセントとして求め、同様に Mi, Hb も計算し、三角ダイヤグラムに記載する。
三角ダイアグラム内の１～４は Mo、Mi、Hb の３成分を含み、各辺は２成分、各頂点は１成分よりなっていることを表している。
位置分類についての基本原則は第１図に示すとおりである。

2）　Mo-Ch, Mi-Hb 菱形ダイアグラム

第２図に示すように菱形ダイアグラムを１～９に区分し、位置分類を数字で記載した。記載不能は20として別に検討した。
モンモリロナイト(Mont)、雲母類(Mica)、角閃石(Hb)、緑泥石(Ch) の内、ａ）３成分以上含ま